月刊ワーQショップ

二〇二四年　四月一日　発行

第十一号

一番

第十一号　テーマ

六法踏子　（旧：H）
すめらぎまいこ　（旧：エム）
Riemerschmid　（旧：Rie）
梶見エミルカ
大和なげしこ　（旧：A）
ゆか
かなみ
ユウサク
ニンジャ青年
Zyy　（旧：SONICMOVE）
ゆき
みう　［新］
？？？？　［Member's only］
九折空也
特別巻末付録

第十一号

〜ごあいさつ〜

今回は思いがけない実験的な取り組みに、みなさまをご案内したいと思います。読み手として好奇心からこのような書き話しにこころを傾けてくださる方も、どうぞご一緒に、内心では同じように取り組んでみてください。きっと面白く、見逃せない発見があるものと存じます。

いまからそれぞれに語られることの主題は、前もってこのように決定されています。

「いちばん大切なのは作品です」

前もって、語られる主題が決定されているということ。いちばん大切なのは作品、あるいは話、あるいは物語だ。そのことしか語られないと、前もって決められています。いちばん大切なのは作品であって、話であって……そしてわれわれは、そのいちばん大切なものを見失ったり、おろそかにしたりすることで、不安やうしろ暗さにむしばまれていく。だから、われわれがそのことを見失わないかぎり、またおろそかにしないかぎり、われわれは不安になったり、うしろ暗さにむしばまれたりすることはないのだ……

それぞれが自由に語り出すにおいて、前もって語られるべきことが決定されている。そのことは書き手に制約を加える不自由なことでしょうか。いいえ、そうではないということをご説明申し上げたく思います。ささやかな自負を誇るとすれば、わたしは作文のノウハウについてみなさまよりきっと一日の長があるでしょう。わたしは一般にはあまり知られていないことをみなさまにお話しすることができます。

われわれが自由に書いてよい、自由に話してよいというとき、われわれが第一に本心や本音を思うまま書き連ねようと発想することは、われわれにとって決して自由なことではないのです。むしろその逆、われわれを支配して縛りつけるものこそ、その本心や本音なのだということを、われわれは見抜かなくてはなりません。

たとえば二十歳の青年が、アルバイトでレジ打ちの勤務中だったとします。そのとき彼の本心や本音には、「疲れた、早く帰りたい」という思いがたしかにあるかもしれません。あるいは二十歳の女性が、「もっと美人だったらよかったのに、自分の顔がいまいちで悲しい」と思っていたとします。それだって彼女の本心や本音かもしれません。あるいはここに五〇歳の男がいたとして、「とにかく酒を飲んで寝ていたい、あるいは犯罪でもいいから好き放題をして自分だけいい思いをしたい」などという不埒なことを空想していたりすることもあるかもしれません。それだって彼の本心や本音ということになりそうです。

この三人が、それぞれにそれを「本音」だといって、口々に叫びだしたとしたら、そのことはわれわれにとって何かがよく語られたということになるでしょうか。「ダルい！　早く帰りたい」「自分がブスで死にたい！」「目についた奴を襲ってしまいたい！」誰もそのようなありさまをもって、人々のあいだに何かがよく語られたとはみなさないわけです。つまりわれわれにとって「本音の漏出」は、自由の獲得ではなく、その逆、本音の支配に魂が屈服した者の酸鼻な悲鳴にすぎません。自宅のクローゼットがもう少し広ければいいのにという本音を持たない人はこの世にいないと思いますが、いっぽうであなたのクローゼットの戸を開くなら、そこにあなたの服と、それに付随するたくさんの思い出があるのではありませんか。そのことのすべてを見失って、「もう少しクローゼットが広ければいいのに！」という悲鳴ばかりをあげるということは、何ら自由なことでもないし、豊かなことでもない、さらには正当なことでさえないのです。

「クローゼットの中には思い出がある」、たとえばそのように、前もって語られることが決定していればいいですね。反面だれだって、「いや、そんなに大した思い出はないけれど……」と本音では思うけれども、それを捨象するというのが大胆に言って作文のコツです。われわれに入り込んでいる誤解を解除しましょう。われわれは、たとえ雑文であってもウソを書くべきではありません。けれども、ウソを書かないということと、思いつく本音を漏出するというのはまったく別のことなのです。

二十歳の青年がクローゼットを開けると、生意気にも十万円もする革ジャンがハンガーに吊られています。彼はその革ジャンでカッコつけたくて、深夜までアルバイトを続けていたのでした。二十歳の女性がクローゼットを開けると、アイロンを当ててき

れいなままの高校の制服が吊られています。彼女は美人ではありませんでしたが、親しい友人がいて、無垢な青春がありました。彼女はいまもその続きにいるのです。五十歳の男性がクローゼットを開けると、そこには何も目立つものはなく乱雑です。目立つことのない地味な生き方をしてきたものだと思わされます。けれども目立つことが思い出というわけではありません。むかしの交際相手からもらったネクタイが、丸められたまま、しかし捨てられずに保管されています。むかし父親に教わった将棋を、いまはもうやらなくなりましたが、やはり将棋盤は捨てられないものとしてクローゼットの奥にひそんでいます。

　いちばん大切なものは、そうした「話」ではないでしょうか。クローゼットの広さが何平米かは主題ではないと思います。

　おとぎ話の「桃太郎」があったとして、大きな桃が川上からドンブラコ・ドンブラコと流れて来るというのは、われわれの「本音」ではないのです。ただそういう「話」だというだけです。われわれはこの根本的なことを教わっていないため、何かを自由に書き話すというと、思いつくままの「本音」のようなものをまき散らす発想になってしまうのです。

　桃太郎のようなおとぎ話・昔話の形態においては「鬼退治」が主題として定番ですね。ここで仮に、前もって主題が「鬼退治されて、めでたしめでたし」ということが決められていたとしたらどうでしょう。そこから書き話される物語は、桃太郎であってもかまいませんし、ドラゴンクエストでもかまいません。ですから前もって主題が決定していることは、書き手の自由を束縛するものではないのです。

　さらにはこう考えてみましょう。あなたにとって「一番」大切なものは何でしょうか。そんなこと、にわかに決定できるわけがありません。仕事が大切といっても、健康を致命的に失えば仕事どころではなくなってしまいます。では健康がいちばん大切なのかといって、周りの人たちぜんいんに嫌われて、その中で自分だけ「元気、元気」では何らよろこばしいとは思えません。では周りの人たちぜんいんに好かれる・愛されるのがいちばん大切なのかというと、「じゃあチワワにでも生まれたらよかったね」ということになってしまいます。それでもうチワワになってしまいたいと言い出すような人は、むしろ大切なものを見失ってしまってやけくそを言っているだけの人でしょう。

　ですから、いちばん大切なものが何かなんて、にわかに決定できるはずがないのです。しかしそのことを承知の上で、これから語られることはすでに決定しています。いちばん大切なものは作品であり話であると。

　それがわれわれの「話す」ということの妙味なのです。

「いちばん大切なのは、作品です。話です、物語です」

「そのいちばん大切なものを見失い、おろそかにすると、不安やうしろ暗さにむしばまれていきます」

「それをおろそかにしないかぎり、われわれに不安やうしろ暗さはない」

　それではこの妙味の方法に基づいてわたしがサンプルを示しましょう。たとえば牛丼屋の話をします。牛丼屋といって、第一に思い浮かぶのはやはり「吉野家」です。牛丼単体でいうと吉野家がいちばん旨いように思います。けれども「すき家」のカレーまで含めると、すき家も同等に魅力があります。

【作例A】

　みなさんこんにちは。

　いちばん大切なのは「作品」です。

　それはともかくとして、わたしは、最近よく牛丼屋のお世話になっています。

　やっぱり牛丼そのものでいうと、吉野家が旨い気がします。

　でも、すき家も、カレーが旨いので、そのことまで含めると、吉野家と同等の力があると思います。

　今日はどっちにしようか、ううむ……といつも悩まされています。

　そうして毎日ぼけーっと牛丼を食っているだけだと、人生が不安になってきそうです。

　でもそれは、いちばん大切なものを見失っているからであって、牛丼のせいではありません。

　いちばん大切なものは作品、話、物語です。それに向かうためにメシを食っている。

　それに向かうために牛丼を食っているのであって、どうせ食うならより旨いほうがいいのであって、それで、今日はどっちにしようか、ううむ……と悩んでいるのです。いちばん大切なものを見失ってはいません。

そうして、いちばん大切なものを見失わない・おろそかにしないかぎり、何を食っていても不安にはなりません。うしろ暗さもない。

仮に、生まれつきお金持ちで、毎日ずっと最高級のシャトーブリアンばっかりを食べていても、いちばん大切なものを見失って・おろそかにしていたら、生きていることは不安でうしろ暗くなっていくでしょう。

あなたは吉野家とすき家、どちらが好きでしょうか。

ううむ……

それではまたお会いしましょう。

作文なんてこんなものでよいのです。何が語られるか、その主題は前もって決められています。ではここに語られたものには書き手の不自由さがにじみ出ているでしょうか。あるいはこの書き手は何か不潔な「ウソ」をこの雑文に書いたでしょうか。どうもそのようには思えないはずです。

主題は「いちばん大切なものは作品、それを見失うから不安になる」ということです。それにしても、その主題は本文中でねちっこく語られたでしょうか。いいえ、この書き手が熱意をこめて書き話したのは牛丼のほう、食べ物のほうです。主題についてはほとんど何の説明もしていません。読んだ側に残る印象も、あきらかに「吉野家 vs すき家」のバランスばかりでしょう。

けれども、それでも主題はちゃんと主題として機能しています。これがわれわれの本来の「話」という機能なのです。これに対して、われわれが自分の頭の中でぐるぐると「本音」を検索するというはたらきは、単純にいって作業として誤りなのでした。

さらにはこのように考えてみましょう。前もって決められている主題をこのようにしてみます。

「いちばん大切なことは、わたしの嫌いなあの人ができるかぎり苦しむことです」

このような不穏な主題が、この人の本音であるかどうかは関係ありません。ただ仮にそのような主題をもって同じように作文をすればどうなるか。

[作例B]

みなさんこんにちは。

いちばん大切なのは、わたしの嫌いなあの人ができるかぎり苦しむことです。

それはともかくとして、わたしは、最近よく牛丼屋のお世話になっています。

どちらもチェーン店ですが、A店とB店、今日はどっちにしようか、といつも悩まされています。

いちばん大切なことはあの人が苦しむこと。それに向かうためにご飯を食べています。

仮にわたしが、生まれつきお金持ちで、毎日ずっと豪勢に遊んでいても、同じだったでしょうね。

それではまたお会いしましょう。

このように、主題がその人の本音であろうがあるまいが、じっさいの作文としてこのように大きな変化が生じました。構成は、はしょりましたがだいたい同じです。牛丼屋の話をしている。構成は同じなのに、文章の全体は大きく変化しています。

あなたは作例Bを、仮にも自分の書いたもの、自分の書き話したものですとして人に示すのはイヤでしょうし、じっさいそのような文章を仮にでも書くことには抵抗があると思います。じっさいにボールペンを手に取って、メモ帳の端にでもこう書こうとするのです。「いちばん大切なことは、わたしの嫌いなあの人が苦しむことです」。じっさいにそのような文字を紙面に書くということには、大きな抵抗とためらいがあり、あなたはきっとそのようなものを書かないと思いますし、仮に書いたとしてもただちに紙を丸めてくずかごに捨てると思います。慌てて否定的な、「いまのなし」と唱えるここちで。

なぜこのようなことが起こるのか。これは、主題を書き話すということそのものが、何かしらの直接作用を深く持っているということを意味しています。何らの作用もないのであればわれわれはそのことに抵抗など覚えないのですから、抵抗があるということは作用があるということに違いありません。

ですので、作例Aのほうの主題、「いちばん大切なのは作品です、話です」と書き話すことも、そうして主題を書き話すことじたいに直接作用があると言いうるのです。その直接作用は、人それぞれの本音がどうこうということと関係がありません。

何かにもともと書かれているものを書き写したということではなく、ただ自分がそのように書いたということ。自分が書き話そうとしたということ。そのことじたいに直接作用があり、この作用の中に立ち続けて進むのであれば、自分はその先に何を発見

していくだろう？　ということが、われわれに具わっている本来の「話」の機能なのです。

そして、あなたが作例Bの主題をメモ用紙に落書きしようとしたときさえ、何かまがまがしさのような暗い作用を覚えてためらったように、作例Aの主題を書き話そうとするときにも、何かしらの作用を覚える必然性がある。つまり、本人の本音や思念によらずとも、然るべき主題を書き話すということじたいに、直接の輝かしい・明るい作用を受けることがありうるということです。あなたはじっさい作例Aの書き手から、それほど興味深い示唆を受けたわけではないですが、もし彼が続いて「丸亀製麺でのトッピングについて」を語り出そうとするなら、そのことを待ち受けて聞こうとする明るい構えを持っているのです。彼はふたたびこう語り出すでしょう、「いちばん大切なのは作品です。それはともかくとして……」

こんにちの状況下、われわれの精神は大きく不安でうしろ暗さに侵されているはずです。あまりそのことへのこころあたりはありませんが、こころあたりがないことのほうが奇妙だというべき状況です。新型コロナウイルスが世界中で猖獗を極め、われわれが生きるということは祝福ばかりではないということを数年間にわたって思い知らされました。その惨禍も収まりきらない中、ユーラシア大陸の向こうで大きな戦争がはじまり、その戦争は未だ終わるめどさえ見せてくれません。戦争が火を噴いたせいでわれわれの生活費は高くつくようになってしまいました。そして戦争の終結あるいはせめて戦闘の停止だけでもと祈念していたところ、それどころではない、さらに別の区域で別の戦争が始まってしまいました。どちらの戦争も、絵空事ではなく、現実的というよりさらに、当事者たちにとっては感情的なものでさえあるようです。それぞれの文化に対して向けられるべき寛容さはどこにも見当たらず、まるでどちらかが朽ち果てて力尽きるまでこの殺戮は終わらないのだと言わんばかりです。いまのところ、生活費が高くつく以外は、極東のわれわれにとっては対岸の火事だと昼行燈のふりをしようとしていますが、遠くとも悲痛と血腥さは無視しきれようもないことに加え、同じようなことが身近に飛び火してくる可能性があるじゃないかということが、誰の危機感にも黄色く点り始めています。

いっぽうでわれわれの文化圏はというと、これまでの人気者がやにわに週刊誌のスキャンダリズムに攻撃され、いつのまにかわれわれは週刊誌の同胞のごとく振る舞わなくてはならないようになりました。先日まで破顔して拍手を向けていた先に、なぜか張眉怒目して石を投げつけなくてはならないようになったのです。自分の裏切りと手のひら返しに、魂は深いうしろ暗さを感じています。前総理大臣は手製の銃で同国民に射殺され、愉快な人だと思われていたお笑い芸人は自死されました。今年は元日から巨大地震が起こって能登半島に壊滅的な被害をもたらしました。その中でわれわれは次々にサジェストされるショート動画を小さなモニタに観つづけており、さまざまなコンテンツに「推し」を持つことで日々の精神を艶めかせることができるというようにうそぶいていますが、このような状況でわれわれの精神に不安やうしろ暗さがないというのはまったくのウソだとわたしは断じたく思います。ただ、だからといって感情的に恐慌しても何ら力強い対抗策にはならない。われわれはどうしたらいいのでしょうか。

かかる状況下においてこそ、われわれは「いちばん」大切なものを主題にして語ることが必要だと思うのです。

もしすべての流血といさかいを、すべての悲痛な局面を、あなたが止められるものなら、あなたはとっくにそのことをしているでしょう。けれどもそうではない。あなたにそれを止めることはできないし、わたしにもそれを止めることはできません。止めることのできない局面が、次々と嵐のように、嘆こうとする速度さえも超えて、われわれの周囲も足許も激しく攫って行くようです。しかしいかなる嵐の中でも、われわれが主題を決定するという機能を手放さないのであれば。われわれのその「いちばん」のものだけは攫われません。あなたにとって「いちばん」大切なものは何でしょうか。いちばん大切なものなんて決められませんが、主題にすることはできるのです。そのことの実験的な試みがこれから展開されていきます。

ただのごあいさつが長くなり恐縮です。前もって決められた主題の向こうにわれわれは何を発見していくでしょうか、ご笑読ください。

二〇二四年三月六日　九折空也

〝九折さんのわたくし〟の「学生時代」があと数日

六法踏子

みなさまごきげんよう。

春めいてまいりました。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

私事ながら、ここにご報告させていただくべきことがございます。

わたくしは昨年、ついに念願の、司法書士試験に合格することができました。

九折さんのもとで勉強させてもらえたからこそだと、改めて痛感しています。

加えて、応援の気持ちを向けてくださった方々に、大いに援けられたこと、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

合格を知ったのは、昨年の十月のことです。法務局の掲示板に張り出された合格者発表の用紙の中に、自分の受験番号を見つけました。歓喜のなか、わたくしは真っ先にこのことを九折さんにご報告しました。

九折さんはわがことのように喜んでくださり、即座にワークショップの友人たちにも報せてくださりました。また、畏れ多くも、ご自身のブログ記事にまで、このことを書いてくださりました。

それからしばらく、連日にわたり、わたくしの携帯端末には、九折さんのブログ読者のかたからのメッセージが届きました。九折さんの粋なはからいによるものです。九折さんは、ブログ記事のなかで、読者のかたへ向けて、「Hさん」へ宛てたお祝いのコメントを送るよう、いつもの愉快な語り口で、呼びかけることをされました。それに応えるかたちで、実際にコメントを送ってくださるかたがいらっしゃり、そうして集まったコメントを、九折さんはわたくしへ転送してくださったのです。

連日届くメッセージは、明るく、力強く、あたたかいものでした。

わたくしのような者がふつうに生きていて、直接お会いしたことのない人からお祝いをしてもらえるなどということは、まずありえません。身に余るほどありがたいことでした。

メッセージをくださったかたのなかには、この月刊ワーQショップを手にとり、読んでくださっているかたもいらっしゃるだろうと思い、この場を借りて改めて御礼申し上げます。こころづくしのメッセージを、ありがとうございました。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

さて、身に余るほどの合格の歓喜もそのままに、わたくしは、余勢を駆って就職活動にも臨みました。昨年の冬のことです。

結果、恩恵まさにありがたく、なんと第一志望の企業から内定をいただくことができました。

このこともまた、九折さんのもとで勉強させてもらったからこそだと痛感しています。

就職面接の際には、あまり緊張せず、面接官のかたとお話しすることができました。のちに聞いたところ、面接官のかたも、「話が盛り上がった」と感じてくださっていたらしく、ありがたいことに予定されていた時間よりも三十分ほど延長して、こちらの話を聞いてくださっていたのでした。

ひとえに、九折さんがワークショップを通して、人前での振る舞いについて根本から鍛えてくださったことによるものと思います。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは、話であり、物語です。

おかげさまで第一志望の企業から内定をいただき、四月から司法書士としてのキャリアをスタートさせることになりました。いよいよ法律家としての一歩を踏み出すにあたり、身の引き締まる思いでおります。

かえりみれば、もともとわたくしは法律家を目指すようなタイプの人間ではありませんでした。自分の取り組むものを選択する際には、芸術もしくはスポーツの分野を好んで選ぶことが多かったように思います。大学時代の専攻は美術史でした。法学部の同級生が辞書のような分厚い本をリュックに詰めて、長時間の講義を聴きに大講堂へと走ってゆくのを、他人ごととして学生食堂のテラスから眺めていました。当時のわたくしにとって法律は「お堅い」

イメージのものであり、自分には縁遠いと感じられるものだったのです。この先入観は、大学を卒業して以降も変わりませんでした。

　そんなわたくしに、法律の道を歩ませてくださったのが九折さんでした。

　今から五、六年ほどまえのことです。ファミリーレストランでコーヒーを飲みながら、九折さんはわたくしの進路について相談にのってくださり、わが身のことのように考えてくださったのでした。このことを振り返ると、九折さんはなんと慈愛の深い方なのだろうと、改めて頭が下がります。

　当時わたくしは定職に就いておらず、十年先のプランなどはまったく白紙の状態でした。新卒で採用されて働いていた前職を辞めて四年近く経っていました。これからまた世の中の一員として社会に寄与し、食い扶持を稼いでゆくとして、どのような方法がありうるか、想像できませんでした。そのようなわたくしに対して、九折さんは奇特なおやさしさをもって向き合ってくださり、ideaを絞り出してくださったのでした。そのideaとは、何かしら専門分野の勉強をし、国家資格をとり、「士業」と呼ばれる職に就くことでした。

「士業」とは、弁護士や税理士など、特定の分野の専門職のことです。これらの職に就くには国家試験をパスし、資格をとる必要があるのでした。世の中には「士業」と呼ばれる職業があること、ゴールドカラーと呼ばれる働きかたがあることなど、九折さんは教えてくださりました。また、このような種類の職業が、資格を取得するための試験へ挑戦の過程も含めて、わたくしに合っているだろうというのが、九折さんの見立てでした。

　九折さんが話してくださることは、わたくしにとって、知らないことでした。はじめて聞く単語のオンパレードでした。未来が、まったく予想もしなかった方向にひらけていくのを感じました。自分がこれまで生きてきた世界には存在しなかった、未開拓なエリアの扉がひらかれるようで、わくわくしました。

　九折さんがおっしゃることに間違いはないという、絶大な信頼もありました。

　わたくしは法律の国家資格をとることに決めました。

　一番大切なのは作品です。

　一番大切なのは話であり、物語です。

　国家資格のなかでも法律の資格を目指すことにしたのは、「士業」についてのお話を聞いたときに真っ先に、大学時代にキャンパスで見た法学部生たちのことを思い出したからです。法曹を目指して勉強に励んでいた彼らの姿が、わたくしの大学生活の景色の中に、はからずも映り込んでいたようです。

　その後さらに情報収集をして検討し、法律の資格のなかでも、司法書士の資格をとることにしました。

　司法書士を選んだのは、試験の難度などさまざまな条件に加え、九折さんの遥かむかしのコラムに「司法書士」の語が書かれていたことが、記憶の片隅にあったからです。

　方針が決まり、九折さんにお伝えしました。九折さんは肯いてくださり、たまたま見つけたとおっしゃって、ひとつのニュース記事を送ってくださりました。そこには元アイドルの若い女性が一念発起して勉強し、司法試験に合格、弁護士になったという話が書かれていました。このようにして自分の道を切り拓いた人が実際にいるのだと、目の前に示された事実にはげまされました。

　九折さんがしてくださったことは、これだけにとどまりませんでした。

　わたくしは法律の勉強をはじめるにあたり、まず手始めに、簡単な入門書を読んでみることにしました。ちょうどよいものをインターネット上で見つけ、それをダウンロードしました。そのことを九折さんに報告したところ、なんと九折さんは、それをご自身のプリンターで印刷してやろうと申し出てくださったのです。お言葉に甘えて、わたくしは九折さんにpdfデータを送りました。

　数日後に九折さんは、わたくしに、手作りの冊子の形になった法律入門書を手渡してくださりました。九折さんが手づから製本までしてくださったのです。冊子には、九折さんご自身の書き物のために使用されている、貴重な用紙が使われていました。

　ひとりの人間の未来のためにそこまでしてくださる九折さんのやさしさについて、いま振り返っても心打たれ、ひたすらありがたいものと頭が下がります。

　一番大切なのは作品です。

　一番大切なのは話であり、物語です。

このようにして、九折さんに背を押していただくかたちで、わたくしは法律の資格取得に向けた勉強をはじめました。

教科書と過去問題集を買いそろえ、予備校の講義も受講しました。

いわゆる試験勉強に身を投げ込むことは、十代のころ以来のことでした。

勉強を本格的に始める手前の段階では、正直なところ、「十代の頃と同じか、それ以下の労力でなんとかなるだろう」と思っていました。恥を忍んで当時のあけすけな内心を申し上げると、「わたしが本気を出せば、こんなもの楽勝」とさえ思っていたのです。今となっては本当に恥ずかしい不遜さです。

ところが実際に取り組んでみたところ、十代の頃よりも遥かに大変な思いをすることになりました。

なぜ十代のころの受験勉強の時よりも苦労したのか。自分の知力や記憶力が衰えていたから、大人向けの資格試験のほうが内容が難しいから、などの可能性も考えられますが、それ以上に根本的な理由が思い当たります。それは、十代のころにはなかった自分の傲慢さです。当然、十代のころにも傲慢なところはあったのでしょうが、その時とは程度が比べ物になりません。ここ数年間で積み上げられてきた、山のようにそびえたつプライド、頑ななこだわりが、自分自身が勉強に向かうことを邪魔し続けたのです。

平成の終盤の十年間で、わたくしはよほど自分の自我を膨らませてきてしまったようです。いつのまにか、自分のやることを自分の「好き嫌い」で選び、気に入らないものには内心にでも注文をつけ、不満をもち、他の人の至らないと見えるものは無意識にでも見下し、いざ自分の実力が試されるとなると理屈をこねて逃げ出すという、とんでもない矛盾ばかりを抱えたプライドの化け物になっていました。

そんなわたくしが骨太の勉強に向き合わされることになったのだからそれはもう大変でした。そもそも「好き」ではない分野の教科書を読み、問題を解かなければならないことに、すでにうっすらと不満がありました。そのうえで少しでもわからなくて躓くところがあると、それだけでイライラさせられるのでした。人の情動のメカニズムとして、とても正常ではないのですが、実際にそのようになってしまっていたのです。

また、それまでまったく自分の中になかった学門体系を身に着けようとすると、身体感覚や精神構造にまで変化が生じるものです。そのことに抵抗がありました。

当時すでに九折‘ｓワークショップははじまっていましたが、そこでわたくしは、ある身体操作の技を習得しかけているように感じていました。しかし法律の勉強に身を入れて以降、身体感覚が変わったように感じられ、その技がまったくできなくなったのです。当然、そのようにして失われるのであれば、その技はもともと得られていなかったわけで、とりたてて騒ぐようなことではありません。しかし当時の傲慢なわたくしにとっては、昨日までできたことができなくなることは大きなストレスで、理不尽にも、法律を勉強させられている事実に行き場もない憤りを覚えたりしたのです。（身体感覚については二十歳のころにダンスに没頭していたころから入れ込んでおり、相当強い、いま思えば偏ったこだわりを持っていたのでした）。

また、当時のころまでのわたくしは、自らで何かを決める際に、なんだかんだで自分の“直感“を頼りにしがちなところがありました。いわゆる女の勘というものか、あるいは血縁にかかわっての土着信仰の影響をうけたものか、わかりませんが、そのようなものにけっきょく頼っていましたし、内心であらぬ自信をもってしまってもいました。そのようなものは、九折さんの、理と学門に支えられた本当の判断力や、すばらしい作品を量産する真のインスピレーションを前にしたら、まったく屁の河童のようなものなのですが、何の実力も持たないわたくしには、そのくらいしか拠り所がなかったのです。また、実際にそういったものによって、出会うべき人に出会うことができ、これまでの道を切り拓いてきたようにも感じていたのでした。ところがこういった勘ばたらきも、法律の勉強に身をいれるようになってから、水が手からこぼれ落ちていくように、失われていくことを感じました。九折さんはコラムで「占いを信じる女の全てはくすんでいる」とおっしゃっていましたし、実際にそういった類のものは、いざ自分で作品や芸術に向き合おうとしたときに一ミリも役に立たないことを、ワークショップを通して身に染みて学びました。そのようなものからはすぐに見切りをつけて卒業するのが健全です。しかし

当時は、長年慣れ親しんだ感覚を失うことにさびしさやつらさを覚え、法律を学んでいることに対しての、八つ当たりじみたうらめしい心地にもなるのでした。

どれもこれも、いま振り返れば滑稽劇ですが、当時のわたくしにとっては一大事です。

そのような有り様でしたので、最初の一、二年は、そもそも勉強に向き合うこと自体がきわめて困難という状態でした。

当時いったい何がそれほどいやだったのか、いまならわかります。慣れ親しんだやりかたが失われていくことへの抵抗もありました。しかし、忌避したがっていたところの肝は別にありました。わたくしは自分のありさまを直視するのがいやだったのです。目の前の勉強に向き合おうとすると、いやがおうにも自分の現状に向き合わされることになり、それが苦痛だったのです。プライドというのは本当に厄介なものですね。虚栄心ばかりが強烈で、中身にはなにひとつまともな経験や実力が伴っていないという自分の実情から、なんとかして目をそむけたくて、教科書を読もうとしては情緒を乱すということをしていました。

何回か、本当にドロップアウトしそうな危うい状況にもなりました。

しかし、根っこのところでいつも九折さんの存在が、わたくしが道を踏み外さないよう支え、導き続けてくださりました。わたくしの内部にも、「九折さんが命じて与えてくださったことだから間違いない」と信じるところがあり、そのおかげで、どれだけ苦しくても、自らの意志で自分の勉強机に戻ってくることができました。

九折さんは、わたくしのあり得る未来を視て、それを信じ続けてくださりました。九折さんがいついかなる時もまったく変わらず「勉強しなさい」と命じ続けてくださったおかげで、次第に自分でも腰が据わり、目の前の勉強に向き合うことができるようになっていきました。

九折さんが忍耐強く導いてくださり、ワークショップを主催し、命を注ぎ続けてくださったおかげさまです。それがなければ、いまのわたくしはありませんでした。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

そのようにして、試験勉強をはじめて三年目になるころには、毎日勉強を続けることが当たり前になり、かつてのような精神的な動揺はほとんどなくなっていました。法律というものを取り扱うことに慣れてきたところもあったのだと思います。また、なにより、毎週ワークショップで自分の至らなさと向き合い、九折さんから偉大な学門をたたきこんでいただいていたことが、大きかったのだと思います。

「九折さんが命じてくださったことだし、他に逃げ場もないし、やるしかない」と腹が決まり、気づけば勉強机が自分のホームのように思えるほどになりました。時に動揺することや、誘惑にかられることがあっても、とりあえず勉強机にかじりついていれば、「落ち着く、自分はこれをしていれば大丈夫な気がする」、と感じられるようになりました。経済的にも、血縁者から援助してもらい、勉強に集中できるありがたい環境が整いました。さまざまなことの歯車がかみ合いはじめたように思いました。

これらのすべてが、九折さんによる恩恵に違いないと感じています。

こうして勉強に本腰が入り、浪人生としての生活も、気づけばずいぶんと板についてくるようになりました。この時点ですでにふつうではありえない奇蹟です。

しかし、肝心な試験そのものにおいては、なかなかすぐには結果が伴いませんでした。わずか数点が足りずに不合格になることも、二度ほど繰り返しました。司法書士試験は年に一度の一発勝負なので、試験に落ちると、また来年の試験を目指すことになります。長い戦いが強(し)いられるわけです。

試験というのはやはりプレッシャーがかかりますし、時間も根気も体力もごっそりとられるものです。できることなら早く通過してしまうことに越したことはありません。不合格の結果を突き付けられて「また来年出直してこい」と言われるのは、ふつうの受験生であればなかなかがっくりくるものです。自分では相当に心血を注いで準備して臨んだつもりだったならなおさらです。

ところが、これこそ九折さんの恩恵でしょうか、九折さんのもとで勉強を続けることで、わたくしはいつの間にか、“ふつうの受験生”ではなくなっていたのでした。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

二年前の合格発表の時のことです。結果は無念にも、わずかぎりぎりの点差で不合格でした。わたくしの内心には、信じて背を押してくださった九折さんや、生活を支えてくれていた身内の者への申し訳なさと、もう一年間、環境を整えて試験対策をすることへの「面倒だな、先が思いやられるな」という気持ちが駆け巡りました。しかし、そのような本音とは別の声も、自分の内部に沸き起こっていました。それはこのような声でした。

「よかったよかった、これでいい。」

なぜかわたくしは落ち着いており、がっかりする気持ち以上に、これでよかったという、安心するような心地を覚えていました。そして、試験勉強を継続することに、自然と前向きなやる気を起こしていました。

「もう一年、腰を据えてやりこもう。」

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

試験勉強の目的は、試験に合格することです。いまさら言うまでもないはずのことです。しかし九折さんのもとで勉強を続けることで、いつの間にか合格という目的以上のものを感じるようになってゆきました。ある日、自室のいつもの勉強机で問題集を繰り返し解いていたときのことです。ふと唐突に、「わたしはいま、すごく“いいこと”をさせてもらっている」と感じました。

過去のやり残しなのか、カルマの償却なのか、わかりませんが、なにかそのような、自分にとって根本的に必要なことをさせてもらっているような気がしたのです。

自分が未来へ進むためには、もっとこの勉強を続けなければならない、続けさせてほしい、と感じました。

そのため、試験に落ちて、あと一年勉強する期間が増えることになった時も、「どんとこい」という気分になったのです。むしろまだ続けさせてもらえることをありがたいとさえ感じていました。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

思えば、九折さんに出会う以前のわたくしは、見方によればトントン拍子の人生を歩んできました。挫折や回り道をほとんどせず、環境や、持ち上げてくれる周囲の人の力を借りて、自分でもよくわからないまま結果を出してきました。運も味方してくれて、実力以上のリターンをうけとってきました。本当には、さほど自分に誇れる能力も経験もないのに、その時その場の何かに恵まれて、さまざまなことが一見「うまくいって」しまっていたのです。このことで、わたくしはあろうことか、自らの虚栄心を増長させせました。わたくしは愚かな人間だったので、ことの本質が見抜けなかったのです。わたくしは自分は才能のある者なのだと思い込み、虚勢を張るようになってゆきました。膨れ上がってゆくプライドの一方で真の自信は得られるはずもなく、どこかで自分がイカサマをしつづけているような心寒さも感じていました。自分の中で大きくなってゆく不安と後ろめたさに反発するように、わたくしはますます内心で威張るようになってゆきました。当時のわたくしはとてもいやなやつだったと思います。

これらのごまかしのツケを、払う時がきたのではないかと思いました。

そもそも、わたくしのような万事において不器用な者が、一度や二度の挑戦で試験に通ろうとすることのほうが、不自然というものです。これまで結果が出ないことに悩むことがほとんどなかったのは、自分の実力からすると例外的なことであり、ただラッキーだったということ。いま、簡単に成果が出ないことで存分に足踏みをさせられるのは、身分相応でつじつまがあうように思えました。

かつてのような運と勝負勘と、周囲からの“お恵み”と言いたくなるようなもので性急に結果を得ようとするのはやめよう、もっと腰を落ち着けて、「本当に自分がやった」と言えるものを獲得しよう、と思いました。いまがその格好のチャンスだとも考えました。そのためには、まだまだ取り組む量が足りていない、もっとやらせてほしい、と感じました。

また、わたくしは、以前に与えられていた職業を、自己都合で退職しています。事情はどうあれ、ぜいたくにも与えてもらっていた世の中のポジションを、キックしているのです。そしてそのぶん、就業を続けていたら得られなかったような得難い体験を得てきました。社会から課される一般的なノルマを退けたぶん、自分が本当に試したかったことを試し、限界を感じたり、周囲へ多大な迷惑をかけたりしつつも、ありがたいことに、百パーセント満足だ

ったといえる若い時代を頂戴することができました。そのような経歴を自ら選んでここまできた以上、いまになって、厚かましくも社会の一員として活躍の場を得ようと求めるなら、相応の厳しさに向き合って労をついやす必要があるような気がしました。

このようなことから、一定期間、勉強に向き合って汗を流すのは、わたくしのような者には必須のことというような気がしたのでした。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

おそらくそれだけではありません。わたくしのような者には考えがおよばないような、なんらかの因果があって、幸いにもいま自分は勉強をさせてもらえているのだという気がしてきてなりませんでした。

勉強を続けることには、本音ではしんどい面も、つらい面もありました。しかし「これはなにか、自分に必要なことだ」「これをやらせてほしい」という直観がそれを上回りました。

試験勉強をすることについて、直観の声はこのように言いました。「これは必要だ」「まだ足りない」「もっとやらせてほしい」。

これはわたくしの気分や実感には反する声でした。しかしこの声に従って勉強を続けることは根本的に安心できることだったので、わたくしはその通りにしました。

九折さんは、わたくしに法律の資格試験の勉強を勧めてくださったさい、こうなることまで見えていらっしゃったのでしょうか。九折さんのことですから、きっとそうなのであろうと拝察します。

「九折さんがやらせてくださることなのだから、何かあるのだろう」と、試験勉強をはじめることになった当初も感じていましたが、このころになると、その予感はより濃いものになっていました。

わたくしは九折さんの命令を信じ、また自分の「やらせてほしい」の声にしたがい、勉強をかさねてゆきました。

そのようにしていたら、ある時期に、「まだ足りない」の声が「そろそろいいだろう」にかわりました。

ちょうどその年に、司法書士試験に合格することができました。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

こうしてわたくしに、司法書士の資格（バッジ）がもたらされました。

このように振り返ってみますと、九折さんの導きは計り知れません。

九折さんには、わたくしにはとても見えないようなことまで見えていらっしゃいます。

九折さんは法律や士業というものにまったく無縁と思われた当時のわたくしに法律の勉強を勧め、根気強く信じて道を示し続けてくださり、実際にわたくしのもとに司法書士のバッジをもたらしてしまったのです。

何が起こったのか、わたくし自身でもとらえきれていないと思います。

ただ確信をもっていえるのは、わたくしは九折さんのもとで勉強をさせていただいて本当に良かったということ、九折さんの導きは偉大だということです。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

ひとつ、面白いことがありました。

試験勉強をしていた一番最後の年、コロナウィルスによる自粛ムードが収まったことにより、わたくしの出身の大学が、ふたたび、卒業生にも図書館を開放してくれるようになりました。朝から晩までじっくり勉強させてもらえる環境はありがたく、わたくしは、自宅での勉強に行き詰った時には、大学の図書館の自習室を利用するようになりました。

わたくしが利用していた図書館は、大学のメインキャンパスにありました。一時期は、毎日電車に乗ってメインキャンパスに通い、図書館で机に向かい、気分転換に大学構内を散策し、近所でお弁当を買って食べては、また図書館に帰ってきて勉強する日々を送りました。

図書館内には、レポートや試験に向かう現役の学生や、わたくしと同じように資格取得を目指して勉強をする卒業生とおぼしき人がおり、彼らと机を並べて一日を過ごすことになりました。

法律の専門書をドサリと積んで、細かい文字と格闘しながら、並々ならぬ集中力で手を動かし続ける若者もおり、彼らを視界に入れては、馬鹿な自分もせめて熱意だけは負けていられないと、必死に手を動かしました。

そのようなことを繰り返していくうち、ある日ふとわたくしは、「これでようやく、わたしは大学を卒業できるかもしれない」と思いました。

実のところわたくしは、現役の大学生の時には、一切まともな勉強をしてきませんでした。そのため、当時のわたくしにとって大学のメインキャンパスは、非常によそよそしい場所でした。自分が1，2年生の時期にクラスメイトと過ごしたのは別の場所にあるサブキャンパスでした。当時入れ込んでいた部活動の拠点もそのサブキャンパスにありましたので、サブキャンパスへの思い入れは強くあります。一方で3，4年生になって、本来であれば専門の学業に打ち込む拠点となるべきメインキャンパスには、馴染むことができませんでした。当時わたくしはゼミや研究をほとんどサボり、部活動のためのサブキャンパスと、公共のレッスン場に通い詰めていました。たまにゼミに出席しようとしても、本キャンパスの敷地内で迷子になるという始末でした。

それでも最低限の課題をこなし、いちおう四年間のカリキュラムは修了したのですが、いったい何を修めたのやら、自分でもよくわかりません。

メインキャンパスで行われた卒業式の日には、なんと寝坊をして、本来出るべきであったセレモニーを欠席しています。（記念撮影や謝恩会には間に合いました。振袖姿で友人と写真を撮り、存分に“卒業気分”は味わったといえます……。）

このようなことから、わたくしのような者は、実は大学を卒業できていなかったのかもしれません。社会の形式上は課された単位をとり、卒業証書を受け取り、履歴書にも「学部卒」と書いていましたが、いまとなってはわたくしは、そのようなことで本当に大学を卒業することなどできていなかったと思うのです。

ところが九折さんのもとで法律の勉強を続けさせてもらうことで、大学を卒業させてもらえる機会をいただけたのかもしれません。さんざん葛藤をした挙句、いつの間にか「もっと勉強をさせてほしい」と思えるようになったタイミングで、奇しくも大学の図書館を使わせてもらえるようになり、当時縁が薄かった大学のメインキャンパスに通えるようになりました。そこで勉強に打ち込むことで、ようやく、あれほどよそよそしかったメインキャンパスが、自分の場所だと感じられるようになったような気がするのです。

昨年の司法書士試験の当日、五時間におよぶ本番を終えて、抜け殻のような状態の身体のまま、わたくしは思わずその足で大学のメインキャンパスに向かいました。そしてさんざん勉強させてもらった図書館の前のテラス席で自己採点をしました。マークシートの採点の結果から、合格があるかもしれないと希望が見え、わたくしは内心でガッツポーズをしました。すぐに九折さんにお礼とともにその旨を報告し、キャンパスをあとにしました。この時なんとはなしに、目の前の図書館や建物に、またキャンパスそのものに、頭を下げたくなりました。

もしかするとその時に、わたくしは大学を卒業できたのでしょうか。わかりませんが、もしそうだとすると面白いなと思います。どれだけ留年したんだよと呆れられてしまいそうですが、わたくしのような者は、精いっぱいもがいてやりきって、これがベストです。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

九折さんの導きは計り知れません。九折さんはわたくしのような者に、司法書士のバッジをとらせてくださりました。

このことは、何の取り柄も経験もなかったわたくしの未来を拓き、これから世の中に出てゆくためのパスポートになると信じます。

しかし、九折さんがくださったものは、それだけではありません。

九折さんはわたくしに、「学生時代」をくださりました。

自室や、大学の図書館で、学業に腰を据えて向き合う機会をくださりました。

目の前に勉強机があり、課題にしている教科書や問題集がある、ありがたいことにご飯にも毎日ありつけていて、週末にはワークショップがある。この、何の因果か目の前に与えられたものに向き合い、黙々とかされてゆく日々が、自分にとって無性によいものでした。時には実感の揺さぶりを受けることもありましたが、迷うたび、九折さんの命をたよりに勉強机に帰ってきました。傍目には、将来の確証のない浪人生の地味で質素な、うだつの上がらない日々にみえたかもしれませんが、わたくしにとっては、ほかの何にも代えがたい、輝かしい日々でした。

九折さんが与えてくださったわたくしの「学生時代」です。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

九折さんからいただいたこの数年の「学生時代」を、わたくしは忘れません。

まもなく三月が終わろうとしています。四月からは新生活が始まります。

これまでの暮らしに別れを告げることには一抹以上のさみしさもありますが、これからまた、「学生時代」に続く新しいわたくしの時代を獲得できるよう、九折さんを信じてついてゆきます。

一番大切なのは作品です。

一番大切なのは話であり、物語です。

ねがわくば、九折さんの導いてくださったここまでの道の続きを、進んでゆけますように。

最後になりますが、ここまでのすべてのことについて、九折さんに謝意と、最大の敬意を表して筆をおこうと思います。

ここまで読んでくださり、みなさま、ありがとうございました。

文責：六法踏子

九折評

ベネッ！（良し）

ディモールト良しッ！

あいかわらず九折さん推しが激しいが、それはいいとして、踏子さんはついに読む値打ちのあるものを書くようになった。

あいかわらず文体が超前傾姿勢で、圧されるところはあるけれど、今回はそれよりとにかく内容が勝つ。

受験勉強に先立ち、内心には「楽勝でしょ」という不遜さがあったということ。それが見事に打ち砕かれたということ。

十八歳の大学受験と違うのは、難度ではなく、「あのころの自分よりもプライドが積みあがっている」ということ。

そのプライドゆえに、これまで慣れ親しんできた感覚、自分でいくつかのことはそれなりに出来ている――ふうに思えている――という感覚を、手放すのがいちばんつらかったということ。

自分の現状と本当に向き合うということが最大の壁だったのだということ。

このあたりはことごとく、けだし名言です。そしてついに「本当に自分がやった」ということを携えて、真の意味で学生時代を修了することができたという。

文句なしです。加えて、司法書士の合格（ついでに行政書士と簿記三級も合格していたな）、まことにおめでとうございます。この四月から東京・丸の内でバッジ付きの人として勤務で、はてさてどんな桜が繚乱しているやら。

真に困難な障壁に取っ組み合って、真に自分の不遜を手放すという難行を超えるとき、どこからともなくそういう声が聞こえてくることはたしかにある。「まだ足りない」「やらせてほしい」「そろそろいいだろう」。そのときのつらさや厳しさは、すでに心理的な負担というより精神的な熱風であって、ふと気づくとたしかに自己はそこにイグジスタンスを得ている。そして取り組みの総体はいつのまにか作品性を帯びている。試験勉強なら結果を出さないといけないのは当然だとしても、ことが作品性にまで及ぶなら、その過程に結果以上の何かを得ていて、本人としては結果以上のことを内心で確信してよろこんでいる。そういうものです。そういうものだし、そうあるべきだから、やはりこう言いうるわけです、

「作品がいちばん大切です」

それではお疲れ様でした、九折さん推しの激しい踏子さんですが、踏子さんが得た到達点はすべて踏子さん自身の自己決定と踏破によるものです。

みなさま、登記・相続・法律相談等は、明るい未来へと歩んでいく司法書士六法踏子にお任せください。

果汁入りハチミツは賞味期限がみじかい

すめらぎまいこ

いちばん大切なのは「作品」です。

さいきん職場で健康診断があったのですが、去年に比べて体重が1kg増えてしまいました。

去年、一昨年くらいから自分の食べる量が増えていたので「やっぱりなあ」という結果ですが、これまでずっと体重は変わらずにきていたので少々ショックです。

といって、ダイエットする気はまったくないんですけどね。

今日は仕事がちょっと忙しかったので、晩御飯はからあげ弁当とサラダを買って食べました。

からあげは外がカリカリで中がジューシーで美味しかったです。

昨日の晩御飯は冷凍のお好み焼きと小松菜のおひたしを作って食べました。

そのまえの晩御飯はラーメンで、そのまえはカレーで、そのまえはハンバーグで……これは体重増えますね。

しかも体重が増えてショックと書きながら、今まさにファミリーマートの菓子パンをかじっています。

明日は反省してなにか低カロリーなものを食べようと思います。

なにがいいでしょうか、湯豆腐かな、でも冷蔵庫に賞味期限間近の卵があるからチキンラーメンも食べようと思います。

そんなこんなで毎日ごはんも美味しいし、さいきんはお風呂もとても気持ちいいです。

入浴剤のきき湯は身体がよく温まるので大変重宝しています。

きき湯は色もきれいで香りもいいので、その日の体調や気分によってオレンジ（食塩）、ブルー（カルシウム）、グリーン（マグネシウム）、イエロー（カリウム）のどれかを入れています。

以前は毎日シャワーだけで済ますことがほとんどでしたけど、きき湯を使うようになってから週の半分くらいは浴槽にお湯を張るようになりました。

シャワーだけでもさっぱりしますけど、やっぱりお湯につかったほうがより気持ちいいですからね。

ところでふと思ったのですが、これってもしかして加齢からくる変化なのでしょうか。

加齢によって疲れが溜まりやすくなったから、シャワーだけでなく入浴剤の力も借りてしっかり疲れをとるようになったのかもしれません。

もしかしたらそういうことなのかもしれないけど、お風呂が毎日きもちいいからそんなことはべつにいいですね。

九折先生のもとでたくさん遊んでいるからわたしの魂はフォーエバーヤングに向かいつつあるけど、生身のほうは順当に歳を重ねるものですから。

ところで、我が家にはきき湯だけでなくマヌカハニーもたくさんあります。

マヌカハニーとはニュージーランドの高級ハチミツのことです。

九折先生がハチミツを日常的に召し上がっていると知って高級マヌカハニーを頻繁にプレゼントさせてもらっていたのですが、勢いあまって九折先生が召し上がるペースを上回って購入してしまったので、贈りそびれたマヌカハニーが在庫として我が家にたくさんあります（時期を見てまたプレゼントさせてください）。

だから自分でもたまにマヌカハニーを舐めています。

ハチミツは結晶化したらあたためて戻すのが一般的なようですが、個人的にはとろとろのハチミツの中に結晶が混じっているとザクザクと歯応えがあって美味しいので、戻さずそのままで食べるのが好きです。

マヌカハニーのほかにも果汁入りハチミツというものが我が家にはたくさんあって、これはジャムのかわりにトーストに塗ったり炭酸で割って飲んでいます。

この果汁入りのハチミツは意外と賞味期限が短いため注意が必要です。

わたしはわりと賞味期限をきっちり守るタイプなのですが、ワークショップメンバーは賞味期限におおらかな人が多いです。

このことはけっこうわたしにインパクトをもたらしましたが、いい意味で先入観の緩和につながりました。

一人暮らしだと調味料の期限ってすぐにオーバーしてしまうからそれが嫌であまり買わないようにしていたのですが、期限が切れてもあまりみんな気にしていないんだと知って、今はおおらかな気持ちで調味料を購入できるようになりました。

といってもそれでお腹を壊したら自己責任ですから、そこはギリギリセーフとアウトの差を自分で判断して弁えなくてはいけませんけど。

ハチミツは日持ちするだろうと思ってレモン、ゆず、ブルーベリー、マンゴー、アセロラの果汁入りハチミツを一度に買ってしまったのに、そのあとで期限が短いことを知ったときは愕然としました。

とても賞味期限内にすべては食べ切れそうになくてストレスに感じていたのですが、ワークショップメンバーのことを思い出して、賞味期限に追われることなく自分のペースで果汁入りハチミツが食べられるようになりました。

ちなみにマヌカハニーのほうはまだまだ賞味期限は来年以降ですから安心です。

こんなふうに賞味期限にキリキリしているところを書くと、さぞかし几帳面な性格かと思われるかもしれませんが、べつにそういうわけではありません。

わたしの部屋はいつも散らかっていて、使い終わったマグカップや空のペットボトルがあちこちに置いてあります。

朝は三度寝、四度寝しますし、洗濯機を回しておいても干す前に寝ちゃってもう一度洗い直すこともたびたびあります。

ところで、このことにまつわって最近ある重要なことに気づいたと思っている部分があるので、ここからはちょっとそれについて語っていこうと思います。

たとえば疲れたから散らかしたまま寝ることは誰しもあると思うのですが、そのときに「朝5時に起きて片付けてから出かけよう」と思ってアラームセットして寝たとすると、数時間後に早起きするのは当然自分です。

けれどもここのところがどうもわたしは歪んでいて、“自分”が早起きするという感覚ではなく“自分ではない誰か”に早起きさせて片付けさせようという感覚でいたのです。

いつもいつも「疲れたからもう寝ちゃおう、続きは明日やろう」として、早起きしてテキパキ動く快活な自分を空想してアラームをセットするけど、そうして5時にアラームが鳴ったって一度も起きたことはありません。

そこから小刻みに15〜30分おきにアラーム再設定を繰り返して、けっきょく起き上がるのは7時です。

じゃあ、最初から7時に起きるつもりでいればいいのに……。

こんな奇怪なことを何十年もやっていたのですが、ついに先日ふと「これわたし起きる気あるのかな?」と疑問に感じました。

それで自分自身に「おまえ本気で起きる気あるの? 誰かが起きてくれるわけじゃないんだよ」と問うたのです。

そうしたら自分から「あっ、そうかわたしが起きるのか!」というまさかの返答があったので、「本当に起きる気があるなら5時にセットするけど、そうじゃないなら本当に起きたい時間で起きようよ」と言ったら「5時に起きる」というのでその時刻にアラームセットしたら、その朝は5時に起きることができました。

いちばん大切なのは「作品」です。

こうして自分自身を点検すると、“自分ではない誰か”に空想・願望・めんどくさい仕事 etc.を押し付けるという感覚はけっこうわたしの基本挙動になっている疑惑が浮上してきました。

洗濯機を回しても、それを干すのは30分後の自分ではない“ナゾの誰か”がやってくれるという発想が大前提にあり、それがあるから洗濯機を回せているところがありました。

勉強なんか特にそうで「やっぱり◯◯の勉強はしっかりしておいた方がいいから◯◯のテキストを買って一から勉強しよう」というテキトーな発想をしょっちゅう起こすのですが、それを空想する自分とじっさいに勉強するはずの自分は乖離していて、「そう強く思えば誰かがオートマティックに勉強して身につけてくれる」という感覚が自分の中にある

のではないか……と強く思って高揚している部分があるのですが、はてさて真相はどうなのでしょうか。

いちばん大切なのは「作品」です。

これ以降、洗濯機を回すときに干すまでが一連の流れであることを自分に確認してから洗濯機のボタンを押すようには改善されました。

洗い直しの回数が減るのは環境的にも経済的にもいいことには違いないです。

コイツはさっきからなにを言っているんだとドン引きの方もいらっしゃるかもしれませんが、生来のわたしはこういうやつです。

生来のわたしは芸術に縁遠いところに生まれ落ちました。

ワークショップ中に自分が芸術やフィクションなどの真によろこばしいものから縁遠い存在だということをまざまざと思い知らされると、とてつもなく巨大な悲しみに陥ります。

ですが、そういう悲しみこそ独り静かに受け入れられる芯の強いやつになりたいとも最近ひそかに思っています。

わたしの中には生来あこがれのものに努力・勤勉で近づこうとする発想がかなり根強くあり、またそれは世間でもいいことだとされていますが、じつはその正体は強欲の悪魔なのかもしれません。

ウィキペディアによると「強欲」はキリスト教方面では七つの罪源の一つとされており、その悪魔の名はマモンといいます。

アラム語で「不正な財」を指す語が語源であり、そこからマモンという名は不正な富や金銭を表わす言葉となり、マタイによる福音書の「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」の箇所で言われているのはマモンのことだと（ウィキペディアに）書かれていました。

そうして考えてみると、身近の多くの人はマモンを拝み倒しているように見えます。

わたしはそういう人々に違和感や反発を覚えつつも「でも悪い人ではないんだけどな」「この人のやっていることにも一理ある」とフォローしたくなる感覚があったのですが、それは互いのマモン同士がそう感じさせていたのかもしれません。

さきほど面倒くさい仕事を自分以外の誰かに押し付けるムーヴが自分にあるということを書きましたが、キリスト教の七つの罪源説の中にそれらしいものを探すならば、このムーヴは「怠惰」という悪魔ベルフェゴールかもしれません。

近頃のわたしはこうして悪魔や悪霊のことを勉強しています。

九折先生が「悪霊はその正体をこちらが見抜いてしまえばその効力を無力化できる、そのためには悪霊の手口を精密に観察して、それを作品にしろ」とおっしゃったからです。

ですから憤怒の名はサタン、傲慢はルシファー、強欲はマモンという具合のメルヘン趣味的に知識を増やしたいわけではなくて、悪魔や悪霊の仕業とでも言いたくなるような出来事までも「作品」にするというのがわたしの目的です。

なぜなら、いちばん大切なのは「作品」だからです。

悪魔や悪霊というのはじつに厭なもので、それらの手口にまんまとハマって不安やうしろ暗さにむしばまれたりするのが人類共通のあるあるネタのようです。

キリスト教的にいっても悪魔は7パターン存在するわけですからヤツらの手口のレパートリーはなかなか豊富そうですが、その大元の手口はいちばん大切なものを見失わせることだとこのワーQ執筆を通して九折先生に教えていただいたように感じています。

わたしは明日も出勤して合法的に金銭を稼ぎにいくし、しょっちゅうダラダラして面倒くさいことは平然と他人に押し付けるし、食品の賞味期限は気にするし、お風呂に入浴剤も入れるし、したたかに祝福を求めていくけど、それらはすべて元気に健全に「作品」に向かうためです。

いちばん大切なものを見失ってはいません。

そうしていちばん大切なもの見失っていないかぎり、悪魔・悪霊の大軍が押し寄せてきたとしても「あ、キタキタ」とわたしは観察の目を向けるだけです。

賞味期限が切れて半年経つけど、果汁入りハチミツはまだまだおいしく食べられます。

それではまたお会いしましょう。

文責：すめらぎまいこ

九折評

ファンシーマジカルグッド！　なんや「きき湯」の話をしているなぁ～　と思ったら、話が悪魔マモンとベルフエゴールに飛んだぞ！　なかなかのジャンプ率であり、このリバウンドはＮＢＡのデニス・ロッドマンでも取れないであろう。

「自分ではない誰か」に空想・願望・面倒な仕事等を押し付けているという感覚の発見は、なかなか考えさせられてグッド。あんがいそんなやり方で、人は自分の魂を休ませているところがあるのかもしれない。もちろんサボらせている場合も同様にありうるとしても。

　自分がフィクションや芸術など真によろこばしいものからは縁遠い存在と思い知ると大きな悲しみがあるということだが、これについては正しい考えようがありえよう。そもそも本当にそうしたことと縁遠いのであれば、その縁遠さを悲嘆するということじたいがありえない。少なくとも、そうした真のよろこばしさに素直に「焦がれている」という時点で、まったく縁遠いとは言えないということになるだろう。たとえばわたしは鉄道を撮影する鉄オタという趣味からは縁遠いが、その縁遠さを悲嘆するということはない。もしわたしが「どうしておれは鉄オタのように鉄道に深入りできないのか、しくしく」と悲嘆するようであれば、それはもう潜在的にかなりの鉄オタなんだと思うぜ。

「自分ではない誰か」という緩衝的感覚に気づき、いま、そうではない「わたし」なんだということにアプローチしているところ。ひいては必然的に、作品がどうこうというのは、まさにその「わたし」なんだということに紐づいて現れてくるのではないか。現時点での縁遠さを感じる仕組みは、作品にかかわっても「自分ではない誰か」にそれを押し付けようとするところがはたらいており、その結果、それはたしかに「わたし」とは縁遠いもの、ということになっているのかもしれない。であれば、それは自らで縁遠くなる手続きをほどこしているにすぎないということだろう。

「自分ではない誰か」……ひょっとすると、サタンやルシファー、その他悪魔や悪霊と呼びたくなるような現象についても、人はそれを「自分ではない誰か」という領域に置いて扱っているのかもしれない。だからひょっとすると、人はあちこちで悪態をついて人の悪口や陰口を言いながらも、内心で「わたし」は"いい人"なんだと思っていたりもするのかもしれない。そんなことも窺いつつ、テーマはいま「わたし」なんだということに収束しよう。

　きき湯はけっこう高級品だけどやっぱり効き目がいいよね。あと、本当にマヌカハニー食いきれないのでペースはゆっくりめでよろしく……これ以上のペースでハチミツ食ったらおれはもう熊になっちまうよ。

【ページの空白を埋めるためだけの鬼ほどどうでもいい話のコーナー】
このワーＱの寄稿文って、どういう順番で掲載されているんですか？　と訊かれることがよくあります。それにお答えします。読む側が読みやすい順です。あるいは、読む側が「バリエーション豊かだなあ」と感じる順です。たとえるなら、フレンチのフルコースや、日本料理の「おしながき」をイメージしてください。いくら高級な松坂牛のシャトーブリアンが手に入ったとしても、それをいきなり入店直後に「ホレ食え！」とは出さないでしょう。先付には先付に向いたもの、お食事にはお食事に向いたものを出すというわけです。音楽好きな方は「アルバムの曲順」とか「セトリ」とかをイメージしてもらえばいい。だから、何番目に掲載されているから偉いとかってことではないです。ところで飼う予定はないですがあこがれの犬はバーニーズマウンテンです。

窓をのぞけば、白い気球

Riemerschmid

いちばん大切なのは「作品」です。

ゲーテ派を言い張ろうと思っています。

あの〝星のごとく急がず、しかし休まず〟のゲーテです。

ローテーブルの上にはいくつかのゲーテの本が積みあがっていて、数日前に読み終えたばかりの「ファウスト第二部」がその頂上に横たわっています。

なんでもない日常の中心に、「ファウスト」を読み進めていくということがあって、それを見失わなければ不安はありません。そしてこれまでは嫌っていた日常の生活感のようなものも、だんだんとたのしいと思えるようになってきました。現在のわたしは経済的に豊かな生活をしているとはいえないけれど、こころうれしく生きることはできるのだと知りはじめています。

不安の中で部屋の掃除をしたり、洗濯物をたたんだりするのはイライラするばかりですが、作品が、物語がある中で生きるなら、何をしていても明るくいられます。やっぱりいちばん大切なのは「作品」なんですね。

「ファウスト」を読みはじめてからすこし身体が軽くなったような気がします。

今日はあたたかいし、買い物にでも行こうかしら。春の陽気が出窓から誘います。そういえばすこし前に新調した靴をまだおろしていなかったので、履いていこう。

郊外の片田舎の空気は泥くさいけれど、そのぶんのんびりとしています。真っ平の地面が延々つづき、そこに住宅やら雑居ビルやらが並びます。駅からうんと離れれば、時折田んぼも広がるくらい。自分の生まれ育った町をほんとうは愛したいとずっと思っていたことを、いまになってようやく認めることができたような気がします。

スーパーマーケットで食品を買ったついでに、お花を買いました。小ぶりなピンク色のバラです。飾ってみると室内がパッと華やかになりました。うん、ばっちり。ちいさくても、いきいきとした生命の息吹がもたらされることを古い木造の部屋がよろこびます。

いちばん大切なのは「作品」です。

ついつい甘いものを食べてしまいます。買ってきたお菓子の袋をあけて、あたたかいミルクティーを淹れます。このミルクティーは九折式ミルクティーといって、九折さんから淹れ方を教わったものです。自宅でもおいしいミルクティーが飲めるんです。

甘い物を口にしながら、音楽を聴くことにします。最近は、いつかうたえるようになりたい歌を中心に、いろいろと聴いています。

歌がうたえるようになりたい、でも長い間どんな歌がうたいたいのかわからないままでいました。それが判明したのは二か月ほど前で、わたしの漠然とした説明を、九折さんが聴き取って、言葉にしてくださいました。

わたし、〝神話的な響きの・祈りの歌〟がうたいたいです。

いちばん大切なのは「作品」です。

幼いころから、すくなくとも幼稚園のときにはそのイメージはありました。でもノリノリなだけの歌とか、コード進行がおしゃれなだけの歌とか、歌に見せかけた機械音とか、そういうものをたくさん聴いてきてしまって、そのイメージすら埋もれて思い出せなくなっていたんです。

ワークショップ明けの朝食のあとに、日本の歌の変遷について九折さんがお話ししてくださったことがあります。それをきっかけに、今まで人々がどんな歌を必要としてきて、街中にはどんな歌が流れてきたのかを遡って聴きました。そうやって自分が聴いてきた歌も、世代的に聴かなかった歌も整理していって、九折さんが辿りつかせてくださったのが、〝神話的な響きの・祈りの歌〟でした。

不思議なのは、同じ祈りの歌、たとえばクリスマスソングをうたうとして、誰がうたうかによって聴き手におこる作用のようなものが違うということです。Aさんが歌うと癒しの歌になって身体がリラックスします。Bさんが歌っているのを聴くと元気になります。Cさんが歌うと、部屋に差し込んだ春光

が急に息をひそめて、聖なる夜が強制的にやって来ます。ん、こわいぞ。

たしかに単にクリスマスソングを聴くのなら、人や状況によって用途はちがうのかもしれません。十二月二十四日の夜に、家族や恋人との団らんの背後に落ち着いたメロディーが必要な場合もあるし、大勢の友達とのパーティーの場を盛り上げるためにポップなアレンジの効いたクリスマスソングが流れる場合もある。わたしがうたいたい歌は、どんな人がどんな場面で必要とするのでしょう。うたうという現象は、祈るという現象はどうしておきるのでしょう。

ところで、自分が聴いてきた歌を整理している中で一曲だけ、〝この歌からわたしの学門がはじまった〟といえる歌がありました。

十六歳になったばかりのある夜、テレビの前で呆然と立ち尽くした瞬間のことをよく覚えています。なにかの歌番組で新曲として披露されていたのをたまたま目にして、翌日にはCDを買いに走っていました。

そのことを九折さんにお話ししたら、偉大なソウル・リーディングによってあることを指摘してくださいました。

平成時代のJPOPで、その歌じたいがどうこうというわけではなく、問題は歌詞の一部です。

わたしが衝撃を受け、そしてそこから学門がはじまったその歌詞の一部は、ゲーテからインスピレーションを得て書かれたものでした。

いちばん大切なのは「作品」です。

そんなことを考えながら音楽を聴いていると、いつの間にかお菓子を食べる手も止まっていて、本格的におなかがすいてきました。

たらふくカレーを食べて一息ついてから、一年ちょっと前にはじめたカリグラフィーをやります。西洋書道ともいわれていて、アルファベットの文字をきれいに書くんです。まあ、趣味みたいなものです。

曲がった部品のついたホルダーに金属のペン先を取り付けて、インクに浸します。このインクの匂いはきらいじゃない。

基礎練習はいつもAからはじめてZまで辿りつけないので、真ん中あたりのOからはじめようと思います。マッキーの細字をつかうときくらいの文字の大きさで、Oを書きます。P……Q……R……S……。ペンをつかいこなすには相当の時間が必要です。

太くなったり細くなったりする線が楕円を描きながらゆっくり引かれて、A4の紙が三十分前後かけて埋められていきます。薄手だけど丈夫な紙は、黒いインクの水分を吸ってすこしだけたわむ。

詩を書き写して練習することもありますし、グリーティングカードをつくることもあります。そういうときは風合いのある厚紙に、色のついたインクを乗せたりします。

この前、高校時代の友人の出産祝いにカードを添えたら、想像以上に喜んでくれました。

集中して練習していた一年前などは、一日に七時間書いていましたが、あまりやりすぎると身体を壊すので、最近は長くても週に二、三時間程度です。

今日はこれくらいにしておきましょう。ペンと紙とインクを片付けて、いちばん大切なのは「作品」です。

ちょっと疲れたので、アロマキャンドルをつけてリラックスすることにします。ん〜いい香り。わたしはもともと火が苦手で、ライターすらまともにつけられない有様だったのですが、今年に入ってから少しずつ慣らしていけるようになりました。

部屋の中に火があると、ちいさなロウソクひとつでも、はじめは危険な異物があるように感じられて緊張していました。でもいまは部屋が部屋らしくなったというか、やっぱり室内で過ごすのは火があってこそだなと感じます。

雨が降っている日なんか、なおのこと暖炉であたたまっているみたいで、なんだかいいんですよ。

今日はすこし強めの春風がどこかの隙間から侵入しては、執拗にロウソクの火をちらちらと揺らしています。

いちばん大切なのは「作品」です。

わたしの実家は一冊の本です。赤い表紙の、しっかりとした厚みと重さのある本。六歳のときにそこから出てきて、わたしははじまりました。

主人公が物語の中でした冒険を、わたしもしなければいけないとずっと思っていました。彼と同じ憧れを持ちつづけていました。挿し絵もすごくわたしっぽくて、カリグラフィーをやっているのも、そこ

に描かれた装飾文字からきているような気がします。歌をうたう登場人物も多いです。

この物語がなければ、わたしはフィクションを完全に見失っていたし、九折さんに出逢うこともできませんでした。六歳ながら〝生まれてきたけど、この世界ってなんなんだろう〟と疑問に思っていて、読み終えたとき〝この世界の本質がお話であることを否定することはできない〟と感じたことをはっきり覚えています。

読み終えたというか、当時は母から読み聞かせしてもらっていました。それで最近になって、もう一度読もうと思ったときに母に在処をたずねたけれど、もう売られてしまってありませんでした。

わたしは親から与えられたそれを、もう一度自分で獲得しなければならなかったのかもしれません。

世代的にも環境的にも周囲からフィクションは失われていて、大人になってからはさらに〝人生、現実的に考えなよ〟とか〝結婚しなくて老後どうするつもりなの?〟とかありもしない世の中の声に圧しつぶされていました。

それでも六歳のときに与えられた物語はずっと失われず、胸の奥底でロウソクの火のようにわずかに燃えつづけて〝でも生きるってフィクションじゃん～～〟ともがいていたところ、九折さんに出逢って救っていただいたんです。

奥底から熱のようにだけ感じられていた赤い表紙の本の存在も、ワークショップに通って九折さんと接していくことによってふたたび浮上してきました。九折さんのおかげで、もう一度、こんどは自分でその物語に触れて、ここからはじまったと確認することができています。

この話を九折さんにしたら「おめでとう、これがきみの実家だ」とおっしゃってくださいました。いちばん大切なのは「物語」です、「話」です、「作品」です。

そして九折さんはわたしに、この本の系譜を辿るようにとおっしゃいました。系譜というのは、どこから影響づけを受けているかということです。はじまりのこの本がどこから影響づけを受けて書かれたのかを辿ることで、わたし自身の存在が謎でなくなるのだそうです。(九折さんがインド哲学や大江健三郎などから影響づけを受けていると、それがじつに九折さんという感じがするようにです)

調べたところ、ドイツ方面の、とりわけゲーテからきていることがわかりました。わたしはずっとゲーテに導かれていました。

いちばん大切なのは「作品」です。
ゲーテ派を言い張ろうと思っています。
あの〝星のごとく急がず、しかし休まず〟のゲーテです。

ローテーブルの上にはいくつかのゲーテの本が積みあがっていて、数日前に読み終えたばかりの「ファウスト第二部」がその頂上に横たわっています。

隣には空になったマグカップ。背後のキャビネットの上には小ぶりなバラが咲いています。あいた出窓からは陽光が差し込み、すこし強めの春風が部屋の中にあたらしい大気を含ませます。ときには音楽が流れて、キャンドルは揺れつづけています。でも炎が消えることはありません。

だれの奥底に燃えている炎も、消えることはありません。

どんな形であれいちばん大切な「作品」は、あるいは「作品」に向かいたいという情熱は、永遠に燃えつづけます。

その炎を見失わない限りうしろ暗くなることはなく、ありとあらゆるものがわたしたちを守り導いてくれます。

炎はやがて驚くほど大きく烈しくなっていくでしょう。そうしたら窓の外をのぞいてみるんです。いつのまにか、この部屋ごと宙に浮いているかもしれませんね。

文責：Riemerschmid

九折評

ぐむむっ、これはっ。

エッセイスト爆誕ッ！

これはエッセイですよ、まぎれもないエッセイ。

これ、テーマ決めて一定の量を書けば、ふつうに文学賞を獲ってしまいそうね。

なんなんだよ、じゃあ、こんな鬼の顔面を貼り付けた文体を晒しているおれがアホみたいじゃないか。

ガルルルルル（威嚇）

書かれようとすることが完璧に書かれているので、こちらとしては評もヘッタクレもない。

やはり、カリグラフィーの件もそうだけど、いったん手を付けると、作りこみがハンパじゃないんだな。

こまかな世界に、ディティールに、棲みついてしまうという、そういう典型的なタイプだ。

ある一冊の、すぐれた本があるとする。そこに描かれている物語はあきらかに作品だ。

作品としか呼びようがないので、作品と呼んでいる。

そして、その作品が自らの魂の実家となっていて、自分の魂はたしかにこの一冊から出発しているところがある……しかも正しいはたらきに扶けられて、わたしは現在もその物語の続きにいるようだと、よろこばしく認められることがある。

そうなったとき、すでに一冊の本は、一冊というカウントの領域をはみ出している。

本が冊子という領域をはみ出るだって？

本は本の中だけのことじゃないのか。

いや、われわれが、急に冷静になって誠実に考えるなら、むしろ冊子という領域内部に留まるだけの本というほうが本質的に価値がない。

一冊の本は、自分の魂の始まりになっており、それはこの先に自分がうたいだそうとする声や響きとも、精妙につながりあっているだろう。

そのことは、作品——と呼ぶしかないもの——が、魂にかかわって深く〝構造化〟していると捉えることができる。

その構造化には、当のすぐれた一冊の本を書いた、その書き手自身のことも含まれるのだ。

彼はどのような魂の構造化によって、その一冊の本を書き上げることになったのだろう？

人は、自分の姿や声、顔つきや発することばが、この魂の構造と結びついていないとき、痛々しいショックを受ける。

流行に毒され、環境に侵入され、思い込みや執着を抱え込んでしまい、自分の声に魂の構造から切り離された「自我」が確かめられるとき、人は自らに痛々しいショックを受ける。

だからこそ、いちばん大切なのは作品であるのと同時に、人がいちばん大きなショックを受けるのも、自分の作品だ。

今回のれっきとしたエッセイを書き上げるのには、たいへんな丁寧さを要したと思います。わたしは大江健三郎の小説作法に始まる者としてこうコメントしておきましょう、∧∧書くのは簡単でも書き直すのはたいへんですから∨∨。

この先も作品をやっていきましょう。ディティールに吸い込まれてしまうタイプなので、過度な焼け付きに陥らないよう、おおらかに・おおざっぱにという捉え方もまた構造化にありうるのだということを忘れずに進んでください。

第十一号　特別企画

梶見エミルカさんへのインタビュー

聞き手（九折）：では本日はよろしくお願いします。月刊のワーQの発行にかかわって、今回はインタビュー形式を盛り込もうという企画です。のびのびと、たくさんのお話をお聞かせ願えると幸いです。いちばん大切なものは作品ですから、この企画がエミルカさんにとって有為にすぐれた作品となることを目論んでまいりましょう。

梶見エミルカ：よろしくお願いします。いちばん大切なものは作品です。

　記念すべき月刊ワーQ第十一号の発行が決まったお祭りムードに乗って楽しく書くぞ～と意気込んでいたのですが、完全に勇み足になってしまいました。見かねた九折さんが救済措置をくださって、今回はイレギュラーな形式を取らせていただくこととなり大変恐縮です……

　だなんて、まったく思っていません。これは断じてズルではないです、こういう企画で、そういう作品なのです。読んでくださる方の寛容さに狙いを定めて語りかけてまいります。改めましてよろしくお願いします。

◆Q１．エミルカさんは乃木坂でエステティシャンとしてお勤めで、現在おおいにご活躍中とのことです。いかがでしょうか、エステ業界ならびにエミルカさん自身のはたらきぶりは、いま正に充実していらっしゃるところでしょうか。

A：はい。新型コロナとSNSの流行に後押しされて世の中の美と健康への意識が高まっているようで、業界全体に活気があります。ありがたいことにお店も繁盛していて、個人の仕事ぶりもこっそり充実しています。これは、ひとえにワークショップのおかげだと確信しています。そのことについてこれからお話ししたいと思います。

◆Q２：エステティシャンということは、お客さんの身体をマッサージすることが多くあると思います。その手技にかかわって、当ワークショップの提唱する身体操作の技法は、貢献的に作用していますでしょうか。

A：それはもう、九折さんが伝授してくださる身体操作なくして私の仕事は成り立ちません。貢献的どころか、本当に使えることを使えるようにしか教えていただけないので、マッサージにも接客にもいい影響しかなく、お客様がついてくださるのだと思います。

　逆にどうしたらワークショップに貢献できるのでしょうか、今すぐ富豪にでもなって五億円ほどポンと醸出したいですがそれは当分むつかしそうなので、いちばん大切な作品に必死で向かっていきたいところです。

◆Q３：エミルカさんは比較的、当ワークショップでは身体操作技法の習得に意欲的です。当ワークショップの身体操作技法の、どのような点を気に入っていただけているでしょうか。

A：身体操作は気持ちいいです。そして単純に肘とか膝とか股関節とか、ちゃんとわかって動かせるようになるのは快感です。身体操作をある程度習得すると、無駄な動作が減って、静かに速く動けるようになります。そこが気に入っているというより、おおいに助けられています。

　速く動けるようになると体も気も楽で、今まで億劫だったこともそうでなくなりました。たとえば夜遅く仕事を終えて一旦帰宅してから夕飯の食材を買いに出て一から作って食べる、という一見ものすごく面倒なことも、毎日ではないにしても何の支障もなくできるようになりました。かつての面倒くさがりな自分と変わりすぎているので、古い友人が今の私を見たらびっくりするかもしれません。我こそは筋金入りの面倒くさがりだと自負する人こそ、身体操作修得に向いていると思います。

これまでエステに来てくださる方にヒアリングしていく中でも、ご自身の関節の位置を正しく把握されていた方は一人もいらっしゃいませんでした。そういう方でも少し関節を触りながら補助して動かすだけで、身体が動きやすくなることに大いに喜んでくださるので、ワークショップの身体操作には私以外の人も助けられています。
もちろん姿勢やスタイルも良くなるので、やらない理由が見当たりません。

◆Q4：エミルカさんは職業上、身体的な実力を持たねばならず、動作的にもスタイルを持たねばならないという思いがあるかと存じます。それに関わり、エミルカさんが、特にこれは自分のものにしたいと感じている技法などはありますでしょうか。

A：これは意外に思われるかもしれないのですが、柔術です。
ワークショップの柔術のコーナーでは二人でペアになって、一人がもう一人の腕を壁に押さえつけて固定し動けないようにしたあと、そこから押さえられている方がどう抜け出すか、といったことをやります。このような状況で全力で抵抗して相手の押さえつけから抜けようとしても、当然相手も全力で体重をかけて対抗してくるので、お互いの身が固まって動けなくなります。そんなの当たり前ですね。
仕事のマッサージでも同じで、お客様の肩凝りなどを力技でほぐそうとしても必ず反発されます。ではどうしたらいいのか、最近やっと柔術を習うのがおもしろくなってきました。
パワーで固まっているところは実感に支配されています。こちらが相手の実感に付き合いながら突破する方法を探っていたらいつまでたっても相手のパワーに頼って甘えることしかできず、力の世界に閉じ込められて疲れきってしまいます。これだと双方に旨みはありません。ではどうしましょうか、ここでこれまで散々やらされてきた身体操作の出番です。詳細はご自身でやって確かめていただくということで、まだまだぺーぺーの私から言えるのは、関節の点と点を厳密に捉えられるとそこを抜けていく何かがあるので、それを取り逃さないことです。大切なのは実感を探らないことです。抜けていくものに実感では追いつけないと、何回も失敗してようやくわからせられました。
これから柔術をものにできたら、もっと仕事でのマッサージが良く効くようになる予感があります。身体的な実力の秘訣は柔術にあり、とできる限りお話ししてみました。九折先生、合っていますでしょうか、どきどき。

（※九折注：合っています！）

◆Q5：エミルカさんはエステティシャンとして、日々いろんな方の身体に直接触れていらっしゃると思います。人の身体に触れるとき、そこから直接どのようなことを感じ取っていらっしゃるでしょうか。

A：一介のエステティシャンがお客様個人について思いを巡らせるのも失礼に当たるのではと思い、普段はあまり考えないようにしてはいるのですが、とにかくみなさん色々大変なんだなあと感じます。怒りを覚えるくらいに全てが固まっています。
ご自身の業務に意欲的に取り組まれている方が多いので充実されているなと思う一方で、心身に鞭を打ちすぎて体の各関節が縮こまって、大変お疲れになっているのも事実としてあります。それを感じるといちいち悲しくなりますが、ごきげんな人を増やしたくてこの仕事をしているので、お客様にはたくさん働いてお店に来ていただいて疲れを取り去って癒されてルンルンになってくれたらいいなと思います。
できることなら全員身体操作だけでも習いに来たらいいのにな、とは思っています。でももしそうなったらエステに来なくなっちゃうかもしれないので、考えものではありますね。

◆Q6：別の角度からお尋ねします。エミルカさんは音大出身で、ピアノ専攻を修了されています。エミルカさんにとって、ピアノにかかわる夢、および直面するむつかしさとはどのようなものでしょうか。

A：ピアノにかかわる夢は、あなたに「私の演奏」を聴いてもらうことです。

むつかしさは、がんばって練習した通りに弾いても「私の演奏」にならないことと、現時点では私の演奏というもの自体があるのかないのかすらよくわからないということです。

　おこがましいのは重々承知の上でお話ししますと、何をどうしたとて「どうせピアノうまいんでしょ」と舞台上に出てきただけでこちらに視えるおじさん（YouTubeでMichelangeli Debussyで検索したらすごいものを目撃できます）の演奏には絶対に絶対にならないのです。すべてが決定的、かつ根本的に違っていて、目指すには神域すぎるのもわかるのですが、目撃した以上無視もできないので苦しんでいます。もしかしたらピアノが違う超いいやつなのかもしれないし、勝手に超絶技巧が鳴るのかもしれないし……と現実逃避したいですが、そうもいってはいられません。

　今のところ日々苦しんでいて、私の演奏は当たり前に現れてはくれないのですが、意外なことに不安はないのです。超絶技巧的な奏法については一旦横に置いて忘れるとして、不思議と未来にはもう、ピアノを弾いて満足している梶見エミルカがちゃんといることを私はなぜか知っています。本当に不思議なことだなと思います。

　どうせうまいんでしょおじさんを直視するのには大変な恐怖があり、見たら見たで大きなショックを受けるのですが、自分がピアノを弾いている未来に向かっていくこと自体は大変ながらも明るいものだとワークショップに来て学びました。そして未来へ向かう道中は、みんなで楽しくワイワイやるものだと教わりました。

　今畏れの対象となっているものにじわじわにじり寄りつつ、ワークショップでワイワイやりながら親しんでいくことも夢の一つです。

◆Q7：ピアノ演奏にかかわっては、その演奏が作品性を帯びるか否かという問題が常にあると思います。そのことについて、当ワークショップでの「作品」の理論と実践に触れることは、あたらしい捉え方や感覚をエミルカさんにもたらしたでしょうか。

A：実はまだそれについてはよくわかっていません。だって作品って、理論を教えていただいてもむつかしいんです。

　ピアノの弾き方は「離れピアノ」という凄いワザを九折さんに伝授していただいたので、長時間弾いても疲れなくなりました。これだけでも大変イエーイな快挙です。九折さんご自身は全くピアノが弾けないのにどうしてわかるのでしょうか、すごすぎますよ。

　今回のワーQを書けなかったことで、自分が音楽・芸術に対して課題意識が強く、本来ないはずのプレッシャーを勝手に負う癖があるやつなんだということがわかりました。今は一般的な課題という感覚から離れて思い違いを払拭することで、新しい扉を開けられるのではと胸を膨らませているところです。

　九折さんがおっしゃるに、芸術は課題ではなく主題なのだそうです。この言葉だけでもかなりの衝撃だと思いませんか？ひょえ〜と驚きすぎて今まで習ってきたことがひっくり返ってどこかに飛んでいきました。課題はしんどいけれど、主題にしんどさはないとも九折さんは仰っていました。そういうことなら何も憂うことはないですね、今この時から堂々と主題を求めます、主題プリーズ。

◆Q8：当ワークショップが提唱するさまざまな理論と実践について、エミルカさんが「いちばんむつかしい」と感じられるのはどのテーマでしょうか。

A：それはもう、作品をやることです。実作です。ワークショップには毎回楽しみにしている作品のコーナーがあります。毎回誰かがマスターとなって、マスター主導で数分の作品を作って上演するのですが、これがダントツで楽しく、それ以上にむつかしいです。九折さんの作品をやるのもむつかしいし、自分がその場で作るのなんてムリムリムリです。ごくごく稀にボーナスタイムのような奇蹟がおきて、自分としてもこれは一応作品と呼んでよし、と言えるものが出来るのですが、あって半年に一回なので大変です。九折さんは芸術論を惜しげもなくお話してくださるのですが、いかんせん私の理解力が乏しく、ものにするのはまだまだむつかしそうなので、サービス精神を発揮しまくって奇蹟を求める方向でなんとか行かせてもらえないかと目論見中です。

◆Q９：当ワークショップには、じつに個性的なメンバーらが所属していると自負しています。エミルカさんもそのひとりですが、エミルカさんから見て改めて印象的に思えるメンバーについて教えてください。

A：九折さんが寛容でいてくださるおかげでそれぞれ個性が爆発しているので全員について書きたい気持ちはあるのですが、今回はテーマに関わって、すめらぎまいこさんとの間に起きた印象的な出来事「ルーレット事変」についてをお話しします。

　ワークショップの作品のコーナーで九折さん作品をやらせていただいた時のことです。作品のタイトルは「ルーレット」、演者はまいこさんと私。ルーレットに出てくるのはアホの二人組です。自宅にダーツとルーレットを設置して遊ぼうとするのですが、その設置の仕方があべこべなのです。ルーレットを回せば玉が落ち、ダーツを投げればなんかおかしい、可笑しさに気づかず遊び続けてまいこさんが勝利をおさめてＦｉｎ．そういう作品を九折さんがやらせてくださいました。私自身も大概アホなので作品をやらされているうちは必死すぎてよくわかっていなかったのですが、すべてが終わってみると、まいこさんの存在を今までとは段違いに近く感じるようになっていることに気づきました。更に作品を終えても隣にいること、一緒に遊ぶことがしっくりくるようになりました。

驚くべきことに、今まで散々顔を合わせてワークに取り組んできたりみんなで旅行に行ったりしたはずのまいこさんと「ルーレット」の中で初めて出会って初めて遊んだという感触があるのです。これはまいこさんも同じように感じているはずです。私たちはあの九折さん作品の中で、数年越しに出会うことができました。九折さん作品の空間は一撃で人を出会わせます。

　これが冒頭にあるルーレット事変のことのあらましです。九折さん作品の作用に衝撃を受けつつ、九折さんならそれが本来のことで当然だとおっしゃるだろうということも今ではわかります。事変以降、私はまいこさんをつい頼りにしてしまいます。まいこさんはワークショップで培ってきた確かなものがたくさんあるからか、一緒に柔術をやっていると驚くほど押さえが確かで、接していても不安を感じさせない人です。ワークショップでのめちゃくちゃな夜を経て、そういう人になられたのだと思います。最近職場で錯乱して暴れたおじいさんを取り押さえたという話を聞いた時も驚きつつ、まあまいこさんならやるだろうな、とどこかで納得させられていました。普段そんなに頼もしいまいこさんなのに、突然出てくるカイザーみのあるわがままいこが突き抜けておもしろくてみんなに愛されているのが、ワークショップの醍醐味で楽しみです。

◆Q１０：たくさんのお話をありがとうございます。それでは、ここまでたくさんのことを振り返られて、当ワークショップでの経験とこれからについて、改めて思うところがございましたらお聞かせください。

A：ここまで読んでくださってありがとうございます。

　私は元々、ちまたで開催されているワークショップなるものにアレルギー的な嫌悪感があり、通い初めのころはいちいち出席か欠席か決めるのすらストレスでしんどかったです。何がつらいかと言えば、他のメンバーもこれには完全同意してくれると思うのですが、九折さんから与えられるワークがことごとくできなかったことです。今まで他人に空気を読ませて政治的な工作をしていただけで、私は本当には何ひとつまともに出来ないんだ、と真実を直視させられるのが辛いのです。実は今まで自信だと思っていたものは、単なる傲慢さだったということです。こんな勘違いは早々に破壊されるべきでした。自信と取り違えられていた傲慢さが打ち砕かれるのは、今となっては痛快で笑えます。

　自分が出来ないことにショックを受けるというのは、自分には実力があると本来の能力よりも高く見積もっているということです。私は数年前にあるきっかけがあってサービス精神を主題としてきていますが、ワークショップで傲慢さが打ち砕かれなければそれもついえていたと思うとおそろしいです。本当に危ないところだったのを、九折さんのお話がここまで連れてきてくださいました。九折さんのお話、作品、小説が私の主体で主題の源です。自分の能力を主にしていたら何もかもが始まらないまま終わっ

てしまうところでした。九折さんの作品のおかげで危機から逃れて、今の穏やかな日々があります。おかげさまでやっと腰を据えて、ようやく作品を当たり前にする日々を始められます。作品ばんざーい。

聞き手（九折）：本日はありがとうございました。それでは最後にお尋ねします。これは、お約束ということ以上のことだと思ってお尋ね申し上げる次第です。あらためて、いちばん大切なものは何でしょうか。これからも梶見エミルカさんのますますのご活躍を期待申し上げます。これからもどうぞよろしく。

梶見エミルカ：いちばん大切なものは、まちがいなく作品です。作品なくして主題なしです。九折さんが与えてくださる作品から何もかもがはじまりました。全てに間に合うように、これからもついていきます。

聞き手（九折）：ありがとうございました。

九折評

ビューティフル！　アンドリラックスヒーリング！

イイですねえ、使えることを使えるように教えられるというのはわれながらとてもイイ。マッサージなんて手技そのものを、施術する当人が肩の作用も肘の作用もわからないまま力押ししているようではどちらも疲れてくたばってしまうからね。力を「入れた」らテンションはあがるけど、身体としてはブレーキがかかる。エンジンを回すと同時にブレーキを踏んでいる。ブオオオオン。鼻息はたしかに荒くなるけど、本体に負担が掛かる上に燃費を悪くするばかりだ。

面倒くさがりの日本代表エミルカさんが、ヒーリングとケアにかかわる肉体労働の実務者として、身体操作があったほうが確実に「楽」で「速い」とレポートしてくれるのは何よりこころづよいことだ。しかもけっして値段がお安くはない、芸能人とかも来る現場に立ってのことだものね。そういう本格の現場でおれの教える技術がそのまま役に立つというのはすばらしいことだ。おれだってたまには威張っちゃうぞという気分にさせられる。エッヘン。

「離れピアノ」がいまも大きく有効にはたらいているとのことで、よろこばしくて何より。ピアノのようなむつかしい器材も、人の身体の捉え方と根本的に同じで、

「関わりがくっついてると逆に動かなくなってストレスになる」という捉え方が有効だ。たとえば「肘」というと、前腕の節と上腕の節が「関わっている」点、それを関節と呼んでいるわけだけど、その関わりが「くっついて」こじれていると、肘はまともにはたらいてくれず、グギギギとなって疲れてしまう。人と器材の関係も同じ。前腕と上腕は分離していてこそつながって機能するように、人と器材も分離していてこそつながって機能する。人とピアノの関わりも「関節」というわけ。

ワークショップに関わり、「私は本当には何ひとつまともに出来ないんだ」ということの直視がつらかったというエミルカさん。エミルカさんは同時に、それを本当に乗り越えてきたことじたいに自己を発見するのだということもすでに知っていると思います。もちろん、それは言うは易しというやつで、行うはカチカチに難しなんだけれども。

かといって、表面上だけ何かを習った気分になってウフフするような、趣味的なワークショップに用事はないなあというのもエミルカさんの言うとおり。

そもそも、われわれがやっているのはもはや、一般的な「ワークショップ」の語にはまったく当てはまってはいないけれどね……

フィクション空間内でこそ「一撃」でまいこさんに出会ったというエミルカさん。同じようにきっと、フィクション空間内でこそ、しかるべき音楽や演奏に「一撃」で出会うということがあると思います。そのことに向けて、じわじわと、かつワイワイとやってまいりましょう。

電源コード修理の喜び

大和なげしこ

みなさんこんにちは。
いちばん大切なのは作品です。

それはともかくとして、このたび九折先生から新しい名前を頂戴いたしました。これからはA改めとしてよろしくお願いいたします。
「大和なげしこ」
この名前をいただいたとき、わたしの全てをひっくるめた、いい得て妙な名前だと思いました。（九折先生ありがとうございます。）九折先生には「大和なげしこ」のどんな物語が視えているのでしょうか。おっかなくもあり最高に明るくもあります。

いちばん大切なのは作品です。
われわれは話の機能を失っています。悲しいけれど本当のことです。
今は、わたしがあなたに本当に伝えたいことも、話されるべきこともわたしからは出てきません。けれど九折先生は今回そんなわれわれに前もって主題を与えるという不思議な方法を考えてくださいました。
いちばん大切なのは作品です。

われわれがそのことを見失わないかぎり、またおろそかにしないかぎり、われわれは不安になったり、うしろ暗さにむしばまれたりすることはないのです。

いちばん大切なのは作品です。
それはともかくとして、わたしの人生には今まであまり大きな波がありませんでした。そんな作品をつくったこともあります。
大恋愛があったわけでもなく、何か勉学で抜きんでたということもありません。
劇的なエピソードというのもありません。それでも不平不満はないと思っていましたが、それはウソでした。もし九折先生のもとで作品を作っていなかったらそれは抑圧されたままどんどん圧力を高め、晩年を待たずして爆発していたでしょう。
わたしは自分の人生に波がないなんて本当は嫌だったのです。

いちばん大切なのは作品です。
作品はわたしには分からない謎の作用がありま す。九折先生はよく、われわれに起こってくる理不尽なことや自身の憤りや不満の話を聞くとそれを作品にしたらいいとおっしゃいます。作品にできるくらいそれを構造として捉えられれば、それは恐れるに足らず、正体見たり枯れ尾花というわけです。
もちろん自身が抑圧していることに対しても同じです。

そうやって作品を作っている、あるいは学門をさせ続けてもらえているからか、ワークショップの誰もが自分の小ささに暗くなりきるということがむつかしくなったように思えます。仮に一旦落ち込んだとしてもです。
一時的にはとてもつらい状況になることもあります。
自分がイメージから離れられない俗な人間であることが突き付けられる。自分が作った作品がお粗末な出来になる。話として成立しない。それが納得できない。
ああああああああああああああ
でもそれでも何か作品を作り続けるという体験をなかば強制的にさせてもらうことでわれわれは以前よりずっと作品に対し落ち着いた状態を保てるようになってきました。それでもまだまだ全然足りないのですが。

いちばん大切なのは作品です。
最近気づいたことがあります。人が何かを自分の手で行うのはとても小さなことであれ本来は大きな喜びだということです。

先日わたしの生活のパートナーである電気ストーブが壊れてしまいました。
壊れたといっても、コンセントに挿すプラグのコードが切れてしまったのです。コンセントに挿したまま、あっちにこっちにと連れまわしたのがよくなったのでしょう。気づけば挿し込んだプラグのすぐ

近くから電源コードが半分ほど切れ、中の銅線が露出してしまいました。

しがない一人暮らし用、1Kの部屋のその真ん中を陣取り、ベッドと本棚から等間隔に離れて赤く光っている電気ストーブは、秋ごろから春先まで、ずっとわたしの生活を支えてくれました。

わたしが寒い冬も健康のまま作品を考えることができたのは、この電気ストーブのお陰といっても過言ではありません。本当に一日中点いていましたから。

実はこの電気ストーブ、元々はワークショップのメンバーのものでした。九折先生の教えによって新しい電気ストーブに買い換えるとなった際、惜しまれつつも不要となった電気ストーブを譲っていただいたのです。丁寧に使っていたであろう電気ストーブはとてもきれいに保たれていて、物が入り乱れ、混然とする我が家に置くことに若干の心苦しさを感じたりもしましたが、もうかれこれ三年も第一線で活躍してくれています。

そんな仲間から譲り受けた大切なストーブですから、買い替える方法は万策尽きたあとの最終手段です。何とか修理できる方法はないかと日夜鍛えたウェブ検索の力をフル活用しました。「ああ、どうにか直らないものか！」ネットで何でも調べられることの功罪はあるにせよ単純にこういう時は文明の利器に感謝です。

今考えれば普通に修理屋さんに出すのが正解でしたが、なぜか選択肢に入ってきませんでした。

いちばん大切なのは作品です。

電気ストーブのコードを自分で作業して直すというのは何か大切な、それでいて面白そうな気分のよい考えでした。

気づけば閉店一時間前のホームセンターに居ました。

「もう少しで終業なのに……」という気配を隠そうともしない気だるげなレジの店員を横目に、ウェブ検索した「ペンチ」「ワイヤーストリッパー」「丸型圧着端子」「圧着工具」「コンセントプラグ」を探します。

みなさんは、例えば行ったことのない大型スーパーで「乾燥わかめ」をすぐに探せますか？

多くの場合は探すのに手間取るのではないでしょうか。スーパーによって本当に配置はまちまち。ある程度の方向性は把握できても、具体的な商品を探すとなると大変です。「乾燥わかめ」が乾物として春雨と一緒にあるか、かつお節などのドライな調味料とひとくくりにされているかは一見しては分からないのです。見知ったはずの「乾燥わかめ」ですらこれです。いわんや工具をや……ということです。

いちばん大切なのは作品です。これは決して見失っていません。

けれども年数回しか訪れない地方の巨大ホームセンターで「丸型圧着端子」の売り場は完全に見失いました。

他の工具はなんとか発見することができたのですが、それ以外の「丸型圧着端子」と「コンセントプラグ」が全く見つかりません。

特に「丸型圧着端子」はわたしにはネジと同じような部品に見えましたから、釘・ネジコーナーとペンチなどの工具コーナーを行ったり来たりしたのですが全然見つかりません。刻一刻と閉店時間が迫っています。先ほどまでいた店員すら見当たらなくなりました。

そんな中、ふと遠くにあるシーリングライトと照明コーナーが目に留まりました。シーリングライトは具体的にも光っていましたが、まさにわたしにとっての救いの光になったのです。

よく考えれば当たり前でした。コンセントは「家電」に属するものです。コンセントに挿すプラグもプラグにつける丸型圧着端子も家電扱いだったのです。

みなさんもコンセントや電気のスイッチの部品を探す際にはぜひホームセンターの「家電コーナー」をお探しください。

「丸型圧着端子」、初めて手にするそれはとても小さな部品でした。金属の細い筒に同じく金属の円状の部品がついています。

これをコードの銅線とコンセントプラグの間に装着して通電可能にし、新しい電源コードとして成立

させます。わたしはそのやり方をＹｏｕＴｕｂｅの動画で見たのですが、結構簡単そうでした。

でも往々にして願望と現実は大きく食い違うものなのです。

いちばん大切なのは作品です。

ただ、例えそれをおろそかにしていなくても、自分の手に仕込んだことのないものを手掛けるときは、それはそれは不格好なものになるものです。

動画ではものの数分で完了していた電源コードの修理に、一時間以上かかりました。気づけば暖房もついていないのに汗だくでした。

これを街の電気屋の方などはもう何千件、何万件とこなしていると考えたら気が遠くなります。でも手に仕込むならそれくらい「うんざり」するまでいかないといけないというのは先般の九折先生のブログにもあったところです。

そうしてようやく完成した電源コードをコンセントに挿してみます。これで電気ストーブがつけば修理は成功です。

緊張の一瞬の後、電気ストーブ何事もなかったかのように赤々とした光を発し始めました。

（やったあ〜〜〜！）（本当についた〜〜！）

（すげえええええええ）

言葉遣いが悪くてすみません。

でもわたしはこの結果にとても満足し、自分の手で家電の配線を完了したことに為したこと以上の喜びを得た気がしました。

でもきっとこれは誤解です。電気ストーブのコードを自分の手で直すということは本当はとても大きな喜びなのです。

「断線した電源コードを切って、新しい部品とつなげ直す」という小さなことですら、汗だくになるのがわたしです。魂サイズはきっとコンセントプラグより小さいでしょう。普段は紙面で、伝聞で、端末で手に入る情報の全てが自分の知りえるもの、取り扱えるものだと思っているのに、実際は電源コードひとつで四苦八苦するのです。なんという乖離でしょうか。

われわれは自分を大きく見せようとしすぎたのだと思います。時代もいまさら自分は本当は小さいですなんてことは認めてくれそうにもない。今からではとてもとても……。でもこれもおそらく誤解です。

なぜなら、「いちばん大切なのは作品です。」

この書き話しを喜びをもって迎える人がまだいるからです。

九折先生は、然るべき主題を書き話すということじたいに、直接の輝かしい・明るい作用を受けることがありうるとおっしゃいます。

だからわれわれはまだ諦める必要はありません。それをよいものだと信じられる限り誰でも諦めなくていいのです。

作品は厳しいものでもあります。絶体絶命のピンチに陥るような気分になります。どうして自分の思う通りに行かないのかと理不尽に思う時もあるかもしれません。

でもそうした大仰な感情に浸ろうとするもの、自分を大きく見せようとしているだけなのです。だってふと横を見れば自分で手掛けた作品が見えるではないですか。それはきっとてんでダメダメな小さいものに違いありません。

最近はようやく暖かくなってきましたね。電気ストーブとはそろそろ一旦のお別れかもしれません。

でもわたしの部屋の隅にはわたしの修理した電気ストーブがずっとあります。

いちばん大切なのは作品です。

例えわからなくてもわれわれはこの主題で書き進めることが喜びです。本稿ができるまでに何本かあった没稿ですら、喜びの中にあるのです。本来はこうした語られるべき主題を自ら定め進めていくのが話です。

ああ、でもそうなると途端に厳しい。逃げたくなってきます。ですから今は九折先生がくださったことを主題にして何度でも書き話していきましょう。

いちばん大切なのは作品です。

それはともかくとして……と。

文責：大和なげしこ

九折評

オネスティ！　そしてエレクトリックッ！

断線したコードの圧着修理とか……自宅でそんなことをしていたのか。しかも丸形圧着端子ということは、あれね、コンセントのプラグそのものに電線を突っ込んだってことね。くれぐれもショート等には気をつけて。

しかし思いがけないことに、これはひょっとしたら、作品が「工作系」に向かうのか？　いやじつは、工作系に作品が向かう人というのもタイプとして存在するのよ。大工さんとか木工屋さんとか、石工とか、指物とか陶芸とかガラス細工とか。あるいはミニクーパーのエンジンレイアウトとかね。京都の三十三間堂とかも。

電子工作なんかは、おれは世代として、幼心にあこがれたところがあって。それはつまり、「ファミコン」のせいなのよ。ファミコンのあちこちで「接触が悪い」が無数に発生するわけ。それを、近所の兄ちゃん、古い意味での「オタク」の兄ちゃんが、なんか被覆を剥いたり圧着したりハンダづけしたりで修理してくれて、こっちとしては「スゲエエエ」「カッケエエエ」となるわけ。

じっさい、一部の人は定年退職後にやっきになってそういう工作系の専門学校に通ったりする人もあるし、思い詰めて「脱サラする」と言い出して急に職人の道に切り替えようとする人もいる。なげしこにもそのケがあるのかもしれんな。まあ何にせよ「作品」への取り組みは同じ。どれだけ技術のある職人さんでも、自分の「作品」と言われると、われわれとまったく同じく「ぐぬぬぬ」と唸るばかりなのだ。ただそれでも、アートではなくアーティファクトへの道が進んでいくということは類型としてはありうるかもしれん。むろん現状ではただの気のせいかもしれないけれども。

ここ最近は、ワークショップのなげしこ作品で、なげしこの「これまでの整理」「過去の再構築」が行われているのを、一同でよく目撃している。皆それを内心で、

（正直おもろい）

とニヤニヤして思っているので、そのことは存分にやり遂げてよし。ちゃんと向き合っていかないと本当に乗り越えることにはつながっていかないものなあ。

「自分の手でやったこと」には、別の価値と存在があるというのはまさにそのとおり。市販のハンバーグが旨くて自作のハンバーグが不味いというのは同列に並べることはできない。自動運転が連れて行ってくれる旅先をわれわれは「ドライブ」とは呼ばないだろう。

なげしこが、本当には不平不満がなかったわけではなかったということ、本当にはもっと欲しかったものがあったとして、それは果たして何だったのか。「波」が欲しかったのか、それとも……

なおさら、いちばん大切なのは作品です。なげしこの四苦八苦をニヤニヤして楽しみにしているのはおれだけじゃない、どんなものでも本当に自分の手でやろうとしたら四苦八苦の七転八倒だ。

お調子者のホフク前進レポート

ゆか

みなさまごきげんよう存じます。この拙文がみなさまの目に触れるころには、すっかり桜が華やかかと存じます。

じつにくだらない小人の煩悶を申し上げるばかり、お目汚しになるかと存じますが、いつか無聊の慰めにでもご笑覧いただけると幸いです。

「いちばん大切なのは作品です」、まさにそのとおり、このようなまともな文言に基づいてお話し申し上げられることは、わたしの身分を超えて恐懼ながらも光栄なことです。しかし、それに先立ち、まずはみなさまにお詫びと弁解を申し上げなければなりません。

今回、わたしはみなさまにお見せする文章を自分の力で書くことができませんでした。みなさまがご覧になられているこの文面は、九折先生の多大な援けをいただいて作成されております。前もって九折先生から、わたし自身「らしい」文面を草案としてあずかり、それをわたし自身が書き直してゆくというかたちで、ようやくみなさまにご高覧いただけるいちおうのお話としてここに差し上げております。

しかし、さらにお詫びしなければならないことに、「わたし自身が書き直してゆく」ということも、今回はまともにできておりません。この文面は、九折先生からいただいた草案をほぼそのまま剽窃しております。ところどころの言葉尻や言い回しをわたし自身のアホのそれに変えて、いくつかのアホの文章を足しただけで、大学生のレポートであれば盗作として評価の対象外、へたをすると罰則が課せられるたぐいのものです。

このようなやり方が横着かつ不誠実と指摘されれば、まさにそのとおりで、みっともないというご指摘もまさにそのとおりと肯うよりありません。わたし自身、このようなやり方を最も非難してやまない性向のものだったはずなのですが、現在のわたしは、このような救済措置を必要とし、その甘えたやり方にご寛恕を乞うよりほかに、この局面を進む方法がなくなっております。

なぜこのようになったのか？　せめて、そのいびつさ自体にみなさまの好奇心を惹きつけて、いくらかでも読み応えのあるお話にしてゆけたらと思います。

いちばん大切なのは作品です。まさにそのとおりであり、わたしはそのことについて諸手を挙げて賛成する者です。しかし、まさにそのとおりであるがゆえに、とても恐ろしいのです。

わたしがこうしてみなさまの下に拙文をさらけ出すということも、「作品」に該当するに違いありません。そうしてさらけ出された作品が、いちばん大切であるにも関わらず、その出来にわたし自身の満足も納得もゆかないのであれば、それはなかなかの苦境といえるのではないでしょうか。

人はどうでもいいことで苦境には立たされません。いちばん大切なものであるからこそ、それによって人は苦境に立たされるというのが理の必然でございましょう。

わたしは、決して軽々しい気持ちで九折先生に援けを乞うたわけではありません。それどころか、いささか人にはお見せできないような、みっともなく重苦しい煩悶を経て、やむなくこのような方法へと救済を乞うて行き着いたのでした。そして、そのじっさいがとても重苦しい手続きのものであったということが、まさにこのことの性質の悪さを証していると思うのです。

ぜひご笑覧ください。わたしはいまから、きっとご共感いただける矛盾の話を申し上げます。

わたしは、自身のことを取るに足らない小人だと思っております。このことに嘘偽りはなく、客観的にも主観的にも、わたし自身をひとかどの人物と言える道理はないと確信をもって申し上げることができます。

しかし、わたしは自分のつくる作品が、満足のゆくものにならないことに耐えられないのです。

じつに矛盾しているでございましょう。それでいて、これはおかしくない、筋の通ったことだとも申し上げたいのです。

小人のくせに、自分の作品は満足のいくものであってほしいと強烈な意地を張ることは、じつに小人らしいことではありませんか。

自分の作品がとうてい満足のいくものではない、みすぼらしいものであったとしても、それを泰然自若に引き受けられる人がいるとしたら、その人はきっと小人ではなく大物なのです。

スケールの大きな人であればやすやす引き受けられることを自分にとっては大きな障壁と感じてとりみだし煩悶する、それこそまさに小人なのですから、今回お示ししているケースは、じつに小人たるわたしにふさわしいものなのです。

いちばん大切なのは作品です。そして、いちばんのあこがれも、また作品なのです。

そのあこがれへの道を、まるで夜桜の散歩道を進んでゆくように、九折先生の背中を追いかけながらやわらかく歩いてゆけたらどれほどよいでしょうか。しかし、そのような雄大かつ芳醇なことが、果たして小人の辿るものとしてあたえられるでしょうか。

いいえ、九折先生が前をゆかれる夜桜の散歩道をこころの底ではよろこびながらも、わたしの歩みは匍匐前進です。地面に這いつくばって渋面を作り、進んでいるのか戻っているのかわからない、そのような歩みです。

もっと素直で才能ある人たちからすれば、このようなややこしい様はとても歩みには見えない不格好かもしれません。しかし、もしも彼らに、「何でそんなに必死なの」と疑問を呈されたなら、わたしは顔を伏したまま「うるさい」と理不尽に反発するでしょう。

たとえ見るに堪えない無様であっても、これがわたしの歩みである以上、わたしはこの前進をやめたくはありません。わたしは最高峰に至りたいというような壮大なことを考えてはおりません。ただ、わたしはわたしの行けるところまで行ったのだという、ささやかな誇りだけは手放さずにいたいのです。

いちばん大切なのは作品です。そして、それがいちばん大切であるからこそ、わたしは最大の煩悶を示しています。

ここで、わたしがワークショップで「作品」についてどのようにかかわってきたか、またどのようなことを教わってきたかをお話ししたいと思います。

わたしがワークショップを通して九折先生から教わったことは、まず、九折先生はわたしたちを遥か遠く引き離して、本当に「作品」という現象の嵐のただなかに立っていらっしゃるということです。

われわれが「作品」に取り組むと、何時間でも個々に行方不明になり、みんなで考えればそれはそれで船頭多くして船山に登るなか、先生はタバコ休憩といってほんの十数分スタジオを出てゆかれ、戻ってきたときにはもう、「こんなのをやろうか」と完成した寸劇を二つも三つも持って帰ってこられます。しかも、それは前々から準備されたものではなく、いつもその場で創りだされた、まったく新しいものです。

九折先生は、数百回と繰り返されるスタジオでのワークショップにおいて、いつぞや作った作品の変形ではなく、なにかの剽窃でもない、完全なオリジナル作品を毎回新しく考えられます。ときには一晩で二十個近い作品をつくられることもあります。その中で、九折先生はいちども行き詰ったことはありません。また、作品が失敗したとか成り立たなかったということもありません。一度の例外もなく、九折先生のつくる作品は完成しており、すべて段違いに面白いものばかりです。

ふつうは、アイディアやネタが「出なかった」「尽きた」ということがありそうなものですが、そうした頓挫や閉塞はいちどもなく、むしろ最近はさらに作品の生産量が加速していっているのです。

われわれはそのことに何度も驚嘆し、このごろはもう、その驚嘆が毎度のこととなりすぎて、「九折先生はレベチ（レベル違い）ですもんね」という、なぞの納得に落としこむのが慣例になりつつあります。

わたしは大阪の出身です。わたしは、宴会では積極的な盛り上げ役ですし、人を「笑かす」ということについては、きっと自他ともに認めるところといってよいほど、一定の素養と能力があるタイプの者です。その側面については、わたしは「お調子者」でさえあると白状いたしましょう。

また、高校時代に注力した演劇の経験もあり、ワークショップの作品にかかわって、コメディタッチの笑いを誘う表現については、いくつか当を得たアイディアを示せてきています。

しかし、ここ最近になって、自分のその素養が、思いがけず限定的で狭いものに過ぎないらしいということに直面しています。

たしかに、わたしは人を「笑かす」ことに向けていくつかのアイディアと作品を手がけることができました。しかし、五個や十個のうちはまだしも、二十個や三十個となってくると、やがてアイディアが尽き、どこかの時点で「あっ、これは前にやったやつと同じだ」ということが出てきます。つまりアイディアの「使い回し」がはじまるのです。アイディアの使い回しとなると、作品どうこう以前の問題で、そもそも根本的につまらないものであることは明らかです。そのため、新しいアイディアが必要になるのですが、それがまったく容易ではないのです。じつは自分は、すでによく知ったアイディアの領域に住んでおり、その内側を一定の得意にはしているものの、その領域はまったく広いものではないのだということを思い知らされます。

このことについて九折先生は、お笑いのパターンではない、そもそもの想像力の現象と芸術のはたらきに基づくことで、普遍的な創作ができるはずだと教えてくださるのですが、そこで教わる想像力論と芸術論は、とても難しく一朝一夕で扱えるようなものではありません。わたしがこの先へと進んでいくためには、単なる得意不得意ではない、もっと根本的な学門が必要なのだと、今まさに思い知らされているところなのでした。

いちばん大切なのは作品です。いちばん大切なものが高度にこなされていれば、それだけでいちばんの称賛を受けるに足りるでしょう。

それでいえば、今みなさまにそのめずらしい実例をお届けできているのでもあります。

この文章は、まず九折先生が草案としてわたし自身「らしい」文面を執筆してくださり、それをわたしが、できてはおりませんが出来る限り自筆で書き直していくという形で書かれています。しかし、よくよく考えれば、その「わたし自身『らしい』文面」を草案として書いてくださる」ということじたいが、そもそも困難極まることのはずです。自分自身の文章をまっとうに書くだけでも難しいのに、どうして他人の文章を書けるわけがあるのでしょう。

しかし、理解の範疇をはるかに超えて、九折先生は実際にこの文章を書いてくださいました。しかも、それを本当の「朝飯前」で済ませてしまうのです。本当に、寝起きから手がけて朝食前には完全な

実作を仕上げて終わらせてしまうのです。そしてその実作はただ完成までが速いだけでなく、わたし以上にわたし自身のことを捉え、自分でも気づいていなかったような、わたし自身「らしい」話が丁寧に整えられ示されたものなのでした。

そのような実際のことの中で、今回九折先生が与えてくださった「いちばん大切なのは作品です」という文言を受けては、たしかにそのとおりであると共に、何ならそれ以上のものが向こう側にあるというようにも直観させられます。われわれが単なる努力をしたとしても、きっと九折先生のようにはならないでしょう。ですから、いちばん大切なのは努力ではなくて、やはり作品なのだと思います。

少しわたし自身のことをお話しさせてください。恥ずかしながら、わたしは生まれ育った環境があまり良くなく、ありていにいうと精神的な損傷を受けて育ってきた面があります。それでもいちおうまともな大人のひとりになれたと自分では信じているのですが、じゅうぶんな誰かになれたとは未だ言い張れないところにいます。

古い環境からはすでに脱却しておりますが、よく知られているとおり精神的な損傷はその後も継続してしまうところがあります。それによってわたしは、不本意ながら陰鬱さに落ち込むときや、重苦しさに閉じ込められるときがあります。そしてまさにそれによって、わたしは今回、すべてを自筆で書き進めるということができなくなったのでした。

わたし自身、おのれの不始末や未熟を環境や他人のせいにすることを忌避し、「やるべきことをやるのだ」と、これまで自分を奮い立たせてきたつもりでおりました。しかし、そのような正論の力みは閉じ込めの中でただ葛藤しているだけに過ぎず、けっきょくのところ根本的な脱出には至りませんでした。

一方で、ワークショップで教わる、作品とは対をなすような身体操作や武術（的な）技法については、わたしを明るくさせてくれます。

各関節の呪縛を解放し、正中線から浮身を得ると、「内からの抜け」を獲得するという九折先生の理論と実践については、わたしはきっと人並み以上の進みゆきを得ており、そのことは単純にわたしによろこびと満足を与えています。一般的には知られていない身体の機能と現象は、それだけでも輝かしく、それじたいのすばらしさを持っていると思います。

しかし、そこから九折先生の教えるところは、「身体が呪縛から解放されたとして、その解放された身体に『何が入るか』が問題だ」ということです。そしてそれはまさにそのとおりで、身体操作と武術はわたしに明るさと自信を与えてくれましたが、それだけでいつぞや受けた精神的な損傷を超克するということにはならないようです。

自分で「作品」を手がけようとするとき、誰だって自分の内側か、自分の魂のうちに手掛かりを探すでしょう。そうして自分の魂を手探りするとき、自分の得てきた体験のうち、強い体験は何かというと、やはりかつての損傷的体験に出くわします。そのことの確認がわたしを精神的な危地に追い詰め、それと同時に、やはりこのときにこそ、わたしは肝腎な情報に出くわすように思うのです。

これでは、まるでその精神的な損傷にかかわること、その損傷じたいがわたしの魂の作品ということになってしまう。

このことについて、わたしはまだ解決を得ておらず、いまこの時点ではなにをどうするのだとお話することはできません。ただそれでも明確に申し上げられるのは、わたしはそちら側には帰らないということです。

わたしにとって、幼少のころからのその精神の損傷は、ある意味よくなじんだもので、そこにある世界はよく知った古巣という側面があります。その古巣に帰ってしまえば、慣れた暗さと共に、ある種の気楽さがあることも重々知っています。それでも、わたしはそちらに帰ることをもはや選びません。な

ぜそのように断言できるのかと問われると、わたし自身では返答に窮しますが、ここは九折先生の知恵を借りてこのように答えたいと思います。弟子が先生の知恵を借りるのは正当なことでしょう。

いちばん大切なのは作品です。

わたしにとって、精神的な損傷は、重大なものではあれ、大切なものではありません。

大切なものではないのだから、それはわたしの作品にはならないのです。

もしこの先のわたしに不幸がありうるとすれば、わたしが大切なものをいちばんとして掴めず、わが身に降りかかった重大なことばかりに支配され、ついに自分の作品を持たなかったときでしょう。

いちばん大切なのは作品です。

わたしは大阪の出身ですが、いまは東京に住んでいます。

なぜ東京に住むようになったかについては、もちろん九折先生とのかかわりがあったのですが、その詳細については、なんとも描写しきれません。

職分としては、東京に転属できるような可能性はまったくなかったはずなのですが、信じがたいことがあれよあれよという間に起こってゆき、本当に東京に永続勤務することになったのでした。その間、わたしは周囲の人々に「東京で働きたい」とひたすら吹聴していただけで、それはもう、ご都合主義のテレビドラマでも許されないような、求めれば与えられるということそのままの、幸運が積み重なっての出来事でした。

わたしはそのときのことを、素直に奇蹟と呼びたいと思います。

そしてこのときの奇蹟が、わたしが生きてきた中で、最大の作品的な出来事だったと思います。

その奇蹟は、地理的にも象徴されるように、わたしの古巣と対極しています。

奇蹟と古巣が対極していたとして、わたしにとって大切なのはどちらでしょうか。

言うまでもありません。

もし、どこかの誰かが、わたしと似たような煩悶を持っているとすれば、共に励まされるためにわたしはこのように申し上げたく思います。

「大切なこと」と「重大なこと」を取り違えるべきではない。

重大なことが作品だと誤解してはならないのです。

九折先生は作品をつくる際、いつも「自分の心当たりを探すな」とおっしゃいます。作品を自分の内にある重大さに求めるのは誤りです。それは大切なものではありませんし、そこに作品はありません。

重大なことに対して正義を振りかざすことは、ときに必要であったとしても、それは「いちばん」のことではないのです。

いちばん大切なのは作品です。

「大切なこと」のほうへ踏み出す、勇気を振り絞らなくてはなりません。

大切なことを直視し、それをいちばんにして目を逸らさないとき、わたしは何にもおびやかされません。

大切なことから目を逸らし、何がいちばんかをおろそかにしたとき、わたしは決まって陰鬱さや閉塞におびやかされていきます。

今回わたしは、無念なことに、そのおびやかしに苦しめられ、自筆ですべてを書き切るという誠実さの基本的なことをまっとうできませんでした。そのことは、わたしの節度と自尊心にとってやましさをもたらしています。

けれども、そのやましさが重大なものであったとしても、その重大さは脇に置こうと思います。たとえ重大であっても、それはいちばんの順位に置かれるものではありません。わたしのやましさは作品ではないのですから、脇に置かれるのが道理のことです。

いちばん大切なのは作品です。ここに、九折先生の援けを得てのものではありますが、じっさいの作品としては遥かにまともなものを示すことができました。そのことを、いちばんのよろこびとしなくてはならないと思います。どこまでも、もとの九折先生の草案がすばらしいだけじゃないかと言われたら、まさにそのとおりで無念きわまるのですが、次回以降のいずれかのときに、きっと、すべてわたしの自筆だよと胸を張れる傑作をお示ししたく思います。もしそのことが叶ったならば、そのときはどうぞ「お調子者」のほうのわたしにお付き合いくださいませ。

それではごきげんよう、またお会いできる日を楽しみにしています。

草案：九折
文責：ゆか

九折評

エクストリームグレート文面ッ！　なんだこれは、こんなの天才の書く文章じゃないか。迫りくる内容が、きわめて正確に描写され、文体と文脈を具えて、気づけばいつのまにか読まされている。すげえッ！

あ、そりゃそうか、これはおれが書いたのだったな。天才の文面で当たり前だった。失敬、失敬。

まあ誰が書いたにせよ、自分が文責を負って、じっさいすぐれた作品が提示されたならそれでいいんではないか？　なんかそういう気もしてくるよなあ。誰が書いたにせよ、じっさい読み手の側はすぐれた作品を読めたわけだしィ〜

そんなふざけたことが、あんがい正しかったりする。少なくとも、道を拓く可能性は大だったりする。

なにしろほとんどの人にとって、自分の「作品」なんてまったく重大事でないのだ。どうでもよくない？「作品」なんかそこまで興味ない。もっと、自分の業務とか、人間関係とか、体調とか、見た目の美醜とか、年齢とか、恋愛とか、「しんどい」とか「楽をしたい」とか、こころの傷とか、憎悪とか恨みとか、願望とか、好き嫌いとか、劣等感とかみじめさとか、「負けたくない」とか「バカにされたくない」とか、人に迷惑をかけないとか、そういったことが自分の重大事だ。

そしておれは、その重大事が、重大さのまま幅を利かせ、最後までちっとも解決しなかったという実例をさんざん見てきた。
なんで解決しないのか?
それは理の必然だ。
たとえば、最強最悪の戦車がそこにあったとして、その戦車は「いちばん強い」のだから、これを排除できる方法なんてあるわけがない。
最強最悪の戦車はただの「支配者」だ。
そいつが「いちばん」である以上、その支配者が斃されることはありえない。
どんな手段でぶつかっていったとしても、こっちがその戦車を前もって「いちばん強い」と言っているのだから、こっちが打ち砕かれるのは目に見えている。目に見えている以上に、もはや^^自分で約束してしまってる>>とさえ言っていい。
というわけで、この事象に隠されているトリックは以下のとおり。
「作品」なんて感覚的に〝他人事〟なのだ。自分の重大事ではないのだから。
そして、その他人事がいちばん大切という発想はあまりに発明しづらいということ。
今回、ゆかの文章を九折センセーが書いたので、じつにその「他人事」という本質が浮き彫りになる。
賢明な読み手は興奮しろ。
気づくかな~
九折センセーがゆかの文章を書くってどういうことよ。人の文章を書くってどういうことよ。
どういうことと言ってもな。

そもそもおれは、九折さんの文章を書くときも、人の文章を書いているのだ。
作品なんて感覚的に他人事なのだと、さっき言ったとおりにだ。
いちばん大切な他人事がそこにあるということ。
いちばん大切なそれに比べたら、戦車とかどうでもいい鈍重な鉄クズってわけよ。
もし今回、「九折さんが他人の文章を書いた」と注目されるのであれば、「おれはそもそも他人の文章しか書いたことがないよ、私小説家じゃあるまいし」と弁明するだろう。
ただし、他人の文章といって、おれはおれの主体性でしか書かないけどね。
本当の仕組みが視えている人はまだほとんどいないはずだ。
じっさい、いまおれは、事実上おれが書いた文章に、おれ自身で「九折評」なんてやっているわけだ。「おれ」ばっかりじゃないか。おれおれ詐欺だ(誤り)。
じゃあ、「おれ」ばっかりだとして、ここにある主題は「おれ」だろうか。「おれ」の重大事が何か語られているだろうか。そんなものは残念ながら見当たらないなあ。
ではここで主題にされているもの、いちばん大切にされているものは何か。
おっと、もう紙面が足りないので残念ながら締めくくることにしよう。
さあ混乱したまえ、いちばん大切なのは作品です。

【ページの空白を埋めるためだけの鬼ほどどうでもいい話のコーナー】
今回のワーQは、前回と比べて各員のペンネームが大きく変わっています。それはわたしが、「オイお前ら、AとかHとかMとかでは、読む側はイメージの持ちようがないんだよ、もうちょっとまともなペンネームつけろ」と言ったからです。そうしたら誰かがわたしに「あの、ペンネームを作ってくださいませんか」と言い出して、それを言い出すと他の人も「わたしも」と言い出してこうなったというわけです。今回、六法踏子、すめらぎまいこ、Riemerschmid(リーマーシュミット)、大和なげしこ、これらがわたしのつけたペンネームです。梶見エミルカも以前にわたしがつけたペンネームです。ペンネームのつけ方は、第一に「名は体をあらわす」がよいと思います。次に当人の「縁(ゆかり)」に引っ掛けて、なるべく本人のものとなりやすいように。AとかHとかMとかでは、男性か女性かさえわかりませんからね。ところで使い道はありませんがあこがれのアイテムは中華包丁です。

一％からの今後の展望

かなみ

一番大切なものは「作品」です。

一％の門をくぐり抜けて入った会社に勤めて、一年と九ヶ月が経ちました。

一次面接でわたしの話に心を向けてくださったエリアマネージャーは地方への異動が決まり、「お待ちしておりました」とわたしを笑顔で迎え入れ最終面接をしてくださった上長はエリアマネージャーに昇格し、小さなことでも流さず教えてくれた先輩は隣の事業所へ異動していきました。逆に新しく異動してきた方もおり、サバサバしていて気のいい彼女にわたしはすっかり懐いています。

社内システムは次々と変わり、使い方を覚えたと思ったら新しい機能が追加され、法律が変われば社内ルールが変わるので、書類の書き換えやら、関係各所への連絡をチマチマとすることになります。

オンラインで開催される全社総会では、事業所の新規開設や、新事業の発足など、未来の話が次々とされています。

いつだったか、九折さんから「速いほうが偉い」という教えを受けました。新しいものを絶え間なく生み出している会社は偉い、そして偉い会社の流れは速いんだということを、わたしは入社してから初めて、身をもって感じたのでした。

「前もって主題が決定されていること」について話したいと思います。

入社前の一次面接のときのことです。面接官に向けて前職での経歴などをひとしきりお話させていただいたあと、面接時間の終わり頃、「三年後、五年後はどのような仕事がしたいですか？」と、面接官からの質問がありました。数年後のことなんてさっぱりわかりません。小さなことからコツコツと、みたいなことを苦し紛れに答えた気がします。

「数年後なあ……。」一時面接は終了しましたが、わたしは胸の引っかかりに問いかけを続けていました。数年後と言ったってと思いつつも、ここからなにか目指せるキャリアはあるのだろうかと検索をすると、事業所の配置基準でも定められている、サービス管理責任者の資格が目に入ってきました。調べてみるとわたしは前職からの経験もあり、実務経験の要件は満たしており、研修を受講すればそれになれるのでした。

これか……？でも、果たしてわたしに責任者なんてものが務まるのだろうか、いや、とてもとても……とぼんやりと考えているうちに、一次面接通過のメールが届きました。

けっきょく、数年後のビジョンについては定まっていないまま最終面接を迎えました。緊張のままに現場責任者の方とも質疑応答を交わし、途中から一次面接のときの面接官が入室してきました。「緊張してる？」「はい！」の返事が一番元気だったような気がします。そこからもやりとりは続き――内容は覚えていないのですが、致命的に答えられなかった記憶はないので、きっと口は動いていたのだと思います。ただ、まだ採用への確信はまったくありませんでした。

そんな中、「三年後、五年後はどのような仕事がしたいですか？」面接官から、あのときと同じ質問がありました。

「一次面接の時は考えられていなかったのですが、改めて考えさせていただきました。現場での仕事に慣れて経験を積むことができたら、サービス管理責任者になりたいと思います。」

空気が、変わった気がしました。これが最後の質問でした。

今になっても、少なくとも仕事においては、前もって語る主題が決まっていることはわたしにとって制約にはなりませんでした。むしろ、ここを目指すという「語れるものがある」という安心感さえあります。見切り発車で主題を提示したあの面接から、一年と九ヶ月と少しが経ちましたが、サービス管理責任者になるという主題は今もそこにあり、会社におけるわたしの目標設定の軸になっています。

働く上での目標というものを立てたのは、今の会社に入って初めてでした。今までの会社では、自分で目標を立てて評価を受けるという制度がなかったのです。その環境では、毎日の業務はこなしている

けれど、どれくらい進んでいるのかわからない、成果も見えない、苦しい状況でした。

やってみて初めて知りましたが、目標を立てるのは、楽しいです。適切な目標が立てられるスキルが身についているかは別の話になってしまいますが、一歩先の自分を文字に起こして、そのための具体的なアクションを上司と一緒に考えることができて、周りの同僚や先輩にも共有できて応援もしてもらえる。

もっと力がほしいです。目標に向かうためにできることはなにか、それを明確にして、確実に上っていけるように階段として組み立てていく力。今のままではしっちゃかめっちゃかで、脇道に逸れまくっています。幸い、先輩方はみなさま偉大なので、彼らの背中を追いながら、わたしも主題へと続く階段を組み立てる力を養っていきます。

一番大切なものは「作品」です。

仕事における作品とはなんだろうか、ということを考えてみました。

わたしの職場は、障害を持った方が一般企業に就職するための支援を行う事業所です。

就職を目指す方がいらして、どうやって就職に向かうかの計画を立て、各種プログラムを行い、相談に乗り、履歴書を添削し、企業とのやりとりをして、など業務は多岐にわたります。

たとえば履歴書に関してはわかりやすく、訓練生の方が書いた作品といえるかもしれません。添削依頼がやってくればわたしたちスタッフが手を加え、それを修正していただき、ブラッシュアップされていきます。

また、もう少し広い視野で見てみれば、プログラムの場も作品かもしれません。就職者が訓練生の方に向けて話す講演会を定期的に行っているのですが、訓練生の方にもそれぞれ聞きたいこと、求めるものがあります。それに応えて、質疑応答の時間などにファシリテートを行い、全員にとって実になる場に計らうことは、場という作品づくりに携わっているといえるでしょう。

そして最後に、訓練生の方の成果も、作品といえるのではないでしょうか。ある訓練生の方は、来たばかりのころは声も小さく、見るからに内気という印象でした。前職での失敗経験もあり今後への不安が見てとれました。しかしそれから、スタッフとの面談、プログラムや実習への参加を経て、持ち前のフォロー能力を生かし後輩の訓練生の質問に丁寧に答えるようになり、グループ活動を通して朝礼の周知で人前に立つようになり、ご本人にとってかなりよいといえる環境に就職が決まりました。彼は大きな成果を手に入れました。成果というのは、就職だけではありません。その間のささやかに見える変化もそうです。よく笑うようになった、以前より背筋が伸びている、声にハリが出ている……卒業するときには、わたしたちスタッフ一人ひとりにメッセージカードを渡してくれました。

訓練生の方が日々作品を生み出しています。わたしも負けてはいられません。それ以上の作品で応え、循環を生み出していきたいと思っています。

そしてわたしはいずれ、その空間の指揮をとる責任者になります。

一番大切なものは「作品」です。

訓練生の方の成果が作品なら、わたしの成果も作品です。

今はカフェの一角でこれを書いているのですが、隣の席に意識が高そうに見える二人組の男性がいます。今は携帯をいじっているようですが、さっきは二人して法律かなにかの本を読んでいました。だから対抗しているのです。彼らの意識の高さに。背筋を伸ばしてカタカタパソコンを打っていれば、わたしもデキる人間に見えるでしょう。ああ、それにしても花粉症で鼻がむずむずする。

という、わたしは見てくればかりを気にするしょうもない人間ですが、職場に行けばそれなりにやっているのです。ただそれは、周りの方々のおかげです。就職という主題を定めた訓練生の方々のエネルギー、そして先輩方が回し続けてきた循環装置に、わたしも携わらせてもらっているだけです。

そして九折さんのワークショップでも、自分発の作品はまだほとんど作れておりませんが、作品に呼んでもらえれば、ワーイと飛び込んで動くことができます。実力うんぬんを無視して発言をするなら、できれば舞台の真ん中がいいです。ただやはり、本物を目の当たりにした時は、あ、こういう人が舞台を作品にしているんだ、まったくかなわない、と降参します。九折さんのことです。

主題は「寛容さ」の中にしか現れない、と九折さんはライブの中でおっしゃいました。

思い返せば、普段の自分は不寛容さの中でガチガチで、ひとたび角張った言葉を投げられると、シャー！と喧嘩をしている猫のような反応をしておりました。猫は本来もっとかわいらしいものらしいということは頭の隅にはありつつ、自分は喧嘩腰の猫でしかいられないのではないかと、一人になるとおセンチに浸ることもありました。

が、それはあまりにももったいない。この月刊ワーQ執筆をきっかけに今までを振り返った結果、この不寛容ムーブに自分のみの力で対抗するのは不可能だと判断しました。本当は、こういうムーブもなんのそので対処する、カッコいい自分でいたいと思っていましたが……。わたしのような者は、場の寛容さに結びつかないと動くことができないのです。

幸いにも、寛容である場と、わたしは接続させていただくことができています。失敗をすると、なにか致命的な、自分の価値が下がるような心地がしてしまいます。が、それは慣れ切った不寛容ムーブを引きずっているからで、寛容さの中ではなんともないことなのかもしれません。

一番大切なものは「作品」です。

作品というものは、立派でないとそれとみなすことはできないと思っていました。しかし——寛容さの中では、不格好な、きれいでないそれも、愛されるものなのかもしれません。

ワークショップの時間で作品を提出します。不出来なものであっても。その前にまずワークショップに行きます。寛容な空気に慣れに行きます。ライブも観るしブログも読みます。くすぶったムードに構わず、九折先生の怒涛の作品の中で生活します。

あと、料理をします。育てた野菜などを使って、自分の手で作ります。アカンものが出来上がる可能性もありますが、それも含めて楽しく身体に取り込みます。

仕事をバリバリします。自分の作品が人に作用し、循環することのよろこびの中で生きていきます。

寛容さの中で文章を書くことは、とても楽しいです。だから、寛容さの中で作品を生み出し続ける人生も、きっと楽しいです。

一番大切なものは、まぎれもなく「作品」です。

文責：かなみ

九折評

トレ・ビアン！　かなみの性質が、与えられた環境と職務にうまく噛み合っているようで何より。なるほどたしかに言われてみれば、かなみの性質はその「寛容さ」ということに如実に反応していると思う。かなみには理屈っぽさがなく、その脳細胞は「三角形の内角の和は百八十度」と言われただけで九割がシャッターを閉めて休業しだすというほど。代わりにダイヤモンドとかエメラルドとか言うと、その閉められたシャッターが厳（おごそ）かに開き始めるのだが……

不寛容さの中に置かれたかなみは、まるで冷凍庫の底に入れられたコケシ人形というぐらい役に立たないものになる。もはや動くことさえなく、ひたすらあわれに凍りついただけの存在。そして逆に寛容さの中に置かれれば、解凍されてムフフと、どこからか強い自信を取り出しはじめる。そうして考えてみたらオメーもけっこうヘンな奴だよなあ。

ともあれ、かなみが担っている職務は、まさに寛容さが土台となるところだから、まさにかなみに適合しているかもしれない。寛容さとは何か、不寛容とは何か。不寛容というのは、たとえば社会への参画がうまくはかどらない人に向けて、

「オイコラ、勤労の義務が憲法に定められてんだけど」

と言いつけるようなことだ。つまり「テメエの無職は自衛隊が気まぐれ核ミサイルをポリネシアに乱射するというのと同じぐらいの憲法違反なんだよ」と中指を突き立てるということ、そういう目くじらの立て方をすることを不寛容という。ちなみに憲法というのは権力者に課せられる法であってわれわれ一般の民に課せられる法ではないので、憲法をもって民たる個人をいじめる言いようをするのは法の趣旨にそぐわない（というこの説明の仕方もわれながら寛容さがない）。

不寛容さの中では、すべては課題になり、課題の中に主題は現れてこない。主題はすべて消え去ってしまう。不寛容に開脚とバランスの課題ばかりを負わされたバレリーナに白鳥の主題は現れてこない。誰だってフォークリフトを見たらそれを上手に運転できるようになってみたいという主題を自然に持つ。幼い少年なんかなんでもいいから「運転手」になりたがるものだ。しかしそれを「じゃあ免許取得が課題ですね」と、不寛容な課題にすり替えると主題は消えてしまう。「速いほうが偉い」という主題は、「速くならないといけない」という課題にすり替われば消えていってしまうだろう。

作品がいちばん大切だ。不寛容な課題に抗し、あえて主人公が寛容さの中に立つのなら、その主人公は主題を持つだろう。その道筋でかなみ作品は成り立つだろうし、その作品の成立はきっと、かなみが目撃するクライアントたちの物語成立と相関していくに違いない。三角形の内角の和は百八十度だ。あっコラ、シャッターを閉めるな。いちばん大切なのはダイヤモンド、じゃなくて作品だ。クライアントがひとつの物語を成り立たせるたび、負けていられないだろ、かなみもひとつの物語を成り立たせにいらっしゃい。

【ページの空白を埋めるためだけの鬼ほどどうでもいい話のコーナー】

貴重なものは広められるべきですが、大切なものは守らなくてはなりません。このワークショップ、メンバーのみんなが大切にしてくれて、いつのまにか他になく大切なものになってしまいました。そのことをわたしは堂々と威張ろうと思います。いや誇ろうと思います。ちゃんと、守らないといけないほど大切なことができたんだぞと。それで、一般参加の枠は限定的なものにならざるを得なくなりました。どうかそれを「すばらしいことだ」と捉えてくださいますよう。まあ限定的といっても、初めて触れた人はじゅうぶん脳みそ崩壊寸前になるだろうし。これについてはいろいろあるのです。言いたくなってきた！　次のコーナーでお話しします。ところで畑はないですがあこがれの農作物はトウモロコシです。

毛虫の名前

ユウサク

皆さんこんにちは。
一番大切なのは作品です。
それはさておき、ダッ、最近自宅に新しく導入されたスピーカーの性能が、とてもいいのです。
ＪＢＬの、けっこう本格的なスピーカーで、サウンドハウスという通販サイトで購入しました。
「ベクブォゥーーン」、これは起動音です。
このスピーカーからは非常に立体的ないい音が出ます。
スピーカーを通して、音楽を聞くことが、こんなにも日々の生活を豊かにするとは、思いもしませんでした。
ノートＰＣの内臓スピーカーから出る音とはエラい違いです。
しかし、このＪＢＬスピーカーにはおかしな特徴があります。
何かしらの音楽を再生していると、一定の間隔で「シャカシャカ」した音になってしまうのです。
当初は「あー、なんかシャカシャカ言うなぁ」ぐらいにしか考えていませんでした。
しかし、ダッ、以前九折先生が「電化製品を購入したら、まず不具合がないか確かめるといい。初期不良というのはよくあることだからな」と仰っていたことを思い出しました。
「このスピーカーも、もしかすると……」
そう考え始めたのは、購入から１か月ほど経ってからでした。
早く買い替えた方が、いいのかもしれません。
ですが、その時点で僕の内心は、「このスピーカーからは、シャカシャカした音が出るんだ。これはそういうヤツなんだ」と納得する方向に切り替わってしまったのです。
カスタマーサポートへの連絡は、まだ先の話になりそうです。
僕のスピーカーからは「ベクブォゥーーン」という起動音が出て、一定間隔で「シャカシャカ」言います。
一番大切なのは作品です。
どうぞよろしくお願いします。

「ユウサクは、この冬までにパスタの食べ方が上手くならなければ、毛虫の名前を４０種類覚えること」
九折先生から、唐突に僕に命令が下りました。
１月下旬、とあるワークショップ参加者の自宅にみんなで集まって、食事をしていた時のことです。
先生の命令は、いつも唐突ですよね。
ダッッ。
ここで、かつてのユウサクが、どう食事をしていたか、解説のコーナー。

１．食器に対して前かがみに、正面からは俯いて見えるように食べる。
２．麺類はすべてラーメンだと思っているところがあるので、麺料理はことごとく「ズルズル」と音を立てて啜って食べる。
３．「料理の味わいに浸る」という独自世界に勝手に旅立ってしまうため、「食事中の会話」という機能が休眠状態に陥ってしまう。

以上、解説のコーナーでした。ダッ。
特に意識したことはありませんでしたが、こうして列挙してみると、我ながら偏った食べ方をしていますね。
こういうのって、自分自身では気づかないものなんです。
人から教えてもらって、初めて発見していくものなんです。
僕も、九折先生から指摘されて、初めて気がつきました。
先生からのご指摘は「ユウサクって普段、スピーカーで音楽を聴かないだろ。イヤホンで聞いてるだろ」という、パスタからはかけ離れた所からスタートしましたが……。
「例えば、オーケストラの演奏や、民謡を聴く時は、大抵スピーカーで聴くよな。一方、ロックやメタルの場合、イヤホンで聴くことが多いだろ」
「そうですね」
「特に、メタルっていうのは、脳髄で聴くものなんだよ」
「はい！　そうですね（笑）」

「メタラー（メタルを好んで聴く人）っていうは、何となく、イヤホンをつけて、前かがみの姿勢で音楽を聴くイメージがあるよな。食事の時も同じで、そういう人たちは、食器に身体を寄せて、前かがみになって食べている。音楽を聴くときの姿勢がそのまま出ているんだよ」

「えええ。そうなのか……」

これまでの十数年間、イヤホンでメタルや深夜ラジオを聴き続けるだけの、偏った青春時代を過ごしてきました。

そんな日々が、巡りめぐって食事の仕方にまで影響を及ぼしているとは……。

あああ、九折先生の指摘には、謎の説得力があるなぁ～。

それはともかくとして、一番大切なのは作品です。

もちろん、食事の仕方は人や国、文化によって違いますし、まして他人の食事の仕方にあれこれ言う必要はないと思います。

問題なのは、ちゃんとした場（イタリアンレストランなど）で食事をする時のことです。

この偏った食べ方で、ちゃんとした場にぶち込まれると、僕はきっちり恥をかいてしまうでしょう。

こんな僕でも、「ちゃんとした場で恥をかきたくない」という理性は残してあります。

確かにメタルは脳髄で聴くものなのかもしれません。

が、それと食事の仕方とは、ちゃんと切り分けるべきだと思うのです。

それが大人というものなのです。たぶん……。

先生は、僕がちゃんとした場で恥をかかないよう、食事の仕方の再構築を命じてくださりました。

背後に毛虫をチラつかせながら……。

一番大切なのは作品です。

翌日から、パスタを食べる自分自身を撮影する日々が始まりました。

パスタを茹で、適当なソースをビャッとかけ、テーブルに持っていきます。

テーブルの上にあるのは、ＪＢＬのスピーカーです。

イヤホンで脳髄にメタルを注入することしか知らなかった僕に、九折先生が購入を勧めて下さった、ＪＢＬのスピーカー。

左右２つのスピーカーの間に、専用の三脚で固定したスマートフォンを設置し、食べる姿を撮影します。

録画した映像をチェックすると、どこか不貞腐れた、やさぐれた表情の男性が映っています。

こいつは、食器を左手に持ち、右手のフォークでパスタを不器用に口に運んでいます。

「こいつ、見るからに“やさぐれ”てるなぁ。普段からこんな表情で食事しているのか」

不格好な自分自身を直視すると、少なからずショックを受けるものです。しかし、

「まぁいいか。どうせなら、とことん撮ってやろう」

僕は撮影を続行しました。

この“やさぐれ”男の食べ方がどう変化するのか、研究対象として観察したくなっていたのです。

やはり、一番大切なのは作品なのです。

“やさぐれ”男がパスタを食べる動画のアーカイブは増え続け、スマートフォンの容量を圧迫してゆきました。

パスタ命令から２週間ほど経った頃、九折先生が「ちょっと練習の成果見せてみて」と仰りました。

その日も、参加者のひとりの自宅で、食卓を囲んでいました。

そこで出されたのが、九折先生お手製のカルボナーラだったのです。

待ってました。２週間の成果を見てくださいとばかりに、僕は左手でカルボナーラが盛られた皿を持ち上げました。すると、

「いや、食器は手で持つなよ」

九折先生が止めに入りました。

「（えっ）」

いったん皿は置きましたが、止められた理由がわからず、僕はもう一度皿を持ち上げました。

「いやだから、食器は置くんだって」

僕は九折先生から、西洋式の食事の仕方を改めて教わりました。

・基本的に食器はテーブルに置いたまま。
・自分の身体（ボディ）は、食器と一定の距離を保ったまま。
・パスタの場合、右手のフォークで巻き取り、そのまま口に運ぶ。

僕がこの2週間続けてきたやり方と似て非なる、いや全く異なる食べ方でした。

僕は、完全に独自の食べ方を、2週間撮影し続けてきてしまったのです。

いったい先生から何を教わったというのでしょうか。

想像するに、音楽の聴取方法と食事の仕方は似ているという話に夢中になり、肝心のパスタの食べ方はどこかへ飛んで行ったのでしょう。

自分のアホさ加減にめまいがしましたが、別の角度の発見もありました。

僕がパスタを食べる映像を撮影していることを聞いた九折先生が、「精神的にタフになったな」と仰ったのです。

「普通の人は、自分の食事する映像を自分で録画して見るなんて（精神的にショックが大きくて）できないっスよ」

なるほど。確かに、自分の姿を客観的に見てショックを受けても、精神的にそこまでジタバタしなくなりましたね。

先生に指摘されて、初めて気がつきました。

これはあれです、ワークショップの「作品のコーナー」のおかげです。

日頃から自分の未熟な姿が録画され、その様子を毎回「強制視認」させられているので、多少のショックを受けても、もはや落ち込むことはなくなったです。

ワークショップで精神を鍛えられていたことを、思いがけない形で発見した瞬間でした。

やはり一番大切なのは作品、ということですね。

まぁ、食べ方は間違っていましたが……。

このまま「ちゃんとした場」に放り込まれても、完全にガラパゴス化した食べ方を披露することになってしまいます。

先生から食べ方をちゃんと教わった僕は、自宅での撮影を再開しました。

「ちゃんとした場」でパスタを食べる機会は、想定していたよりもすぐに訪れました。

ワークショップ参加者の一人が、「九折さんの下で、みんなでピザを食べながら俗ワイワイする会」を開催して下さったのです。

（俗ワイワイについては、九折先生のブログをご参照ください。）

ありがたいことに、僕もそこに招いて頂きました。

会場は、銀座の本格的なイタリアンレストランでした。

店内はシャレオツ（死語）で、お客さんはみんな「ちゃんとした服」を着ていました。

メニューからは「サルバトーレ」という声が聞こえてくるようです。

これ以上ないくらい「ちゃんとした場」でした。

まさか、こんなにすぐに試される時が来るなんて……。

会合がスタートし、みんなピザばかり食べるわけがなく、中盤あたりでパスタ料理が注文されました。

ペペロンチーノだかスパゲッティだかが、僕の小皿に盛られました。

その時の僕はどうであったか。

やはり、信頼する先生からやり方を教わっていると、ちゃんとした場でも冷静でいられるものですね。

僕は、皿と身体（ボディ）との距離を一定に保ったまま、皿を手に持つことなく、パスタをフォークで巻き取り、堂々と口に放り込みました。

レストランで恥をかかずに済んだのです。

まぁ、僕一人が恥をかいても、大した問題ではないのですが……。

その日は、恥をかきたくない、別の理由がありました。

九折先生の下で俗ワイワイするために開催されたその日の会合には、裏テーマがありました。

ワークショップ参加者の一人である踏子さんの、司法書士試験合格を祝うための、サプライズプレゼントを渡す場でもあったのです。

踏子さんは、ワークショップに通いながら、司法書士試験の勉強をし続け、今回見事に合格しました。

分厚い参考書を片手に、試験勉強に食らいつく踏子さん。

そんな踏子さんの姿を間近で見ながら、「なんで参考書はこんなに分厚いんだろう。あ、頭痛くなってきた」と恐れおののくだけだった僕。

そんな僕としては、せめてこの場所だけでも、たとえパスタの食べ方ひとつでも、ちゃんとした姿を見せたかったんだと思います。

プレゼントをもらって、踏子さんは幸せそうでした。

ちゃんとパスタが食べれてよかった。

これで僕も、大人の階段を一歩登れたのかもしれません。

「ユウサクさん、よかったですね。これで毛虫の名前を覚えなくてよくなりましたね」

参加者の一人の女性にそう言われた時、僕は何かが「終わった」ような気がしました。

そういう「音」が聞こえたような気がしたのです。

最近も、似たようなことがありました。

以前僕は、九折先生から「ユウサクは、若いころの森進一の歌を覚えるといい」と言われたことがありました。

その時から、僕はYouTubeで「襟裳岬」や「冬のリヴィエラ」を聴いたり、みんなの前で軽く歌って遊んだりしていました。

そして先日、みんなでカラオケに行く機会があり、僕はそこで「冬のリヴィエラ」をガッツリ歌ったところ、みんなが異様に盛り上がってくれたのです。

その場にいた先生は、こう仰りました。

「いやぁ、ユウサクに森進一を教えたのは、正解だったな」

そしてここでも、例の何かが「終わった」音が聞こえた（ような気が）しました。

「めでたしめでたし」と、誰かから言われたようでした。

これは、話が終わった音なのでしょうか。

九折先生の周囲には、無数の話があり、それらは現在も進行中なのです。

僕もその、話の中にいるのかもしれません。

僕のJBLのスピーカーからは、「ベクブォゥーーーン」という起動音が鳴り響き、一定間隔で「シャカシャカ」言います。

一番大切なのは作品です。

話にも、音があるのかもしれません。

とりあえず、カスタマーサポートに、連絡してみます。

文責：ユウサク

九折評

ベリー面白くてグッド！　面白さについては心配になるほど。なんでこんなオモシロい文面が書けるんや、ちょっとふつうの人にはない感覚だぞコレ。

自分の食事の様相を、自ら撮影して点検したというのは正直スゴいと思う。ふつう人ってそんなことに耐えられないからね。何かがキツくて。そのことは、たしかにユウサクの成長を示しており、同時にユウサクがじつは根本的にはすごくやる気があるということを示しているのだと思う。

ただしその「やる気」が、なぜか「毛虫40種類」みたいなまがまがしいものでしか引き出されないという問題がある。なんでなのかね、これもやっぱり初期不良なのだろうか。ダッ。

何かが「終わった」ような気がしたということ、そしてそれが「終わった」という音が聞こえた気がしたということ。それはわかるぞ。そういうことってあるよね。つまりそれは、「ちゃん、ちゃん」という音が聞こえたってことだよな。ひとつの幕が区切られて、「ちゃん、ちゃん」と。それが〝始末がついた〟ということだ。いつか始まったひとつの幕が一件落着し、幕引きとなったってわけ。

ユウサクはすでに実生活の中に、そうして「一幕の始末」を聞き取っているということ。それだけ霊魂が発達してきているんだな。それなのに、スパゲティを食べる練習をしながら皿を持ちあげているというのはどういうシステムなんだ。霊魂の、性能はいいけどOSがおかしい。お前のOSって、「グランジ社とグラインドコア社が共同制作しました！」みたいなやつだからな。通知が来るたび「ダッ」と鳴る上に、それをオフにはできない仕様とかなのよ。

それはいいとして、「一幕の始末」が聞こえたということは、じっくり点検すれば、そこに「始まり」から「結末」までのストーリーが見つかるはずなのだ。ストーリーといってもそんなに大きな起伏があるわけじゃないが、とにかくそれは「続いて」いたわけで、だからこそ末尾に来て「ちゃん、ちゃん」となった。その一幕じたいが作品性・物語性を帯びているってことだな。今回のワークは、それがいちばん大切だということを大モチーフにしている。さかのぼれば、（起）イヤホンでメタルを聴いていた、うつむいて歩きながら……それが食事のスタイルに出た、（承）それを是正しなさいと命じられた、毛虫４０種類を背後にちらつかされて、それでも素直に熱心にそれを是正する努力した、（転）しかしそのやる気は皿を持ちあげるという大きな誤りを含んでいた、それさえ是正していくと思いがけずすぐに実践を問われる機会があり、（結）自分は幸せな光景の一画に同席することができた、それで「ちゃん、ちゃん」だな。

だからユウサクのこの実体験を基にすれば、ユウサクの物語は「ダッ！（死亡）」ではないというわけよ。タイトルをつけるなら「東銀座アップライトスピーカースタイル」となるか。まあそのスピーカーも、たまに「シャカシャカ」と不具合を見せるけどさ。それも修理したら直るんじゃない。やさぐれイヤホンユウサクの耳に…You suffer but why? と聞こえてきて「ダッ」とユウサクが死ぬという、ユウサクが思い込んでいるストーリーとは違うものを実体験で得てしまっているわけで、このことをこれらかの作品に取り込んでいきなさい。まあしばらくはOSにエラーが出て、警告音が鳴るんだろうけれどね。

ダッ。

【ページの空白を埋めるためだけの鬼ほどどうでもいい話のコーナー】

もし出張してどこかのグループに教えろと言われたら出張しますよ！　真剣に興味を持ってもらえるのならお金なんか要りません。貴重なものは広められるべきです。われわれは普遍的に、このことに二律背反を持っているように思います。ひとつには、門戸を広くしてあたらしく拡大していく風の中に立ちたい。もうひとつには、ここまで大切なものを傾けて注ぎ込んできてくれた人の場所と尊厳をぜったいに守りたい。どちらも貴重で大切なことですが、両立はしませんね。両立しないのであれば、究極は二本立てにするしかないというのが道理です。本気で二本立てにしたらわたしが忙しくて死ぬという気もしますが。そこは、そこまで本気にならないというのが、裏切っていてわたしらしくて良いでしょう。わたしなんかどこまでもふざけた奴ですよ、ああ楽しくなってきた。ルールは知りませんがあこがれのトランプゲームはナポレオンです。

サボテン

ニンジャ青年

一　背徳

みなさん、こんにちは。

いちばん大切なのは「作品」です。

それはともかくとして、わたしは、最近夜中に食べるパスタに凝っています。残業後に帰宅してからパスタを茹でるためにお湯を沸かしはじめるので、パスタが茹であがるのは、だいたい夜十時頃になります。あるときは、オリーブオイルにニンニクと唐辛子で風味をつけた九折式ペペロンチーノであったり、あるときは、ニンニクと唐辛子をベースにしてトマト缶をいれたアラビアータであったりします。いずれにせよ、二百グラム程度は一度に茹でるので二人前程度は作ります。わたしはその量をひとりで食べるので、大盛りということになります。晩酌をする方もいると思いますが、わたしはお酒をたしなみとしないので、その代わりに残業をこなし、「ほっ」と自宅で安心してとる食事は格別です。とりわけ夜十時以降に食べる高カロリーのペペロンチーノは、「就寝の二時間前までに食事はとりましょう」といった健康スローガンを超克し、背徳的なうまみが加わってとてもおいしいです。もっともわたしはアラフォーになる中年おじさん（ニンジャ青年であるので、「青年」と言い張っているのですが。）なので会社の健康診断のたびに健康診断結果表に羅列されている数値が基準値の範囲内かどうか目をこらしているのです。

そんなわたしですが、大切なものを見失っていないので、不安や後ろ暗さにむしばまれたりすることはありません。いちばん大切なものは「作品」です。このことをわれわれが見失ったりおろそかにしていると、夜中に大盛ペペロンチーノを食べることについて不安になったり、後ろ暗さにむしばまれていくのです。例えば、中性脂肪がついて太ってしまって自分の容姿が優れなくなって人から好かれなくなってしまったらどうしよう。とか、夜中に大盛りペペロンチーノを食べて朝起きたときに胃もたれしたらどうしようとか。こういった不安や後ろ暗さにむしばまれていくのです。どうか懸命な読者諸氏がこのような不安の中に落ちていかないよう、わたしは祈るばかりです。

わたしは、いちばん大切なものは「作品」であるということを見失っていないので、これからも残業後の大盛ペペロンチーノを美味しくいただくことにします。朝に胃もたれすることは自明のことですが、わたしは「作品」、「物語」に向かって夜中に食事をしているのであって、不安に陥ることはないのです。

二　邪鬼

こんな話をしているとまた食欲が湧いてきてしまいます。われわれのワークショップの主催者である九折先生はその飽くことなき探求心で考案された料理を惜しみなくわれわれに与えてくださり、われわれの食文化を豊かにしてくださいます。そんな九折先生にわたしは「びびって」います。このことは最近先生がワークショップの各員に対してはお話しくださっているので、ワークショップ内では共通認識となりつつありますが、読者諸氏にとっては「そうなんや！ニンジャ青年は先生にびびってはるんや！」と驚きをもって受け取られたかと思います。はじめてお会いしてから数年が経とうとしていますが、私の「びびり」ぶりは月日が流れるにつれて増すばかりです。付き合いが長くなればびびらなくなるだろとわたしも思うのですが、いつも「先生が本気出したらどうしよう」と怯えています。

読者諸氏に誤解なきように申し上げますが、実際はとても「優しい」方です。私の「びびり」ぶりを例えるなら男子中学一年生が中学三年生に向ける態度のようなものです。われわれのワークショップには「命令法」という、マスターがプレイヤーに対して「一歩前に出る」という命令を出すワークがあります。このワークはマスターがプレイヤーを制圧し、プレイヤーに対して命令を通すというものですが、マスターの訓練でありつつも、プレイヤーが正確に命令を受け取れるかどうかという側面ももっています。先生がマスターのとき、わたしは先生からの命令を受け取り損なったら「あかん」と神経を集中させます。上司からの仕事の指示などは「なんとなくこんなかんじでやったらええんかな」と空気を読みながら受け取りますが、先生からの命令は先生の顔色をうかがったり、空気を読んだりして受け取った

ら先生から「そんな命令出してない」と見抜かれます。

わたしは空気を読んだり、周りの人の顔色をうかがうことを処世術としてきたのでそれをワークに持ち込んで「自分なり」に動いたら「先生から一喝されるで」と戦々恐々としています。また、命令法の応用としてプレイヤー複数人を横一列に並ばせてマスターが拍子をとりながらプレイヤーに対して「一歩前に出る」という命令を出すものがあります。先生がマスターのとき、プレイヤーが「一歩前に出る」という動作が「びしっ」と揃います。このときもわたしは「ぼさっとして」命令を取り損なったら先生の「一喝」が飛んでくることに戦々恐々としています。

『作品のコーナー』と先生がコールするとき、ワークショップ各員は「わーい」と喜ぶのですがわたしはこっそり「わーい（まじか、下手うったらめちゃめちゃ怒られるで）」とびびっています。先生が作る作品にプレイヤーとして使ってもらうときにも命令法と同様に先生の作品世界の命令から外れたことをして「自分なり」に楽しく、気持ちよくなったりしたら先生から「一喝」されますから。先生は特にフィクション空間に関して、われわれの自我、つまり「わたし気持ちいい、わたしが一番、わたしが主役」を持ち込むことについては容赦がありません。

われわれはどうしてもフィクション空間に自我を持ち込んでしまいがちなので、先生は大目に見てくださっておりますが、フィクション空間の中でわれわれはジャガイモのごとく振る舞うことができなければ多聞天に踏まれている邪鬼がごとく先生に撃退されることになります。とても大きいものが押し寄せてきたら誰しも逃げたくなるように、女の子といいことしたいなぁと邪な考えを持つわたしはその邪さについて一喝されないように「びびり」ながら遁走するのです。

ふと思い返すと「びびった」ときは邪な自分を守るためにだいたい遁走してきました。それでもわたしの遁走はわたし自身に不安をもたらすものではありません。わたしの遁走は「作品」に向かっているのです。むしろ「作品」、「物語」に向かうために「びびっている」といっても過言ではありません。一般的には何かのアニメのセリフであったように「逃げちゃだめだ」と言われています。ですが、どうでしょう。わたしには、この「逃げちゃだめだ」というセリフからは不安や後ろ暗さを感じます。このセリフをはなったアニメの場面を想起するとき、その当人からは悲愴さを感じます。一見勇敢に思えるセリフもいちばん大切なものである「作品」を見失っている当人から発せられているのであれば、不安や後ろ暗さに蝕まれることを免れることはできません。なぜならその不安や後ろ暗さは「逃げるか逃げないか」ということから生じているのではなくいちばん大切なものである「作品」を見失っているか、あるいはないがしろにしていることから生じるからです。わたしはいま、このように書き話ながらもワークショップで九折先生が本気になったらどうしようとびびっています。まさにいちばん大切な「作品」に向かうためにびびって遁走しているのです。

三　ものぐさ

そういえば、もう数年になりますが、部屋に緑がほしいと考えています。カーテンの色はブラウンですし、部屋の壁は白を基調として寂しい感じなので緑色の観葉植物でもおいて一人暮らしの寂しさを紛らわそうかなと思っています。ただ、水やりとか陽当たりとかを考えると、手間ひまかかるなぁと考えて結局観葉植物には手をだせていません。なにか緑色のものがほしいなと思ってドラッグストアの緑色の袋を置いてみたりしているのですが、「ちょっと違うんだよなぁ」などと考えているうちに結局数年経ってしまっています。何かしようかなと思ってもなかなか動きださないのがわたしの常なのです。

行きたいなと考えている旅先も五年くらい「今年は行こう」と考えています。行くつもりではあるんです、関東から北陸（能登方面）に向かい福井から岐阜を通って京都へ抜け、静岡をとおり関東に帰ってくるというルートです。能登で日本海の魚を食べ、福井の永平寺で道元禅師すげぇと唸ってから岐阜に向かい、織田信長は岐阜から天下をめざしたんだなぁと、びびりながら京都に向かい、京都は王朝だなぁ！と新撰組のように碁盤の目のような京都の街並みをぐるぐる回り、京都から東に向かう静岡で徳川家康に思いをはせながら浜松でウナギを食いたいなぁというプランを考えて気がついたらもう数年経っているんです。

月日が流れるのはとても早いですが、わたしが動かない理由は「作品」に向かっているからです。ど

んな風光明媚な景色も豊かな歴史をもつ土地・地域も「作品」をないがしろにしている状態で訪れたらどこか不安になってしまいます。わたしは大切なものである「作品」を抱えたままこれらの旅先を訪れたい、そのときの楽しみをとっているのです。そのことにいまお話しをしながら気づいたようです。大切なものがない状態で行きたいと思っている旅先を訪れたときにがっかりすることが見えてしまっているのです。だからわたしはいちばん大切な作品に向かうためにこれまで動かなかったのです。

四　サボテン

何かをする前から結果を想像すると何もできないってことはありませんか。観葉植物を買っても結局枯らしてしまうし、旅行に行ってもがっかりしてしまうことを想像したら誰だって何もしないというか何もできないです。「どうせ」ダメでしょ、とか「どうせ」うまくいかないとか。わたしは二年前の夏に買った風鈴で涼をとろうと思ったのに風で鳴るはずの風鈴が風で鳴らないので、自分で鳴らしたことがあります。もはや風鈴ではなくて鈴です。他にも腹筋ローラー買ったけど腹筋ローラーで腰を反りすぎて腰を痛めることにびびって腹筋ローラー使わなくなったし、アラサーのときに年取っても若いお姉ちゃんとコミュニケーションとれるようにという下心で買った一眼レフも使わなくなったし（今はなんとワークショップで活用してもらっています。）、クロスバイクも買った当時は自分の肉体が動力となるから健康によいとか言っていたのに、なんやかんや理由をつけて乗らなくなってしまっています。

こう話してみるとわたしがいかに飽き性というか気分屋というか、失敗を恐れているということが見えてくるように思います。それでもいまのわたしにとっていちばん大切なものは「作品」であり「物語」です。このことを見失っていないので、そのときどきで自己同一性が保たれていないかのようにみえるわたしも不安や後ろ暗さに蝕まれていないのです。そうそう、観葉植物でいうとサボテンは水をやらなくても枯れないそうです。ものぐさなわたしにそんなはサボテンがぴったりです。今年は部屋に緑をとりいれるためにサボテンを買おうと思います。

いちばん大切なものは作品です。このことを見失っていないわたしはサボテンのように過酷な環境であっても不安や後ろ暗さに蝕まれることはありません。

文責：ニンジャ青年

九折評

喝アーッ！

しかしお前は相変わらず本質の読み取りはできているようでグッドだ、読み取りグッド。たしかに言われてみたら、おれはフィクション空間での吾我ムーブに対してはやたらに厳しいな。不出来の失敗はかまわんが不埒の失態は許さん。これはルールやマナーの問題ではなく、個々人が自分の大切なものを穢すことは許さんというわけよ。少なくともおれの目の前でそれをすることは許さん。フィクションなんかいくらでも失敗したらいいじゃんね、ただしちゃんと躊躇なく取り組んで全力で失敗すべきだ。失敗ってのは分類としては「成長」なんだよ。「こんなに火力を強くしたら焦げちゃうのか」と知るというのは成長

なのだから。それを、何か失敗をマイナスだと思い込んで、ごまかそうとする発想に対してはたしかに九折さんはキビシい。成長をわざわざキャンセルするべきではない。失敗といって、交通事故とか医療ミスとかは、人が困るからダメだけどね、フィクションでの失敗なんて誰も困らないもの。作品を失敗して損傷するのは虚構の自尊心だけだ、しかもそれは虚構なんだからさっさともぎ取られてしまえばいいんだよ。「作品」なんてそんなすぐ出来ねえって。出来そうな気がしていた自分というのがただの膨張でしかないんだから、そのガスが抜けることを「ヘコむ」とは捉えなくていいってわけ。

九折さんはたしかに命令法のときとか徹底しているけれど、あれはそのぶん、人が「疲れる」とか「しんどい」とかにはならなくて済むわけね。徹底していて緊張感あるけれど、そのかわり、何をしたらいいかはハッキリ視える。で、ハッキリ視えたそのまんま「だけ」をやればいいのだから疲れない。「しんどい」にならない。ぜったいにそのほうが女の子にモテるよ。

それに、何をするのか・何をしているのかがぼんやりしてしまうと、それこそ旅行に出ても途中で自分が行方不明になっちゃうしね。自分で主題を見失っちゃうのよ。そうしたら自分で「しんどい」になっちゃって、ため息ついて、「どうせ」みたいなことにつながっていってしまうからね。北陸から東海に南下するというのも、なにか「課題」みたいになっちゃったらしんどいからね。

邪鬼はさっきの一喝で死んだとして……ものぐさというのは、おれだってものぐさだけどね。でも、主題を見失ってしんどくなるというタイプのものぐさはよくない。むしろ「アイロンかけなきゃ」という課題を投げ出して、何かの主題に飛び出していっちゃうぐらいのほうがいい。そういうものぐさのほうがいい。主題を見失ったものぐさは、背徳の深夜メシに行き着かざる得ないからな。背徳はウマイけどさ。どうせなら主題を視認したまま食ったほうがいいよな。

背徳、邪鬼、ものぐさ……あと何だっけ。

あ、〇ボテンか。

おまえはまさに〇ボテンのようだ。

読者のみなさん、次のふたつのうち正解を選んでください。

A：サボテン

B：ヤボテン

そう、彼はまさにそういう男です。

【ページの空白を埋めるためだけの鬼ほどどうでもいい話のコーナー】

最小の劇場、４つのセンテンスだけで二字熟語を〝表示〟してみます。ここでは主題を「葛藤」にしましょう。

Ａ「直接会ってきたよ、あはは、あいつ柄にもなく、すっごく悩んでいたんだって。若いよなあ」

Ｂ「そうなんすね、ははは。……でもあいつ、今日も来ていませんよ」

Ｃ「葛藤」

Ｄ「乗り越えられるとは、かぎらない」

Ａが言い、Ｂが応え、Ｃが主題を発し、Ｄが総括あるいはふくらませる。それだけで二字熟語を洗い直して表示する。

あなたもどうですか、「希望」「疲労」「配慮」「傲慢」などでやってみましょう。これを「めちゃ難しい」と感じる人には才能があります。ところで買うアテはありませんがあこがれのトップスは革ジャンです。

「死にたくないから」ではなく、「生きていく」ことに

zyy

みなさんこんにちは。
いちばん大切なのは「作品」です。
それはともかくとして、私の友人の話をします。
仮にAと呼ばせていただきます。

Aは30代後半で精神の病気に罹り、20年近く続けた仕事を辞め、休養を取ることになりました。Aが休職ではなく辞職を選んだ理由は、以前より仕事での人間関係や将来性に悩んでいた事もあり、病気によってそれが決定打となったとのことです。Aは一人暮らしでした、しかし実家に帰ることはせず、貯金を切り崩しながら療養生活に入りました。

療養して約1年、Aは生活リズムを改善し、適度な運動を心がけ、不調ながらも日中に活動していた事もあってか、少しずつ快方に向かっていきました。

しかし、Aは不安を自身で煽ってしまう性格でした。Aは焦っていました、「不調は続いていて快復にはまだ時間がかかりそうだ、休養は必要だが、貯金は減るばかり、お金が無くなってはいずれ生活できなくなる。自分はもう再就職には遅い年齢だ、しかし何とかして働かなくてはならない。」

Aの発想は、私には危うい考えのように思えました。

「お金が無いといずれ死んでしまう、だから働かなければならない」彼の行動の根拠は「死にたくないから」「不安だから」「しょうがないから」という考えからくるものです。

そういった考えが働く動機となることは一般的にはあると思います。しかしAがこの先、再び就労することが出来たとして、彼は「死にたくないから」働き、それ以外に方法がないし、どうしようもない。これはどうもうしろ暗い動機であるように思いますし、Aは「働きたくないけど、どうしようもないから働く」という、どこかで「我慢」をして生きていくことになると思いました。Aを動かしているものは自身の意志ではなく、いわば「死への恐怖」という衝動からくるものだと感じたからです。

「働く」ということはA自身の意志であるべきだと私は感じ、私はAに伝えました。

行動する動機を「死にたくないから」ではなく「生きていく」ことにしたらどうか、すなわち「私は生きていく」とそれを根拠とするのはどうだろうか、と。あくまで自分の「生きていく」という決断を根拠とし、行動をしていく、ということ。

それは働くということのみならず、すべてのこと、些細なことでよく、朝起きることでもいいし、トイレにいくことでもいい、あくまで「自分のことは自分で決めますよ」という意志決定が為されることが大事なのだと感じたからです。そうして、自分で決めた「生きていく」という元に為された決定が、些細な事であっても、実行に移されるのであれば、それにより自信を獲得していけると思いました。

加えて、もし「これはシンドイな」と思える状況に遭ったとしても、それは自己決定した「生きていく」ことの中で必要なことならば耐える、「忍耐」をするという考え方がよいのではないか、と伝えました。

一見似た言葉のように思えますが、「我慢」と「忍耐」は違います。「我慢」は受け身で諦観に近く、為す術なくいわばダメージのようなものを受け続ける状態、「忍耐」とは自ら耐えていく、ダメージだと思えることでも、ただ受ける、ではなく自ら選択し、決定してそれを耐えることです。同じダメージだとしても、「忍耐」で乗り越えていくことで心身が鍛えてられていくイメージです。

自己決定したか、どうかの差ですが「私は生きていく」という決定と、「必要ならば忍耐で受けて立つ」という意志、この先同じ「働く」ことが待っているとしても、こちらの考え方が、Aが明るい方へ歩んでいける、と思いました。

Aは元来素直な性格であり、これらのアドバイスを「なるほど」と頷き、まず「私は生きていく」と自己決定をし、体の不調が多少あっても、「必要だから忍耐で受けて立つ」と新しい道へ踏み出しました。

そのかいもあってか、最近再就職が決まったようです。私のアドバイスが役に立ったようで何よりですが、これはAに言っているようで私自身にも言い聞かせている言葉でもあります。大切なのは自己決定をすること、「自分のことは自分で決めますよ、当然」という意志です。

このように考えていく限り、例え不調の最中であろうとも、いちばん大切なものを見失ってはいません。

そのいちばん大切なものを見失い、おろそかにすると、不安やうしろ暗さにむしばまれていきます。それをおろそかにしないかぎり、われわれに不安やうしろ暗さはありません。

私は新たな道へ進みだした、Aの幸運を祈っています。

それではまたお会いしましょう。

文責：zyy

九折評

ホープアンドグローリー！　おれも本文に倣ってその友人Aについて言及しよう。

「死にたくないから」という〝暗い動機〟と、「生きていく」という主体の作用はたしかにまったく別のはたらきだ。もしこのことについて、おれの何かがAに伝染したのだとすると、そのことには由来を言い足しておく必要がある。「生きてやる」という言い方がおれの中にあり、その言い方は、故・ムツゴロウこと畑正憲氏のことばに由来している。ムツゴロウさんは、凍死に瀕したときにやるべきことがあると言った。まず「凍死に瀕する」という状況がかなり激しいが、あの人は満州の生まれで北海道の無人島とかで暮らしているからな。

ムツゴロウさん曰く、「よし、生きてやる」、そう思うことが大事なんだそうだ。それによって、脊髄のどこかにあるのか、体温の調節機構がはたらきだすらしい。そしてじわぁ～っと体温が上がってくる。そうすると、数十分間は動けるようになる。そうして生き延びることができる。

「人間はね、そういう場合には、〝できたらね〟、抵抗しなきゃいけないんです。もう、死ぬ直前まで、死んじゃダメだ！　ということを肝に銘じて、『よし生きてやる、よし生きてやる！　生きるぞおれは！』生きるぞ、エイッ！　ウッ！　エイッ！　ウン！　エイッ！　……そうするとね、体温が上がるんですね」

こと生命力にかかわってはムツゴロウさんがおれの師だ。あんなのに生命力で勝てる奴いねえよ。おれはここに、主体性による自己決定が生命の根幹さえ動かすということを視るわけだ。「自分のことは自分で決めますよ、当然」「必要な忍耐は受けて立ちますよ」、病気の具合が悪いときには休むというのも自己決定だし、トイレに行くのでさえ自己決定の大爆発だ。自分の調子が悲惨なときには、ここでうずくまることにしかリアリティが湧かないものだが、それでは凍死してしまうので、〝できたら〟抵抗しないといけないのだろう。おれたちはふつう、それで「体温が上がるんですね」なんて知識を持っていないからな。体温が上がるなら人はうずくまるのをやめるのかもしれない。

すでにAはうずくまるのをやめて、魂は凍死せず立ち上がったようで何よりだった。いちばん大切なのは作品であり、話であり物語だ。「生きていく」という話がムツゴロウさんから継承されたものだったので、ここに伝えておく。友人Aによろしく！

作品なきはブラック企業と悲愴な人生、作品あればそれらは光

ゆき

いちばん大切なのは作品です。

家を出て坂を下ったところの民家に生えている、梅の木が満開から散り始めくらいです。気象庁によると今年は暖かく、桜の開花は例年より早めだそうですが、仙台の桜は多くがまだ蕾。寒の戻りで3月に雪まで積もったけれど、ここ数日のぽかぽか陽気にのって早く咲かないかなあ。毎年、満開になった仙台西公園で、屋台の牛タン串を買って、塩竈の地酒「浦霞」をやるのがいいんです。「浦霞」から始まって、石巻の「日高見」、気仙沼の「蒼天伝」と三陸海岸を北上していくのもまたいいですね。あ、ビンチョウマグロ食べたくなってきた。気仙沼のビンチョウマグロは、九折さんが与えてくれた話、作品の端緒なのです。作品へのつながりのある中で食べるビンチョウマグロのヅケ丼は格別です。

逆に、作品へのつながりのない中で、どんなに高級な大間のマグロの大トロを食べ、テンションのアガった食レポをSNSに投稿したとて、そこによろこびはありません。いちばん大切なのは作品なので、第一に作品があり、そこへつながって旨い食べ物がある。アミノ酸成分としての旨味の多い食べ物単体を、自分というアミノ酸の塊単体が摂取することには、何のつながりもない。あえて自身で気づかないようにしていても背後にはどこか虚しさが流れており、何も生み出されないでしょう。

気仙沼産ビンチョウマグロのヅケに合わせた「蒼天伝」は、脳のてっぺんから蒼い天へ向かって、スポーンと抜ける至福があります。

いちばん大切なのは作品です。

ものすごい春の風が吹いて、その力に押し出されるように、ベイビーをおんぶして自転車で出発します。どこへ出発するのかは決めていないけれど、とりあえず出発してから考えよう。こんな春の風だから、どこへ行ってもいいし、どこへでも行けます。そうだなあ、ベイビーの好きな無限階段上り下りが存分にできる、花壇いっぱいの公園へ行こう。スイセンやムスカリが色鮮やかな季節です。

4歳になったベイビーは、手をつなぐとパタパタと階段へ走ってゆき、4歳にしてはたどたどしい足どりで一段一段上ってゆきます。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、できたねー！」

一番上までいくと、今度は一段一段下りはじめます。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、できたねー！」

一番下までいったら、今度はまた上り。

「よいしょ、よいしょ……、できたねー！」

無限の春風の中で、無限に階段上り下りを楽しむベイビー。ベイビーは4歳ですが、知能は2歳程度しかありません。何がそんなに楽しいのか、わたしには分からないけれど、ベイビーの世界には今、無限階段の風が吹いているのでしょう。

同年齢と思われる女の子が、定型発達の4歳児らしくブランコやすべり台をスイスイと楽しんで、両親に拍手で褒められています。ベイビーの視ている世界はおそらくあの女の子とは異なるのでしょうけれども、ベイビーにはベイビーの作品世界が存在しているかもしれず。わたしにはまだそれへの視力が不足していますが、視えなくてもせめて、ベイビーの作品世界を潰さないような関わりをしたいと、とにかくただベイビーがキャッキャと笑うことに注力する日々です。変顔に変なオノマトペ、身体をツンツンとつついたり、ギュウーッとしたり。中でも、ムツゴロウさんが犬をわしゃわしゃと撫でるように頭を撫でてやると、どこか気が落ち着いた様子になります。これはベイビーだけでなく、他の乳幼児にも同じような効果があるようで、保育園などで他児にわしゃわしゃやってあげると、澄んだ眼をこちらに向けて寄ってきます。動物に通じるムツゴロウさんのわしゃわしゃは、定型発達児であるか否かといった人格の檻を突き抜けて、よりプリミティブないきもののこころに通じるのかもしれません。

いちばん大切なのは作品です。

ところでわたしは最近転職が決まり、この春から新しい会社で働きはじめます。

わたしは前の会社とそこで働く人々が大好きでした。会社への不満やトラブルなどが原因ではなく、この長年慣れ親しんだ居心地の良い場所を離れてでもチャレンジしてみたいことができ、転職を決めました。前の会社を離れるにあたり、社員の方々やプロジェクトメンバー、担当のお客様などから、たくさんのこころあるメッセージをいただきました。これらのメッセージがこころあるのは、じつはみなさんがそれぞれの作品に向かっているからなのではないか……単なる私情のお気持ちメッセージではなく、あるひとつの作品を視ていて、それへ向かってフォーカスされた言葉が紡がれているような、感覚がありました。

　システムエンジニアの仕事は、知的好奇心を満たせたり、実際の日常業務のしくみに役立っている実感が得られたりと、やりがいのある楽しい仕事ですが、プロジェクトは順風満帆なことばかりではないため（むしろ、順風満帆なことのほうが少ない）、手ごわい日々も多々ありました。睡眠時間を削る日や、昼食夕食抜きで仕事する日、休み時間返上で緊急対応する日、年末年始休暇中に呼び出された日。（ここだけ聞くとヤバイブラック企業だと思われそうですが、会社の名誉のためにフォローしておくと、きちんと三六協定を遵守し、残業代も支払われる、パワハラもないホワイトめな企業ですのであしからず。）

　そしてつい先日の最終出社日が、まさかの休日出勤での本番切替作業。システムエンジニアにとって「本番切替」という単語は背筋が冷える単語です。どんなに事前に手順書を作成し、相互レビューし、リハーサルをやったとしても、「うんまあ、どうせ本番は何か起きるでしょ」という暗黙が流れているくらいにトラブルが付きものです。最終出社日も当然のようにトラブルは発生し、それらを調査・解決するのに深夜2時までかかりました。いやあ、本当に背筋が冷えますね。

　ほとんどのプロジェクトは一人ではできないため、その日も同じ時間まで一緒にやってくれたメンバーがいました。こういう緊急トラブル発生時、わたしのこれまでの経験の中では、愚痴を言ったり音を上げたり、そそくさと逃げ出したりするメンバーがいません。みんなそこそこ胃が痛くなりそうなストレスを感じているであろうし、納期を落とせない責任もあるし、メンテナンス終了時間まで刻一刻と迫る時間との戦いの中で、しかも原因不明で解決の目処も立っていないというような状況でも、メンバー全員が「問題解決して生きて帰る！！」というひとつの目標にフォーカスして動いています。（わたしが新人の頃に上司に言われた、「現地作業は、いかに生きて帰るかだからね。」という言葉が今でも焼き付いています。）

　ありきたりな言葉で言うと、「チーム一丸となっている」という状態ですが、この一丸となるという現象が、メンバー全員がひとつの作品を共有している現象なのではないかと思うのです。ひとつの作品の中の、自分はここのパートね、という認知がそれぞれのメンバーに発生しており、あまりいちいち細かく指示しなくともそれぞれが自律した細胞のように動きます。そして自律といってもみんなバラバラに勝手な動きをしているわけではなく、細胞同士が適宜連携をとりながら、チーム全体で一個体のようにまとまるわけです。

　そんなこんなで、チーム全体で一つの作品を構成するという体験を、共にしてきたみなさんから発せられるメッセージは、個人のお気持ちでなく作品へつながっているように感じられるのかもしれません。

　いちばん大切なのは作品です。

　さてここまで、わたしの話の一部を書き話して参りました。内容だけ見ると、ブラック企業で退職ギリギリまで働く社畜、知恵遅れの子育てに苦労する悲愴な人生、と見えるかもしれませんね。しかし、作品へのつながりがあれば、それらは光となります。いちばん大切な作品とのつながりを見失ったとき、それらはブラックに転じるでしょう。

　この月刊ワーQをお読みのみなさんにも、人生は色々あるかもしれません。が、いちばん大切なのは作品です。みなさんの周囲にも、作品とのつながり、作品の端緒があるかもしれない。その作品のお話を、いつかどこかの機会に、ふらっと九折'sワークショップにでも来て、聴かせてもらえたら幸いです。

文責：ゆき

九折評

スーパーブリリアント！　すべてがタフで輝かしすぎるだろ。ベイビーにとっては無限階段でも、こっちは無限体力じゃないんだから、おれなら二往復ぐらいでダウンするだろう。こんな根性なしはメルルーサをつまみに紙パックの日本酒を飲んでいるべきだと思う。しかも、元の会社でもバリバリだったのにいつのまにかさらなるステップアップの転職を為し遂げるとか。馬力が違いすぎるぜ。ステップアップといって、たとえばユウサクなら「ああ～　ステップだぁ～（謎）」と言いながらポテトチップスを食うだけで六年ぐらい過ごすぞ。

「現地作業は、いかに生きて帰るかだからね」

まるで戦争映画で兵士たちがハンヴィーに飛び込んで帰っていく姿を想起させるのだが、ううむ、それにしてもいちばん大切なのは作品だ。プロジェクト・チームに発生するマスターマインド。ひとつになったチームと、共有されるひとつのマインド。たしかにそれじたいが作品になるに違いない。さすがに残業代も出ない超ド級ブラック企業などは低級という一点で願い下げだが、かといって何らの作品性も帯びない白いだけの企業というのもむなしいものだ。数値化した環境だけを見て白黒を決めていたら、人が生きるのって根本的にぜんぶブラックになっちゃうしな。おれのワークショップだって夕方から始まって翌朝までやっているのだから超ブラックワークショップだ。「オイ作品やれ」とかいって、作品ハラスメントも横行している。そのあたり、白いだけでは安全だけどつまらんというのがある。自分の壁を超えるというのは、つまり自分に負荷が掛かるということで、まあ突破する瞬間は何だってブラックだよなあ。問題はそこの白黒ではなくて、壁の向こうに何かを見つけられるかどうかだ。壁の向こうに約束の地があるなら、つるはしでも壁をやぶるし、下水道だってくぐりぬけて向こうに行くぞってもんよ。

これからのゆきにとって面白いことを。チームが一丸となる。そこにはマスターマインドと呼ぶべきものが起こっている。それじたいが作品性を帯び出すということを、ゆきはすでによく知っている。このことは、業務を課されたチームが、それを単なる納期のものではない、自分たちのしかるべき「仕事」にしようとする主体性のはたらきから起こってきているものだが、ここでひとつあたらしい視点を。

もし、そもそも課される業務じたいが存在しなかったら、ゆきはどういうチームを形成し、どういうプロジエクトに向かうだろう？

業務なしのゆきチーム、あるいは主人公ゆきは、どのような主体性を見せるだろう。そこに起こり得るマスターマインドとは？　この視点がきっと、これからのゆきを面白くするはず。そして現時点ではこのテーマはきっとゆきの思考にとって困惑の対象のはず。その困惑にわざと突き落とすということだから、やっぱり面白いことというのはどこかでブラックを含むのだった。いちばん大切なのはホワイトではなく作品だからしようがない。あとよくよく考えたら、おれは誰にも業務を課されていないのだった。じゃあコイツの主体性とマスターマインドはどうなっているのだろう。おれだって無限に作品を読み書きしているようなものか。

あたらしい職場でゆきが大活躍しますように。あと、なんやかんやゆうても状況がすげえタフなので、体調を崩さないようにね。このあいだみんなで一緒に牛タンを食べたので、こんどはいつかみんなで一緒にビンチョウマグロのヅケ丼を食おう。

檻の中にも作品

みう

いちばん大切なのは作品です。

それはともかくとして、私がワークショップに初めて来てから一年が経とうとしています。

一年前、私は生まれ育った北海道を出て、上京してきました。

私の実家は結構厳しめで、特にお父さんはなんとしてでも私に家にいてほしかったらしく、私が外の世界とのつながりをもつことをとにかく阻もうとしてきました。高校卒業までは一人での外出は禁止されていましたし、散歩に行くことすらほとんど許されていませんでした（一度どうしても散歩に行きたいと言ったら、窓から見えるように家の周りをぐるぐる周っていなさいと言われました、そんなの散歩ではありません…）。勝手に買い物するのもダメだし、自分の部屋に食べ物を持ち込んだりするのもダメです。機嫌が悪いときは自分の部屋に行こうとするだけで怒られました。できるだけリビングにいなさいと言われ、とにかく私のことを監視していたかったらしいです。

ただ、うちのお父さんはものすごーく鈍感なんです。だから、夜中お父さんがリビングでテレビを見ているところにこっそり忍び込んで、棚からお菓子を盗っていったりしても全然気づきません。うちの玄関のドアは結構音がうるさくしかも寝室の真横にあるのですが、お父さんが寝ている隙に何度かこっそり家を抜け出して、コンビニやドラッグストアに行ったこともあります。しかもお父さんは根っからの機械音痴で、一応スマホは持っていますが、未だに電話とメールとラインしかできません。私がスマホをいじっていてもなんだか不思議そうに眺めてくるだけです。お父さんとしては何かしら禁止したかったみたいですが、何を禁止したらいいか分からなかったようで、スマホについてはあまり何も言われていませんでした。ですから幸いなことに九折さんのブログやコラムは読み放題でした！

今こう書いていると、縛られつつも割とのびのびやっていたなと思うんですが、当時はこんな生活耐えられない！はやく実家出て九折さんのところに行くもん！としか思っていませんでした。大学までは北海道にいてくれと言われていたので、学費を払ってもらっている手前地元の大学に進学しましたが、入学式では内心、早く四年経て〜と思っていました。

そんなこんなで大学時代は適当に過ごし、昨年の四月、就職とともに晴れて上京してきました（正確には七月入社だったのですが、早く実家を出たくて四月には上京してきてしまいました）。

そしたらなんと！コロナ禍で長らく一般にはオープンにされていなかった九折さんのワークショップが、四月末に一般向けにも再開されるらしいじゃないですか！私はもうドキドキワクワクでワークショップに行くことを決めました。

そのときは、もう親の呪縛からは離れて自由になったんだ！という気持ちでした。

初めてワークショップに行ったときはめちゃめちゃ緊張しました。それはもう人生で一番緊張したと思います。緊張しすぎてその日はご飯がまったく食べられませんでした。暖かい季節は、ワークショップでは１９時から２３時頃まで公園でワークをやり、それからスタジオに移動して、みんなでご飯を食べてからまたワークを再開します。そのスタジオでのご飯がその日の一食目となりました。

事前にしたメールのやり取りで、私が「すごく緊張しています」と言ったら九折さんからは「きっといらっしゃって五分で消えてなくなると思います笑」と返信が来ました。そしてその言葉通り、行ってみたらすぐに緊張は解れてしまいました、解れてしまったので途中ワークをやりながらお腹が空いて大変でした。

だから、これからワークショップに来たいと思っている方、行ってみたいけど怖いなと思っている方々は安心して一度来てみると良いんじゃないかと思います。きっと最初は緊張すると思いますが、始まったらそれどころじゃなくなります。初めのうちは、ほとんどびっくりして笑っている間に十時間くらい経っていたという感覚です。

ワークショップはなんというか、すごく穏やかで安心感のある場所です、なんか守られているという感じがします。あとはすごく楽しいし面白いです。私は普段あまり声を上げて笑うタイプではないのですが、ワークショップに行くと毎回すごく笑わされてしまいます。

そんな感じで約一年間、楽しくワークショップに通っているわけですが、最初の頃からずっと感じているのは、ものすごく自由ということです。私にとってワークショップは、自由になれる場所という感じです。自由といって、各々が好き勝手に過ごす、無法地帯というわけではありません。むしろワークには大体○○法と名前がついていて、そこはきっちりやるのですが……

例えば、私が好きなワークで金魚法というのがあります。このワークでは、二人一組で向かい合って、互いに近づいていくのですが、このとき片方は相手の顔を捕まえようと手を伸ばします。そうして捕まえられそうになるのを、もう片方の人がパッと外れて横を抜けていってしまうというものです。最初、一方が手を伸ばしながら近づいていくところまでは互いの気魄が当たっている「内」の状態です。ただ、捕まえられる側の人が気魄から霊魂に切り替わるとたちまち「抜け」てしまい、そうなると目の前にいるはずの人をどうしても捕まえることができなくなってしまいます。不思議です。「内と抜け」系のワークは他にもいろんなバリエーションがあります。より分かりやすく捕まった！感があるものだと、壁や床に腕を押し付けられて拘束されている状態から抜けるというのもあります。力で対抗しても絶対に脱出できないのに、「抜け」てしまうといとも簡単に脱出できてしまいます。

この「内」から「抜け」に転じる瞬間が、私はたまらなく好きです。絶対に不自由と思われたところ、次の瞬間には何事もなかったように抜け出して自由になってしまうのは、何度見ても面白いです。

内と抜けのワークだけではありません。他の身体操作のワーク、例えば肘とか膝とかの関節系のワークも、呪縛からの解放のためにやっています。関節を解放して自由にしたところで、正しい動かし方を学ぶんです。

自由と言えば、作品だってもちろんものすごく自由なものです。毎回、いろんな場所に行って、いろんな人に出会って、いろんなことをします。時には過去と未来をワープしたりもします。この前なんかは九折さんの作品で、テレポートする蛾をみんなで捕まえたりしていました。すごく自由です。

このようにワークショップはすごく自由な場所です。自由な上に無性に明るくもあります。さらに言うと、先ほども述べたように、穏やかで安心感があって、守られていて、楽しくて面白い場所です。つまり要約すると全体的になんかすごく良いんです。

これはきっと、ワークショップが作品をいちばん大切にしているからだと思います。ワークショップの最終的な目標は「言葉の獲得」です。ですから当然のこととして、作品、話、物語を大切にしているのです。

これがもし、全然違うものを大切にしていたらどうなるでしょうか？例えば、実感や思い込みを大切にしていたら？それはきっとものすごく不自由な上に暗いものになってしまうと思います。

実感や思い込みをあてにしたままでは本当に動けません。いつも九折さんがその呪縛を解放してくださるのでワークに取り組むことができますが、気を抜くとまたいつもの実感や思い込みをあてにし、全然動けない、不自由な私に戻ってしまいます。

また不自由と言えば、現在の私に最大の不自由と感じられることとして、九折さんとお話できないということがあります。他の人とはお話しているし、お友達や会社の人とは普通に会話できるんです、ワークショップのみなさんともいつもよりやや大人しめとはいえ普通に話せます。ただ九折さんと話すとなると、「ううう」となってしまうんです。それで私はいつも、頷いたり首を振ったり笑ったり……頑張って返して一言二言です。無理やり話そうとすると何故か泣きそうになります。

なんというか、私が普段お友達や会社の人に向けている話やその話し方、表情、態度みたいなものを九折さんには向けてはいけないという気がするんです。これは九折さんに初めて会ったときからずっと感じていたことですが、最近になってそれは、私の話が壊れているからではないかと思うようになりました。

これまで私は実感や思い込みをあてにして生きてきましたし、普段会話する中にもキャラやネタ的なものが入り込んでしまいます。それによって、きっと私の話はいろんなところで捻じ曲がって、ぐちゃぐちゃに壊れてしまっているんだと思います。そのぐちゃぐちゃに壊れたものを、ちゃんとした話がある人に向けるのはなんかすごくダメという気がします。これは全部、私がいちばん大切なものを見失っていたから起こったことです。それで、一番お話したい人と今のところまともにお話することもできません。ううう、不自由極まりないです。

　そういえば、ワークショップメンバーのみなさんはご存知だと思いますが、私は作品と言われても同じように「ううう」となってしまいます。作品のコーナーで、九折さんから「今日はみぅ作品あるかな?」と言われると「ううう」となってその場に倒れ込んでしまいます。やっぱり私は、壊れた自分の話を表に出すというのが苦手らしいです。

　解決に向かうには、やっぱり作品を大切にするしかなさそうです。

　以前九折さんがブログで、当人は「『話が壊れている』『話として壊れている』と知覚することはできない、唯一それを知覚して引き返す方法が『作品』なのだ」と仰っていました。だから私も作品をつくって、自分の話の壊れっぷりと不自由さを確認し、話が壊れていたならそれもひっくるめて話にしてしまわなければいけないんだと思います。

　一年前、私は自由になりたいと思ってワークショップに来ました。それまでは自分の不自由さを環境のせい、親のせいにしていたんです。でも全然違いました。そんなの、少なくとも成人しているなら完全に自己責任ですね。自由な人はたとえ牢屋に入れられたって自由です。吉田松陰は牢屋の中で何百冊も本を読んで囚人たちと教え合ったそうですし、ソクラテスも牢屋で死の直前まで弟子や友人たちと語り合っていました。彼らはそういう話の中を生きていたんだと思います。実際、そういう話があったと語り継がれてきているから今私がこれを知ることができているわけですしね。

　話があれば人は自由なんだと思います。話が壊れていなければ、次にどう展開するかは完全に自由です。作品の中ならなんだってできますから。

　自分の置かれた環境を変えるのは難しいし、周囲の事情だってなかなかなくなってはくれません。私も、前よりは良くなりましたけど、未だに実家に帰ると色々うるさく言われます。やっぱり家は牢屋みたいだし、お父さんは看守みたいです。

　ただ、今度はもう見失ったりしません。いちばん大切なのは作品です。

　だから今度帰省したときには、牢屋みたいな家のリビングでちょっとポンコツな看守に監視されながら、作品をつくろうと思います。

文責：みう

九折評

グッド・リトル・イノセント・ラム!　そしてあれれれ、なんでこんなに文章しっかりしているの。なんかイメージとぜんぜん違うのでスゲーびっくりするんだが。さらに、なぜだ、いちばん歴の浅いみうが、どうしてこんなにいちばん明確に「気魄と霊魂」「内と抜け」「呪縛からの解放」「ことばの獲得」を言語化して捉えられているんだ。これは驚きだぞ。みうはおれの前では「ううう」しか言わないので、内部でこんなに把握が進んでいるとは思わなかった。こいつぁダークホースだぜ。

　そして、みうのその現状を、「話が壊れている」なんて深刻に捉えなくてよろしい。もっと話が壊れているおじさんたちを紹介してやろうか。何かにつけ「ダッ」とヘンな音が出るおじさんとか、「サウナに入って、そのあと水風呂に入ったら、全てを忘れて『やりきったぁ～』って充足するんだよね」って言っているおじさんとか。

　ここまで、自由を求めて新天地に行くと自己決定してやってきたというだけで話はメチャ成立しているので安心してよろしい。もちろんそこから「作品」となると、たしかに「話」の機能の問題は出て来るんだけれどね。でも他のおじさんとかもっとわけわからん作品をやっているので、そんなに重く考えなくていい。

最近まわりから、「みうちゃんはじつは頭がいい気がする」という話を漏れ聞いていた。ホンマかいなと思っていたが、たしかに吉田松陰とかソクラテスとかがさらりと文面に出てくるあたり(しかも内容がちゃんと適合している)、コイツはじつは本当に頭がいいのかもしれない。じっさい、アホだったらこんな文面は書けないはずだもんな。九折さんの文章を読んでいるうちに賢くなってしまったのだろうか、あなどりがたし。

いちばん大切なのは作品だ。で、この寄稿がこれだけしっかりしていたら何はともあれすばらしいに尽きる。グレート。もちろん本格的に作品ということになると、この先「書くことが尽きてきた」という問題に出くわして、それからがいよいよ本番になってくるわけだけど、そんなことはいま考えなくていいしな。

みうは育ちが上品だし、世代のこともあって、大きな声を出すのが苦手だ。それを超えていけば次の大きな解放があるだろう。もちろん怒鳴り声を出せばいいというわけではないから、自分の声が「響く」ということを見つけよう。けっこう勇気のいることだけれど。横隔膜をやわらかくして、空間を広く取ると、声もことばも挙動も「響く」。そこに精霊エコーの神話が思い出されてくるというのが当ワークショップの考え方だ。しくじるとパン神が出てきてパン祭りになるというやつ。

気魄から霊魂に切り替わり、内から抜けへ外れるという現象がある。それにみうが触れたとき、たしかにみうは「ぅふぁわぁ〜」とよろこんでいる(アレはよろこんでいたのね)。そして呪縛からの解放というのは、最小では関節で、次に相手と具体の関係で、さらには人間関係や「魂」の所属で、同じ「呪縛の解放」が起こってくる。みうの実家脱出と新天地への到達は、そのまま「内と抜け」だったみたいだな。岡本太郎の芸術に反応しているところもあるし、みうのテーマはあんがい「自由」そのものなのかもしれない。それでは作品に取り組んでいこう。倒れ込まなくてよろしい。モチーフはとりあえず「囚人の脱出」でいいんじゃないか。

【ページの空白を埋めるためだけの鬼ほどどうでもいい話のコーナー】

あなたのフィクション度を試してみましょう。次のセリフを、独りごとでいいので思いきりやってみてください。ただし、身体をまっすぐにしたまま、いっさい動かさず、顔も表情も動かさず、声の調子の変化だけでやってみてください。「小っちゃい、小っちゃい、小っちゃ〜い虫がいました。そこに、大〜きな鳥がバサササーッと飛んできて、ガブーッ！」。声の調子だけでその虫が「小っちゃい」ということを表わし、声の調子だけでその鳥が「デカい、いかつい」ということを表わすわけです。極端なほどやってみましょう。こんなささいなことが、じっさいにやってみるとすごくむつかしいものです。信じられないぐらいむつかしい。バサササーッ。もしこのことが少しでも出来るようなら、あなたはかなり話が上手な人です。ただし身体や顔が動いてしまってはだめですよ。ところでそんなものあるのかどうか知りませんが就職活動中に内心であこがれた職業は「お化け屋敷の設計者」です。

モチーフとストーリーの構造

九折空也

いちばん大切なのは作ひn……
それはいったん置いておいて。
本題の前につらつらと。
なんだ、ワークショップだの何だのといって、あいかわらず、意味のわからない変なことをやっている。
たしかにわたしのやっていることはヘンだ。
もしあなたが、わたしと同じことをやったとしたら、あなたはなんとなく「恥ずかしい」と感じるだろう。
いや、なんとなくどころか、はっきりと「恥ずかしい」だろう。
おれは恥ずかしい奴なのだろうか。
そうかもしれない。そうかもしれないというか、おれは、恥ずかしいことでないと意味がないと思っている。
そもそも、用事もないのに、自分の書き話したものを他者にさらけ出すなんて恥ずかしいことだ。
それは恥ずかしいことだけれども、かといって、居直ってはいけない。
おれは自分のことを恥ずかしい奴なのだと思っている。
もう長いこと、世間的に見て恥ずかしい奴というのをやっているので、おれ自身は慣れてしまった。
ふつうの人は、こんなことに慣れることはできない。
どこか神経がおかしくないとな。
でも、本当に神経がおかしいだけだと、本当にただのヘンな奴で、近所迷惑になってしまうので……
それで、おれは恥ずかしい奴でかまわないのだが、だからといって居直るのではなく、それ以上に「値打ち」がある奴でないとダメだとおれは思っている。
おれは恥ずかしい奴だが、何かしら値打ちのある奴でないといけない。
そう思い込もうとしているのではなく、じっさい、このわけのわからない奴の話を、こころを傾けて聞き取ろうとする人が少なからずいるのだから、そこには何かしらの値打ちがあるのだと、おれは思っている。
そう捉えないと、おれの問題じゃない、読んでくれている人に対して失礼だからな。
中には悪趣味で読んでいる人もあるのかもしれないが……いやいや、悪趣味といえば、こんにちではもっと愉しくて刺激的なコンテンツが他にいくらでもあるのだから、そういう人たちはとっくにヨソに行ってしまっただろう。
おれは恥ずかしい奴でかまわないが、同時に、それ以上に値打ちのある奴でなくてはならない。
世の中には、おれの逆で、まったく恥ずかしくない人もいる。ちゃんと勉強して学校を出て、堅実で生産的な職業に就き、結婚して家を建てて子をもうけて、ちゃんと税金も納めているし近所の人にも愛想がいいというような人だ。じつに尊敬に足る人で、恥ずかしさはまったくない。
ただ、そういうちゃんとした人の話を、そこまでこころを傾けて聞き取ろうとするかというと、あんがいそうでもない。
そういう人の話は、聞くまでもなく、何もかもが立派なのだろうなと、前もって知られているからだ。
おれは二十歳のころ、動物園の「ふれあいコーナー」にいき、ヤギに頭突き勝負を挑んだことがある。
ヤギは頭突きで力比べをするらしいということをどこかで知って、へえそうなのかと思い、
「オラオラ、かかってこいよ、力比べしようぜ」
と、かがみこんで動物園のヤギに頭頂をぐりぐり押しつけていた。
ヤギのほうは当然、
(なんやこいつ……)
とおれのことをうっとうしがるようだった。
途中で根負けしたのか、それともいよいよ腹が立ったのか、ヤギは軽く体をくねらせて、ジャブ程度の頭突きをおれの頭頂にくれた。
その威力の、強烈なこと。
ゴン！ という音が頭蓋骨に響きわたり、まぶたの裏にフラッシュが起こって星が飛んだ。
飼育員のお姉さんが、やはりおれのことを、
(なんやこいつ……)

と怪訝な目つきで見ていた。

人は、ヤギと頭突き合戦をしても勝つことができない。

また、動物園の「ふれあいコーナー」は、ヤギと頭突き合戦をするために設けられてはいない。

そんなことはどうでもいいのだが、おれはとにかく、そのように恥ずかしい奴なのだ。

頭突きに関しては、「ヤギはマジで強ぇえよ」ということを、自分の体験として確かめたかったのだ。

じっさい、ボスでも何でもない、ザコっぽいヤギだったのに、そいつに対してさえおれは、

「おまえ、めっちゃ強いな……」

と半泣きだった。

ワークショップの話をしている。この月刊ワーQは、もちろんワークショップの話で成り立つ冊子だ。「どこが月刊だよ」という指摘はもはや不要だろう。

おれがワークショップを開催し、すでにこれはおれのものというよりメンバーみんなのものであって、とても大切なものになっている。

もう生きているうちに、二度とこんなことはできないだろうな。

おれのやっていることを、仮に「世の中」、いまでいうところのSNSや掲示板に投げ込んでみたらどうなるだろう。

それはもう、

「きっしょｗｗｗ」

「キモすぎワロタ」

「こういうのいちばん寒いよな」

「ありがちな宗教でしょ」

「すべってるのに、当人は気づかないんだろうね」

「こういうのにだけはぜったいになりたくないｗ」

「共感性羞恥がヤバい」

という感じで、とにかくボロクソに言われるだろう。

こうしてボロクソに言うという行為を、いま世の中が「誹謗中傷」と捉えているのかどうか、正直おれにはよくわからない。

ただ、もしそのようにボロクソに言われたとして、おれはそのことを誹謗中傷だとか名誉棄損だとかで、訴える気にはまったくならないだろう。

「きっしょ」というのは、おれも思わなくはないからだ。

動物園のヤギと頭突きで勝負している奴を、あるていど「きっしょ」と思うところはおれ自身にもある。

赤の他人のやることなんてだいたい気色悪いと感じるもんじゃないか。

だから、そいつが恥ずかしい奴かどうかより、値打ちがあるかどうかが問題なんだろうな、とおれは思うのだった。

そしてそれが本当に焦点を置いているところはさらに別にある。

おれのやっていることは「きっしょ」でいいとする。そしてそれを「きっしょ」と評する、Aさんという架空の人物をここに設定しよう。Aさんはつまり、世の中における「まとも」な人だ。おれのように恥ずかしい人ではない。

Aさんはその立場からおれのことを「きっしょ」と言うのだが、ここでひとつの問題が立ち上がってくる。

ここに旅のプランを仮想する、そうだな、「三泊四日、京都を巡る旅」にしておこう。寺院もめぐるし、歴史探訪もする、美食もいただくし、伝統芸能も見物する、鴨川を歩き宇治川を歩く。抹茶、漬物、ゴマ豆腐、平等院鳳凰堂。夜になれば祇園や先斗町にも行き、酒も飲むしカラオケにも行くとしよう。

あなたはこの旅に行くとして、

・Aさんと一緒にいく
・九折さんと一緒にいく

のどちらを選ぶだろうか。

Aさんは「まとも」な人のはずだけれど、あなたはどちらを選ぶだろうか。

このあたりで、「あれ？」とおかしなことが起こってくる。

Aさんはたしかに「まとも」な人で、誰もAさんのことを「きっしょ」とは言わないのだが、一方で、なぜかそのAさんと一緒に三泊四日の旅に行きたいとは誰も言わないのだ。

誰も、Aさんのことがきらいなわけではない。

ただ、誰も口に出しては言わないが、

「Aさんと一緒に三泊四日の旅は〝キツい〟わ」

と感じているのだ。

「一泊二日なら、まあ」と思っていて、「三泊四日はキツい笑」と思っている。

おかしな話だ。Aさんの見立てによると、おれは恥ずかしい奴であり、おれこそが〝キツい〟奴のはずだ。Aさんのほうが「まとも」なのであって、Aさんは何も〝キツく〟ないはず、Aさんに比較されるおれのほうが人間的・精神的・文化的に劣等な存在のはずだ。

にもかかわらず、じっさいに三泊四日の旅を同道するとなると、急に全員がAさんのことを「キツい」と言い出す。「仕事ならしゃあなしに行くけど、プライベートではキツいわ」。

おれは意地悪を言っているのではない。ただ注目すべき事象を取沙汰しているだけだ。

おれの知るかぎり、Aさんは根っからこのことを知らないものだ。

Aさんは、おれのことを「きっしょｗｗｗ」と言い、こいつに比べたら自分のほうが「まとも」だということに、まぎれない確信を持っている。

しかもその確信は正しいのだ。世の中で「まとも」と「きっしょ」を分類するなら、Aさんがまともで、おれがきっしょだ。

Aさんは、その一般的な感覚に根差して、いわば「こころのまま」振る舞っているだけと言える。

そして、その「こころのまま」振る舞うAさんについて、なぜか、誰も一緒に旅行にいきたいとは思わないのだ。

そういう現象があるということを、Aさんは教わっていない。教わっていないし、まさかそんなことを、Aさん自身が気づいたり発見したりはしない。

ごくうっすらと、「何か」がヘンだ、「何か」がな……という状態が続くだけだ。

おれのやっていることのすべては、ヘンで恥ずかしくて「きっしょ」だ。それと比較して、Aさんの暮らしと営為は、すべてにおいておれよりもすばらしくなくてはいけない。

おれが友人と旅行にいくより、Aさんが友人と旅行にいくことのほうが交歓に満ちていなくてはならないし、おれの周りで友人がゲラゲラ笑うより、Aさんの周りで友人が笑うほうが真の愉快さの声音に満ちていなくてはならないし、おれと友人がする食事よりAさんとその友人がする食事のほうが、おれと友人が歩く景色よりAさんとその友人が歩く景色のほうが、鮮やかでおだやかでにぎやかでよろこびに満ちていなくてはならない。

そんなことを悠々実現しているAさんが、いま世の中に大量発生しているということなのだろうか？

どうもいま、「世の中」は、そんなに明るく相好を崩して活気に満ちて輝いているというようには思えないのだ。

少なくとも、「まとも」なAさんは、おれなどよりコミュニケーション能力が高くなくてはならない。そりゃそうだろう、おれのほうは「きっしょ」で「意味不明」なのだから。

でもAさんは、本当にコミュニケーション能力が高いのだろうか。あなたが想像した、Aさんとの三泊四日の旅、その旅の道中で、Aさんは始終あなたに対してコミュニケーション能力が「高い」のだろうか。

ここまで考えてくると、一瞬だけ、次のようなことを思う。

「ひょっとして、Aさんのほうが〝まともじゃない〟のか？」

ほんの一瞬だけそんなことも考えるが、ただちに「いやいや」と打ち消して思う。どう考えても「まとも」なのはAさんだ。Aさんは独自のワークショップを開いたりなんかしていないし、わけのわからないブログ記事を八千件も書いたりしていない。

Aさんは「まとも」だ。

でもあなたはたぶん、

「九折さんと三泊四日で京都の旅にいきたい」

と言ったとき、

「いいえ、あなたはそのAさんと三泊四日の旅に行くのです」

ということになったとしたら、きっと本当は悲しむと思うのだ。

まあ、じっさいにそうなってしまったら、それはそれ、しょうがないと割り切っていくことも必要だ。いったん、すべてを忘れてしまうしかない。せっかく旅行にいくわけだしな。それはそれ、だ。そのAさんと旅行にいくというのはなにも不幸というわけではない。

ただおれは、この「まともなAさん」の問題に焦点を置いている。

なぜまともでないおれが親しくて、まともなAさんが「キツい」のだろう。もしそんなことが本当にあるのだとしたらおかしな話だ。

　いよいよ本題に移ろう。

　いちばん大切なのは作品だ。

「たいせつ」を入れ替えてアナグラムにするとたとえば「せいたつ」になる。

「いちばん」は「ばちいん」になるし、「さくひん」は「ひさくん」になる。

　あああああ意味ねぇ〜！

　ここでアナグラムを作ることは無意味で不毛だ。ばちいんせいたつなのはひさくんだ。

　正面に山を見上げていると、右手から朝日が昇った。

　山はこちらを見下ろしている。

　文学カキ子は手に毛筆を持っていた。すでに使い古されて、老境にあるような白髪の細筆。

　カキ子の頬を青ざめた靄が撫でていった。右手からくる空気は東風だ。もう春なのだろう。

　しかしこの朝ぼらけに草花はまだ夜露に濡れており、清浄の大気はカキ子の鼻腔に氷点下のように冷たい。

　すでに打ち捨てられたという趣きのある公園の一画に、風化と浸食の進んだコンクリート・テーブルがある。カキ子はその天板に半紙を置き、想像力をめぐる物語を書きおろしていこうとする。

　おばあさんが川で洗濯をしていたところ、川上から大きな、大きな……

　そのように書き進めたとき、カキ子は、

「これはどこかで見たことがある物語だ」

　という気もした。しかしその物語がどこで見たものか、あるいはどこで聞いたものかは思い出せない。その題も内容も何であったか。

　それを思い出すためにも、カキ子はさらに書き進めることにした。

　おばあさんが川で洗濯をしていたところ、川上から大きな太郎が、どんぶらこ、どんぶらこ、と流れてきました。

　おばあさんはおどろき、その流れてくる大きな太郎を捕まえて、川辺に引き上げると、

「ひゃあ、これはなんという、大きな太郎だ。これはぜひ持ち帰って、おじいさんにも見てもらいましょう」

　おばあさんがその大きな太郎を持って帰り、おじいさんに見せたところ、

「これはなんと大きな太郎だろう。これはひとつ、割ってみて、その中身を見てみようじゃないか」

　とおじいさんは言いました。

　おじいさんがナタで太郎を真っ二つに割ったところ、どういうことでしょう、なんと中から、元気な桃が出てきました。

　おじいさんとおばあさんはとてもおどろきました。

「太郎の中から桃が出てくるとは。これはなんとしたことだろう。よし、この桃を、太郎桃と名づけよう。太郎から出てきた太郎桃だ」

　それからおじいさんとおばあさんは、太郎桃をとてもかわいがり、大切に育てました。大切に育てましたが、太郎桃は桃なので、すくすくと成長するということはありません。桃はいつもそこに転がっているだけです。

　そして数年の月日が経ったとき、太郎桃はおじいさんとおばあさんにこう言いました。

「ここまで育ててもらったご恩は忘れません。わたしは恩返しに、鬼ヶ島に行き、鬼退治をしてこようと思います」

　太郎桃が鬼退治を言い出したとき、おじいさんとおばあさんはとても心配しましたが、太郎桃の決意は固いものでした。それでおじいさんとおばあさんは、太郎桃を鬼ヶ島に送り出すことにしました。

「そうだ、これを持っていきなさい」

　おばあさんが、太郎桃の腰に、きびだんごを結わえてくれました。腰といっても、どこが桃の腰なのかはよくわかりません。

「ありがとうおばあさん。それではおじいさん、行ってきます」

　行ってきますとは言ったものの、太郎桃は桃なので動くことができません。それで、見かねたおじいさんが強めに太郎桃を蹴ると、太郎桃は無事に坂道を転がっていきました。

　しかし、坂道を転がりながら太郎桃は気づきました。

「鬼ヶ島が、どこにあるかわからない」

　あわてて太郎桃は、通りすがりの犬にたずねました。

「ごめんください。鬼ヶ島はどこにありますか」

　犬はこう答えました。

「夏には白い夜がやってくる、その場所にある」
太郎桃にはよくわかりませんでした。
つづいて太郎桃は、通りすがりの猿にたずねました。
「ごめんください。鬼ヶ島はどこにありますか」
猿はこう答えました。
「東も西もない、南しかないその場所にある」
やはり太郎桃にはよくわかりません。
太郎桃は、とおりすがりのキジにこうたずねました。
「夏には白い夜がやってくる、東も西もない、南しかないところへわたしを連れて行ってください」
キジは太郎桃を足で掴んで飛び上がると、太郎桃を運んでいきました。
そしてあるところで、キジは太郎桃を地面に投げ捨てました。
「痛っ」
こうして太郎桃は鬼ヶ島に着いたのです。
「なあんだ、ここは北極点じゃないか。たしかにここなら、夏は白夜だし、北極点だから東も西もない。すべての方角は南だ」
太郎桃のところに、鬼がやってきました。
「ようこそ、鬼の棲む極北へ」
太郎桃はこう答えました。
「やあやあ、遠からんものは音に聞け、近くば寄って目にも見よ、ここで会ったが百年目、恨み晴らさでおくべきか、盲亀の浮木、優曇華の花咲き待ちたるここちにて〜　いざ尋常に、勝負、勝負」
太郎桃にかまわず、鬼はこう話し出しました。

……全体に見えるもののうち、モチーフの部分をM部と称し、ストーリーの部分をS部と称することにしよう。ふつうはそれだけで十分だが、なにしろわざわざ鬼がやることだから、ここではさらに穿（うが）って、モチーフをM1、M2、M3とランク分けする。M1が大モチーフ、M2が次点のモチーフ、M3がさらに次点のモチーフだ。同様に、ストーリー部もS1、S2、S3とランク分けする。するとここにはどのような構造が見つかってくるか？
M1はすでに繰り返し述べられている通りだ。「いちばん大切なのは作品です」というモチーフ。M2は「アナグラム、入れ替え、無意味で不毛」というモチーフ。M3は思いがけないことに「北」がモチーフだ。モチーフ部はそのように設計されている。
ストーリー部はどうだろうな。ストーリー部は、あまりこの場所から詳しくは言うべきではないだろう。なにしろおれはこのとおり、鬼ヶ島にいるのだから……。ストーリー部は下から見ていくことにしよう。S3について語ることはかまわないだろう？　おれはこうして鬼ヶ島にいるのだから。お前、太郎桃が、鬼退治にやってくるのがS3だと語ることは、まったくいまのおれたちにふさわしいことじゃないか。まさにいまのおれたちはそのS3のクライマックスにいるのだからな。
このS3の立場から、S2やS1に言及することは、いわゆる「メタい」というやつで、度が過ぎれば構造を損傷する不適切なことだとおれは思うがね。だから〝それなり〟に言うに留めよう。S2というと、どこかの誰かが毛筆で物語でも書き綴っているんじゃないか？　打ち捨てられた公園で、北を向いて。そこからさらに、S1というと……いや、その前にだ。
太郎桃よ、S3に生存するお前が、M3「北」の影響を受けて、この極北の鬼が棲む場所へ来ていることは察しがつくだろう。であればさらにM2、お前の存在じたいが「アナグラム、入れ替え」から成り立っているということにも気づけるのじゃないか？　そのことまで気づけば、M1、「作品」というものの中にお前が生存しているということも統合的に知られるだろう。
モチーフ部とストーリー部は、別の次元にありながら、相互に影響を与えている。モチーフとストーリーは、別の次元にあるからこそ正しく影響しあうのであり、これらが混淆すると、構造は失われ、同時にあるべき影響も損なわれてノイズと化し、その「命」も消えていってしまう。
さてそれでは、S1のこととは関係なくな。おれはこの極北に棲む鬼、S3の極点に棲む者としての話をしよう。≪おれのやっていることは妙ちきりんで、人々の前に陳列すればさぞ侮蔑と嘲笑の的となることだろう。けれども、その嘲笑の主たる「まとも」な人たちは、おれのこうした愚かしくささやかなことをさえ、実現はできないというのが事実という向きもあるのじゃないか≫。おれはそのことに不平を言っているのではない。親身になって警告を発しているつもりなのさ。

おれはこんな愚かしくささやかなことのためにさえ、必死にやってこざるを得なかったし、冗談抜きに心血を注ぐようにやってくるしかなかった。それで、幸いという以上の、奇蹟的なこととして、おれは大切なものを友人らと共有できることになったわけだ。もう二度とこんなことはできないだろう。こうしたおれの姿が、傍からはどれだけ不恰好に見えるものか、おれはよくよくわかっている。おれ自身、そうしたおれの恥ずかしい姿を揶揄してふざけるということもよくする。だが世の中の、不恰好でない「まとも」な人たちは、その余裕ある立場とは裏腹に、じつは巨大なピンチにむしばまれていっているのじゃないか？　おれはそのことの警告を発したいのだ。

鬼の話にやりこめられた太郎桃は、すごすごと帰っていきました。

太郎桃は、家に着くと、おじいさんとおばあさんにこう告げました。

「鬼たいじを、じたいします」

おじいさんとおばあさんは、ずっこけました。めでたし、めでたし……

ここまで書き上げたとき、すでにカキ子の左手に落日は赤かった。右手には紺色の空が広がりはじめ、夜闇を恐れる鳥たちが懸命につばさを掻いて高高度を西の巣へと飛んでいった。

カキ子は自分の書き上げた物語が、紫色の天に照らされるのを見下ろして、なぐさめられていた。

あまりに愚かしくささやかな、カキ子の書いた物語は、その著者ともども、まともな人から見れば恥ずかしく不恰好なものだったろう。

カキ子が見上げると、山のてっぺんに、身じろぎもしない極北の星が鈍く灯っていた。

というわけで、ばちいんせいたつなのはひさくんだ。

違った、いちばん大切なのは作品だ。というわけで、今回の月刊ワーQ、モチーフとストーリーの構造を展示させていただきました。今後ともどうぞよろしく。

文責：九折空也

九折評

マニアック！　お疲れさん！

巻末特別付録ゲームブック　九折空也・著

ワークショップ・クエスト

〜世田谷の章〜

（※ルール：入手したアイテムは一度使用すると消費されます。再入手は可能です）

【1】

あなたは世田谷公園の自由広場にいる。
この世界には闇の大王がいるというウワサだ。
どうする？

▼ 東、噴水広場へ行く［2］へ
▼ 西、スタジオに向かう［7］へ
▼ 南、三宿通りに行く［3］へ
▼ 北、いちょうトイレに行く［6］へ

【2】

噴水広場だ。悦びの泉がある。
あなたは、

▼ 「よいCD」を（持っていれば）再生する［46］へ
▼ 「よくないCD」を（持っていれば）再生する［47］へ
▼ 西、自由広場へ戻る［1］へ
▼ 北、いちょうトイレへ行く［6］へ

【3】

三宿通りだ。
ゆかさんがいた！
「ハァ〜　ここが世界一おいしいインドカレー屋さんやで〜」

▼ 股関節を（持っていれば）見せつける［4］へ
▼ 股関節を持っていない［5］へ

【4】

「なかなかエエ股関節しているやないか。よっしゃええやろ、この定食やるわ」
あなたは**アイテム「マジックスパイス」を入手した。**
「早よスタジオ向かったほうがええで〜」
あなたはスタジオに向かうことになった。

▼ スタジオに向かう［7］へ

【5】

「なんやあんた股関節できてないやないか！」
バチーン！
しまった、あなたは殴られてしまった！
オゴッ！　あなたは吹っ飛んで発勁を味わうことになった！

GAME OVER

【6】

世田谷公園のいちょうトイレだ。
ニンジャ青年がいた！
「あっ、これ、ぼくの使っている木刀ね。もう、けっこう使い込まれているよね。で、こう、肘を、曲げない」
あなたは**アイテム「木刀」を入手した。**
「そろそろスタジオに向かわないとなあ」

▼ スタジオに向かう［7］へ
▼ 南、自由広場へ戻る［1］へ

【7】

スタジオに向かう道中の、三軒茶屋駅前だ。

➤ 東の店に入る［8］へ
➤ 西の店に入る［11］へ
➤ 北の店に入る［16］へ
➤ スタジオに向かう［22］へ

【8】

三軒茶屋駅前のダイエーだ。
なげしこさんがいた！
「ふぇっ！? いま、お茶買っているところですけど」

➤ 埼玉のおしゃれ話をする［9］へ
➤ お菓子をもらう［10］へ
➤ 駅前に戻る［7］へ

【9】

しまった！ そんなものはなかった！
ぐはっ！ あなたは「うちの近所にあるのは鳥貴族」という話をねっちり聞かされてしまった！
GAME OVER

【10】

「ふぇっ！? お菓子！ ふたつあるけど、どっちがいい？」
（常にどちらかひとつしか所持できない）
「チョコレート」をもらう［チョコレートを入手］
「白い恋人」をもらう［白い恋人を入手］

➤ 駅前に戻る［7］へ

【11】

オリジン弁当だ。
エミルカさんがいた！
「おなか空いた。何を食べようかなあ」

➤ しょうゆガーリックからあげを勧める［12］へ
➤ ヘルシー低カロリーサラダを勧める［13］へ

【12】

「やっぱりそうよね～ しょうゆガーリックと、あと和風おろしポン酢ください」
エミルカさんはごきげんだ！
「わたし映画が好きなのよね」

➤ 映画Aを（持っていれば）勧める［14］へ
➤ 映画Bを（持っていれば）勧める［15］へ
➤ またの機会に［7］へ

【13】

「はぁ？ わたしおなか空いているんですけど」
しまった！ エミルカさんはお怒りだ！
「あなたのような、センスのない人は、胸部リンパのツボを破壊しまーす」
ギョエー！ あなたは胸部リンパのツボを破壊されてしまった。
GAME OVER

【14】

「これ、『ザ・カンニング IQ=0』じゃない。いい映画よね」
エミルカさんはごきげんだ！
「お礼にどちらかをあげるね」
（常にどちらかひとつしか所持できない）
ヨーロッパの街並みのポストカードをもらう［ポストカードを入手］
色んな場所で使えるクーポン券をもらう［クーポン券を入手］

▼ 駅前に戻る［7］へ

【15】

「これ、『ラ・ラ・ランド』じゃない。わたしこの映画すごく苦手なのよね」

しまった！　エミルカさんはお怒りだ。

「あなたのような、センスのない人は、腋窩リンパのツボを破壊しまーす」

ギョワー！　あなたは腋窩リンパのツボを破壊されてしまった。

GAME OVER

【16】

茶沢通りだ。

踏子さんがいた！

「プリマ！　バレエのステップはこうでこうでこう！」

▼ チョコレートを持っている［17］へ

▼ チョコレートを持っていない［18］へ

【17】

「えーチョコレートあるんですか、えー、ちょっと聞いてくださいよ、受験勉強なんてねえ、ほんとチョコレートなしではやっていられないですよ。えーだって」

しまった！　踏子さんがヒートアップして際限なく話しだしてしまった！

グエー！　あなたは前向きに洗脳されて資格試験を受けることになった。

GAME OVER

【18】

「あああ、コジョカルがギエムで大野一雄でニジンスキーですよイサドラ」

踏子さんは激しくステップを踏み始めた。

あなたはそれを見て学習し、**アイテム「股関節」を入手した。**

▼ 踏子さんについていく［22］へ

▼ 踏子さんをすり抜ける［19］へ

【19】

三軒茶屋駅前の西友だ。

牛肉売り場にゆきさんがいた！

▼ 牛タンを買う［20］へ

▼ 牛スジを買う［21］へ

【20】

「これは、仙台でも有名なお店の、牛タン、なんですね。子供たちも、大、好きです」

ゆっくりとした口調で言われて、**あなたはアイテム「牛タン」を入手した。**

▼ 駅前に戻る［7］へ

【21】

「あなたは、どうして、仙台の、わたしが、ここに、いるのに、牛タンではなく、牛スジを、買うの、かしら？　それに、あなたは、ふだんも」

しまった！　ゆっくりとした口調で責められた上に、言われてみたらふだんもいろいろあった。

ぐわーっ！　あなたは自分をちゃんとしなきゃと思わされた！

GAME OVER

【22】

三軒茶屋のスタジオ・マイレッスンだ。

- ➤ Aスタジオに入る［23］へ
- ➤ Bスタジオに入る［24］へ
- ➤ Cスタジオに入る［25］へ
- ➤ Dスタジオに入る［33］へ

【23】

Aスタジオだ。

Zyyがいた！

「これ、いま神ゲーだって評判なんスけどぉ」

- ➤ 牛タンを（持っていれば）わたす［26］へ
- ➤ 牛タンを持っていない［27］へ
- ➤ URLを持っている［28］へ

【24】

しまった！　Bスタジオには誰もおらず、サーキュレーターが回っているだけだった。

ブオオオーン！

GAME OVER

【25】

しまった！　Cスタジオでは、きれいなお姉ちゃんたちがキメキメのダンスを練習中だった！

ぐおおーっ！

GAME OVER

【26】

「えー、牛タンいいんすか、マジありがたいっス。お礼にウメツーのURL差し上げます」

あなたは**アイテム「URL」を入手した。**

- ➤ ［28］へ

【27】

「カプコンがモダンモードを導入して、それでいま新規参加者が増えていて、けっこうアツいんスよ。で、このモダンモードって賛否両論あるんスけど、ウメハラさんいわくこのシステムは史上まれに見るスゲー大成功って話で、まだもちろん各キャラの調整中なんスけどぉ」

しまった！　**Zyy**がストリートファイターVIの話を際限なく始めてしまった。

うぎゃーっ！　あなたは迅雷脚のコンボを練習し始めてしまった！

GAME OVER

【28】

かなみがいた！

「こんにちは。わたしの気持ちはいま揺らいでいます。横浜の海が見たい。もうひとつは……」

［運チェック］

スマートフォンの時刻表示を見て、現在時刻が「何分」かを見てください。その末尾は、

- ➤ 0あるいは1だった［29］へ
- ➤ 2〜9だった［30］へ

【29】

「ダイヤモンドが欲しい！」

しまった！　かなみはあなたにダイヤモンドをねだり始めた。

「ダイヤモンド、ダイヤモンドが欲しいです」

ダメだ、目の色が変わっている！

ぐはぁーっ！　あなたは数時間のウインドウショッピングに付き合わされることになった！

GAME OVER

【30】

「いえ、やっぱり横浜の海にしておきます」
かなみの情緒は安定した。
みうがいた！
「あぅぅ……」

➤ 白い恋人を（持っていれば）わたす［31］へ
➤ チョコレートを（持っていれば）わたす［32］へ
➤ 何もわたさない［22］へ

【31】

「あぅぅ……それわたしの地元にあるやつです」
あなたは**アイテム「情報1」を入手した。**

➤ ［22］へ

【32】

「あぅぅ……」
みうは懐いた。
あなたは**アイテム「みう」を入手した。**

➤ ［22］へ

【33】

まいこさんがいた！
「ホッ！　わたしは看護士、わたしは聖書を読んでいるので患者さんが治ります。そしてやっぱりロックンロールなんですよね」
ロックンロールと言えば……？

➤ マイケルジャクソンの話をする［34］へ
➤ ニルヴァーナの話をする［35］へ

【34】

「マイケルは、ホッ、とてもいい歌声です。マイケルはとてもきれいな人です。いいことを言ったので、あなたは良しとしましょう」
よかった、あなたは良しとされた。
「代わりに映画のDVDをひとつあげましょう。どちらがいいですか、ホッ、好きなほうを選んでください」
青春コメディ映画を選ぶ［映画Aを入手］
ロマンティック・ミュージカル映画を選ぶ［映画Bを入手］

➤ ［36］へ

【35】

「そんな、麻薬を使っているみたいなミュージシャンはいけません」
しまった！　まいこさんは否定的だ！
「そんなものを聴いているあなたには、罰として14ゲージの注射をしてあげましょうね」
まずい、とてつもなく太い注射針が取り出された！　肘の内側をアルコール綿で拭かれる。
「じゃあちょっとチクッとしますからね～」
プスッ。
ホギャー！　あなたは採血されてしまった。
GAME OVER

【36】

Riemerschmidがいた！
「え～　なんかわたしも木刀振りたい～　え～」

➤ 木刀を持っている［37］へ
➤ 木刀を持っていない［38］へ

【37】

「え～　やった～　じゃあわたし木刀振る～」
Riemerschmidはごきげんだ！

➤ ［３９］へ

【３８】

「え～　木刀振りたい～　これ、どちらかあげるから木刀取ってきて」

あなたは**アイテム「よいＣＤ」か「よくないＣＤ」のどちらかを選んで入手。**

➤ 木刀を取りに戻る［１］へ

➤ 木刀を取りには戻らない［３９］へ

【３９】

ナゾの鳥がいた！

「おなか空いたナゾの鳥♪」

➤ マジックスパイスを（持っていたら）わたす［４０］へ

➤ 白い恋人を（持っていたら）わたす［４１］へ

➤ がまんさせる［４２］へ

【４０】

「おいしいナゾの鳥！　カレー食った♪　カレー食った♪」

ナゾの鳥はごきげんだ。

➤ ［４３］へ

【４１】

「これはこれでおいしいナゾの鳥」

ナゾの鳥はごきげんだ。

「お礼にいい情報あげるナゾの鳥。津田沼より市川のほうがイケているナゾの鳥」

あなたは**アイテム「情報２」を入手した。**

➤ ［３９］へ

【４２】

「おなか空いたナゾの鳥（怒）！」

しまった、ナゾの鳥はお怒りだ！

あなたはとつじょ、鳥ガラ・もみじ・白ネギ・羅臼昆布・かつおぶし・にぼしを用意させられ、ラーメンを作らされることになってしまった！　豚バラ肉を甘辛く煮た即席のチャーシューも外せない。

なんてことだ、ずいぶんな時間をかけて仕込むことになった！

ズソーッ！　うまい！

GAME OVER

【４３】

とつじょ、まいこさんが何かの気配に反応し始めた。

「ホッ！　この気配……わたしにはわかります。闇の大王が、この世田谷のどこかにいます。キーワードはイチョウです。パーン！（柏手）」

あなたはこの世界を救わねばならない！

➤ キャロットタワーに行く［４４］へ

➤ 東京大学のイチョウ並木に行く［４５］へ

➤ 世田谷公園のトイレに行く［５０］へ

【４４】

しまった！　キャロットはニンジンであってイチョウとは何の関係もない。

ああーっ！　あなたは展望台でまったりした時間を過ごしてしまった！

GAME OVER

【45】

あなたは東京大学・駒場キャンパスのイチョウ並木にたどり着いた。いいムードだ。
しかし、しまった！　ここは目黒区であって世田谷区ではない！
ヌギャーッ！　あなたは東大生に囲まれて学歴差別をされてしまった。
GAME OVER

【46】

ザバババババー。
ＣＤを再生すると、噴水池からユウサクが現れた。
ＣＤからはオリビア・ニュートンジョンが流れている。
「あっ……僕そういうのわからないです」
Have you never been mellow?…
「あっ」
しまった！　どこからともなく死が舞い降りてくる！
ギャース！　あなたはデスメタルを聴く人になってしまった！
GAME OVER

【47】

ザバババババー。
ＣＤを再生すると、噴水池からユウサクが現れた。
ＣＤからはナパーム・デスが流れ出した。
「ああ～　グラインドコア、いいっすねえ」
You suffer but why?
まずい、このままでは死が舞い降りてくる！
あなたは、

- ➤「みう」を持っている［48］へ
- ➤「みう」を持っていない［49］へ

【48】

あなたはみうを使用した。
「あなたは天国に行けません」
みうが言うと、ユウサクは、
「ええ……」
とたじろいだ。死は舞い降りず霧散していった。
「目が覚めました。いい教えを受けたので代わりに情報を差し上げます。向かいのデニーズの駐車場に、なんかヤリスが停まっていましたよ」
あなたは**アイテム「情報3」を入手した。**

- ➤［1］へ

【49】

You suffer but why?
ユウサクは叫びつづけている。
しまった！　そのうちあなたも、
You suffer but why?
と叫びだしてしまった！
ウゴゴゴ！　あなたはナパーム・デスになってしまった！
You suffer but why?
GAME OVER

【50】

世田谷公園のいちょうトイレだ。
ニンジャ青年はいない。ニンジャ青年はどこへ行ったのだろう。
あなたは、

- ➤情報1を（持っていれば）使う［51］へ
- ➤情報2を（持っていれば）使う［52］へ
- ➤情報3を（持っていれば）使う［53］へ
- ➤何らの情報も持っていない［51］へ

【51】

ニンジャ青年を追跡できる情報を持っていない。

あなたは高らかに叫んでみた。

「白い恋人は北海道みやげ！」

しかし何も起こらなかった。

……しまった！　時間が過ぎてゆき、世田谷公園では朝のラジオ体操が始まってしまった。

「♪新しい朝が来た〜」

ゴフッ！　あなたは腕を前から上にあげて、大きく背伸びの運動をしてしまった！

GAME OVER

【52】

「津田沼より市川の方がイケている！」

あなたは高らかに叫んだ。

すると民たちが応えて、

「そのとおり。なにしろ市川駅には紀伊国屋が入っている」

と加勢した。

しかし、より東の民たちが叫んでこう言った。

「市川は市だが、そもそも津田沼は市じゃない」

しまった！　津田沼は津田沼市ではなく習志野市らしい！

ぐふっ！　あなたはＪＲ総武線になってしまった！

GAME OVER

【53】

「向かいのデニーズにヤリスが停まっていたはずだ」

あなたはニンジャ青年を追跡することにした。

デニーズの駐車場に着くと、ニンジャ青年がいた。

ニンジャ青年はあなたのほうを振り向いて言った、

「ふっふっふ、どうやら気づいたようだな。バレてしまっては仕方ない、そうだ、おれが闇の大王だ」

ニンジャ青年が正体をあらわした！

「フハハハハ、われに、ノースリーブが似合う若い女の子を与えよ！　頼むから！」

どうする？

- ▼ 攻撃する［54］へ
- ▼ ポストカードを（持っていれば）使う［55］へ
- ▼ クーポン券を（持っていれば）使う［56］へ

【54】

「あっ、そういうのはね、いけないと、思うねえ。うん。暴力反対。そういうの、いまってすごく怒られるから。どこの企業もほら、コンプライアンスとか、すごくうるさくなっているから。ねえ」

しまった！　何かうやむやで無気力な感じにされてしまった！

グハーッ！　あなたはよくわからなくなってしまった！

GAME OVER

【55】

あなたはポストカードを突きつけた。

「えっ、この街並み、うわあ豪邸じゃん、高級住宅街じゃん……しかも歴史まであるじゃん。うわー、おれこういうところ住みたいよぉ〜　１Ｋのマンションとは違うんだよなあ」

どうやらマジのようだ！　ニンジャ青年は大きなダメージを受けた。

あと一押しで倒せるかもしれない！

- ▼ 攻撃する［57］へ
- ▼ 情報2を使う［58］へ
- ▼ 映画Bを（持っていれば）使う［59］へ

【56】

「えっ、このクーポン券、おれの行っているサウナで使えんじゃん。サウナだよサウナ。人生ってもう

サウナだよ。思いきり汗出して、そのあとに水風呂に入ったら、もう何もかも忘れて、何かをやりきったーって感じするもん」
　しまった！　クーポン券でニンジャ青年は調子づいてしまった！
「きみもサウナ行く？　最近、いいところたくさんあるよ。おれ紹介するから」
　ゲェーッ！　あなたはサウナに行くことになってしまった！
GAME OVER

【57】

　いちかばちかの攻撃だ！
［運チェック］
　スマートフォンの時刻表示を見て、現在時刻が「何分」かを見てください。その末尾は、

▼　偶数だった［60］へ
▼　奇数だった［61］へ

【58】

「津田沼より市川のほうがイケている」
　あなたがそう告げると、

「ぐっ、あっ、そうかも……いやっ、そんなことないぞ。あれっ？　んっ？　でもそうかな？　あれっ、うわっ」
　ニンジャ青年は体勢を崩した！　攻撃のチャンスだ。
［運チェック］
　スマートフォンの時刻表示を見て、現在時刻が「何分」かを見てください。その末尾は、

▼　0だった［60］へ
▼　1〜9だった［61］へ

【59】

　ロマンティック・ミュージカルが再生される！
「うわーなんかこういうのってイケているのかなあ。たぶんイケているんだろうなあ。みんな元気だもんな。女の人たちみんな美人だもんな。よーし。あれっ、でもなにかよくわかんないぞ。とりあえずスクワットしながら映画を観よう。うーん話の筋がよくわからないぞ」
　だめだ、あまり効果がなかった！
　もういちかばちかの攻撃をしかけるしかない！

▼　［57］へ

【60】

「ふわぁ……あ、なんかもうこんな時間だ。なんかね、最近、この時間帯になるともう眠いんだよ。なんでだろうね？　あーなんか、このまま寝ちゃえばぜんぶ問題なーい……おれ寝ちゃうとぜんぶ忘れちゃうタイプだから」
　しまった！　眠気のことを忘れていた。ニンジャ青年は寝落ちしてしまった！
　ゴハァ！　あなたはニンジャ青年の疲れ切った寝顔を見るだけになった！
GAME OVER

【61】

　ズバババーン！　あなたの会心の一撃が炸裂した！
「えー、うわー、おれ何やってんだろ。ちゃんと、やることやらないと。闇の大王とか言っている場合じゃないよ。なんのためにここまで生きてきたの。ちゃんと仕事して、ちゃんと活躍しないと。まだまだ人生長いんだよ？」
　ニンジャ青年は悔い改め、自戒して光のもとに立ち返った。
　こうして世界は救われたのだった。あなたの勇気と冒険はこの先ずっと語り継がれるだろう。
The END